新平家戦記

亜荘界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新平家戦記

【Ｎコード】
Ｎ１７３７Ｌ

【作者名】
亜荘界

【あらすじ】
壇ノ浦で滅び行く運命にあった平家。その合戦の指揮を執るのが平家の総師平宗盛から弟の知盛に変わったことで運命が変わった。亡き清盛の遺産ともいうべき宋交易用の大船の船団が平戸島に現れた。
知盛はその船団を指揮し、壇ノ浦の合戦を平家の勝利へと導いた。
その後知盛は博多に平家の拠点を移して源氏と対決に臨んだ・・・・・

「序　清盛の夢宴」

「新平家戦記」

主な登場人物

＜平家方＞

・平知盛　平清盛の四男で中納言、兵馬に優れた平家一の勇将。

・平宗盛　平清盛の三男で内大臣、兄の平重盛が亡くなった後の平家の総帥。

・平資盛　重盛の次男で近衛権中将。有盛は弟。

・平経盛　清盛の弟。

・平教盛　清盛の弟で中納言。

・平教経　平教盛の子。平家一の猛将。

・平時忠　清盛の妻時子の弟。大納言。

・伊藤景清、伊藤景家、平盛時、平盛澄、源李定は平家の郎党で侍大将。

・建礼門院　清盛と時子の子で徳子、高倉天皇の中宮で安徳天皇の母。

・二位の尼　清盛の妻の時子。清盛没後に尼となる。

・九州のおける平家の家人

筑前　山鹿秀遠、原田種直、美気敦種、賀集種益、中原清業

肥前松浦党　松浦正、松浦直、佐志調、波多保、松浦毅

豊後　宇佐公通、板井種遠

・謝国栄　宋の慶元府（寧波）出身の商人謝邦明の子、博多で平家の宋交易に関わる。

＜源氏方＞

・源頼朝伊豆で北条氏の後援を受け反平家の旗を上げる。

・源範頼頼朝の弟で、平家追討軍の山陽道軍の総大将。

・源義経（みなもとのよしつね）頼朝の弟で、平家追討軍の搦手軍の総大将。

・源氏の主な武将

安田義定（やすだよしさだ）　甲斐の将、梶原景時（かじわらかげとき）　相模の将、土肥実平（どひさねひら）　相模の将、

熊谷直実（くまがいなおざね）　武蔵の将、田代信綱（たしろのぶつな）　伊豆の将、三浦義連（みうらよしつら）　相模の将、

北条義時（ほうじょうよしとき）　北条時政（ほうじょうときまさ）の次男、

足利義兼（あしかがよしかね）　下野の将、千葉常胤（ちばつねたね）　下総の将、仁田忠常（にったただつね）　伊豆の将、

比企能員（ひきいしかず）　武蔵の将、和田義盛（わだよしもり）　相模の将、畠山重忠（はたけやましげただ）　武蔵の将

「序：清盛の夢宴」

治承四年（１１８０年）九月。

前太政大臣平清盛は坂東における源頼朝や西国での謀反の報を聞きながらも、平家の権力は磐石である事を信じ、京より遷都した福原（神戸市兵庫区）の都において自身の別宅で月見の宴を執り行った。福原は平家が宋交易の拠点として開いた湊、大輪田泊（神戸港）を見下ろす高台の地にあり、京の夏の暑さ、冬の寒さを逃れる為に清盛が別宅を構えたのがその始まりだ。

清盛の別宅は雪見御所と呼ばれ、寝殿造の豪華な屋敷で、海からの風が穏やかに吹きぬける高台にある。この雪見御所の庭園にある東屋から眼下に望む大輪田泊で帆をやすめる船を眺めるのが清盛の楽しみの一つでもあった。

瀬戸の海に浮かぶ中秋の名月をめでようと高倉上皇（８０代）、安徳天皇（８１代）を招き、平家一門、福原に屋敷を構える公卿らが次々と雪見御所に集まった。

清盛の妻時子の弟の大納言平時忠、故重盛の息子で近衛中将平維盛と近衛権中将平資盛の兄弟、大納言平宗盛、御厨別当平知盛、従三位蔵人頭平重衡ら清盛の息子と、清盛の弟で正三位修理太夫平経盛、正三位参議平教盛、正二位権大納言平頼盛、正四位下薩摩守平忠度、教盛の息子で越前守平通盛、公卿では関白の近衛基通、大納言藤原隆房などだ。

雪見御所の主殿には高倉上皇、安徳天皇とその母の徳子が集まり関白の近衛基通や大納言平時忠、藤原隆房らと談笑を交わし、東対や東北対においても集まった平家一門の者らが酒を酌み交わしていた。前年の治承三年（１１７９年）には清盛の跡継ぎである長男の重盛が病死し、三男の大納言宗盛が清盛の後継の地位に付いた。宗盛の周囲には一門の者や公卿が集まったが、重盛の子である維盛、資盛兄弟の廻りに、人はほとんで集まらず、寂しい限りだった。資盛は既に平知盛と共に宇治平等院の戦で源頼政と戦いこれを滅ぼしていたが、維盛はこの月見の宴が終れば、坂東で叛乱を起した源頼朝討伐の軍勢を率いて出陣する事になっていた。

そんな状況を嫌った知盛は一人で東対を抜け出し、庭園に出た。
「ザワ、ザワ」と庭の松の枝を僅かに揺らす風、その風を狩衣の袖に受けながら知盛は雑色や下人が忙しげに月見の宴の仕度を行っている釣殿の脇を抜け、池の中央に設けられた中ノ島への橋を渡った。
「カツ、カツ」橋を鳴らして渡る知盛の耳に中ノ島の東屋からの話し声が聞こえた。
「誰があのような場所で」知盛が不思議に思って近づくと、聞きなれた父清盛の声だ。
知盛が東屋の方を見ると、清盛は東屋の中で立ち上り、大きく腕を振り、何艘もの大船が帆を休める大輪田泊（神戸港）を指し、側にいる者に何やら話をしていた。
東屋に近づいた知盛に、清盛が話している内容が聞こえた。
「どうじゃ、博多の袖の湊には及ばぬが、この大輪田泊も中々の湊になったであろう。わしの夢は陸奥や薩摩などの諸国の荷を満載した大船や、玄界灘を押し渡り宋との交易品を満載した大船が五十艘も百艘もこの大輪田泊に帆をやすめる姿をここから眺めることだ。我が夢を適える為、力を貸してくれ。頼む」
平家一門の総帥として命を下すことに慣れた清盛が珍しく相手に頼み込んでいた。

知盛は清盛が誰と話しているかも気になったが、話の内容にも興味を引かれた。
「知盛か、ちょうどよい所へまいった。ここに入れ」
知盛に気付いた父の清盛は、機嫌のよい声で招いた。

東屋の中には父清盛の外に見知らぬ二人の男がいた。
一人は宋服を着た初老に差し掛かった男、もう一人は狩衣を着た、日に焼け、潮の匂いがする若い男だ。
「我が息子の知盛だ。こちらは博多の唐人街に店を構える謝邦明殿だ。我が大宰府大弐（次官）の時、博多の袖の湊を築く際に博多を訪れ、邦明殿の屋敷にはよく滞在した。今は、宋交易に随分と力を貸してもらっている。邦明殿の本家は宋の慶元府（寧波）にあって、宋国内だけでなくわが国や高麗、越、天竺まで手広く商を行っている。邦明殿の博多の店も宋や高麗と手広く交易を行っておる」
清盛はそこで一旦言葉を止め、謝邦明の脇に座る若者を立たせた。
「この者の名は謝国栄だ。我と謝殿の妹の美栄殿との間に生まれた子で、お前の弟になる。これの母の美栄はこの子を生むと直ぐに亡くなった。国栄を我家に引取り育てようとしたが、邦明殿は妹の忘れ形見である国栄を謝家で育てたいと言い、博多の謝家で育ててもらった。元服する頃には我が手元に引取り、息子の一人として育てる積りであった。その為、平戸の松浦毅を付け国栄に武士の子としての心得を学ばせた。安芸の厳島に参拝に行った折などは博多まで足を伸ばして会っておった。しかし、元服の歳に近づいた頃、国栄は自ら宋にある謝家の本家で学びたいと慶元府（寧波）に渡った。国栄は我らの言葉だけでなく、宋の言葉も自在に話し、書くことが出来る。しかも、この若さで既に数度も宋と博多の航海を経験しておる」
知盛が国栄の歳を聞くと、弟の重衡と同じ二十才歳だった。
「何故、この様な弟がいることを今まで黙っていたのですか」
「国栄とは今日久しぶりに会った、八年ぶりだ。邦明殿にこの福原

まで来てもらったのは宋との交易に使う大型船を手に入れるよう頼む積りであったが、ちょうど宋より国栄が戻って来たので、邦明殿がこの福原まで連れてきてくれたのだ。我が夢は先程語ったように、この大輪田泊に宋からの交易品を満載した大型船が何十艘も帆を降ろす事だ」

「父上、我が平家が宋との交易を行えるような大型船を五十艘も百艘も手に入れたなら、我にその船団をお任せ下され。無論、この知盛は船の事は余り知らぬが、このような弟がいるのなら百人力。二人で力を合わせれば、宋ばかりでなく越や天竺までも出向き、かの地の珍奇な物を持ち帰ってお目にかけますぞ」

「おお、知盛が大層な口を利きおるわ。しかも、国栄も仲間に引き入れたか。判った、船が手に入った時にはそなたら二人に全て任せる。どうだな、謝邦明殿。我が意志を継ぐ者が出来たぞ。しかも、その一人は国栄だ。こうなればどうしても船を造ってもらわねばならぬな」

「知盛様、今も清盛様に申し上げましたが、宋の国でも海原を渡り、国外と交易が出来るような大型船を作れる場所は限られております。しかも、その船を国外の者に売り渡す事は禁じられていると、お断りしていたところです」

「金子は我ら平家が出すが、船を調達するのは博多の謝家の名でよい。国栄が加わるなら、国栄は平家の者でもあるし、謝家の者でもある。今の平家には大海原を渡り航海が出来る者は誰もおらぬ。謝家の者の力を借りて大海原に乗り出すことで、いずれは平家の者だけでも大海原を押し渡る事が出来るようになる。邦明殿よろしく頼む」

清盛は手元に置いた皮袋を謝邦明の方へ押しやった。邦明は皮袋を開け中身を確かめた。

「砂金ですか」

「左様、奥州の砂金だ。船の金子として大葛篭に二百箱用意した。明日にも湊にある船へ運ばせる。これで不足するようであれば言っ

てくれ」
強引な清盛の言葉に苦笑した謝邦明は国栄と共に雪見御所を後にした。
「父上、国栄を今日集まった皆に紹介するのでは」
「いや、本人が嫌がった。出来ればこの先は謝家の者として、海商として生きて生きたと言っておった。だから、そなたの申し出は喜んだぞ」

夕日が没し、雪見御所の庭園に面した釣殿から大輪田泊（神戸港）の上に上がった青白く輝く月の明かりの中で月見の宴が開始された。釣殿の周囲は、松明の明りで照らし出され、部屋の中には大蝋燭が何本も点されていた。
山海の珍味が並び、瓶子に入った酒が置かれ、笛、笙、琴などの楽器が打ち鳴らされ、薄物に身を包んだ白拍子が並んでいた。
知盛が見ると、清盛は脇にはべる白拍子の注ぐ酒に機嫌よく盃を傾けていた。
大納言平時忠、近衛中将平維盛、近衛権中将平資盛の兄弟、権大納言平宗盛、従三位蔵人頭平重衡、正三位修理太夫平経盛、正三位参議平教盛、正二位権大納言平頼盛、正四位下薩摩守平忠度、教盛の息子の越前守平通盛、公卿では関白の近衛基通、大納言藤原隆房などは白拍子の奏でる曲が流れる中、歌を読む者、談笑する者、静かに盃を傾ける者など様々であった。
やがて、酒に酔った清盛はその場に集まった皆に宋と交易を行う大型船を何十艘も手に入れて、満載の荷を積んだ交易船でこの大輪田泊を一杯にするという夢を語った。
しかも、我が生きておる間にその夢が叶えられなければ、この夢は全て知盛に任せると言った。

「壇ノ浦《だんのうら》の海戦」その１

「壇ノ浦の海戦」　その１

寿永四年（１１８５年）三月十五日。
長門国は彦島（下関市）、浅黒く日焼けした、たくましい一人の男が小高い丘の上から早鞆の瀬戸を望んでいた。
春の麗らかな陽光を浴びた瀬戸は通る船もなく、翼を広げた海鳥が甲高い鳴声を響かせてゆったりと空を飛び、翼を休めた海鳥は強い海流に身を任せていた。
「使いの者が戻ってより十日は過ぎた。阿波の田口、豊後の緒方らは参らぬか」
一文字に結ばれた意志の強そうな口から漏れた言葉には諦めの響きがあった。
眼下に見える福浦の入江の中には長さ二十間（３６ｍ）、幅四間（７．２ｍ）はある大船が数十艘、白帆を降し、錨を垂らしてゆったりと停泊していた。
目を転じれば、彦島の別の入江にも同じように大船が停泊している。それらの入江の入り口には両舷に楯を引廻し、弓矢を持った兵を乗せた片舷十丁から十五丁櫓で、長さ十間（１８ｍ）、幅二間半（４．５ｍ）の戦船が辺りを警戒するように何十艘も遊弋していた。
「何としても、次の合戦に勝たねば、我が平家は滅びてしまう」
再び、漏れた呟きには悔しげな響きがあった。
男の名は中納言平知盛。平清盛の四男として生まれ、年は三四歳の働き盛りで、平家随一の勇将と言われていた。
これまでの幾多の源氏との合戦では兄の内大臣平宗盛が総大将として臨んでいた。
しかし、この壇ノ浦の合戦では平知盛が平家の総大将となる。ここで源氏に負ければ、もう平家の逃れ行く場所はないのだ。

兄の宗盛は清盛の三男だが、長男の重盛が六年前に病で亡くなった事で、清盛の後継者となった。しかし、宗盛は平時の総帥として平家一門をまとめる事は出来たが、後白河院との政の駆引きや源氏との合戦に臨む総大将としては優柔不断で臆病に過ぎた。
知盛の方は幼少の時より、詩歌管弦よりも六韜（りくとう）、三略（さんりく）、孫子（そんし）の兵書に親しみ、騎射を好むなど武将としての腕を磨き、源氏との合戦に臨んでも不覚を取った事はなく、平家期待の武将であった。
二年前の寿永二年（１１８３年）六月、源氏の木曽義仲の軍勢に追われた平家一門は、安徳天皇と三種の神器を奉じ京の都を後にした。その後、同じ源氏内の勢力争いで、京において木曽義仲勢を討取った源頼朝は弟の源範頼、源義経の二人を代官として、平家追討の軍勢を西国へ向けた。
平家は義仲と頼朝が同じ源氏の間で勢力争いを行う間、福原を望む一の谷（神戸市）にまで勢力を回復していた。
この一の谷の合戦で、知盛は平家の主力を率い生田口の陣を守り、源範頼率いる源氏の主力勢、梶原景時や北条義時、和田義盛らを迎え撃って一歩も引かずに戦っていた。
しかし、搦手軍の義経による鵯越（ひよどりごえ）の逆落としで宗盛の本陣が奇襲されると、浮き足し立った宗盛は安徳天皇、建礼門院らを御座船に乗せ、屋島（高松市）へ退却した。
続く合戦で知盛は長門の彦島（下関市）に陣を構え、山陽道を進んできた源範頼率いる源氏の主力勢と戦いその九州進出を阻止した。
だが、宗盛が率いる平家の主力は屋島（高松市）において、再び義経率いる安田義定、梶原景時、土肥実平、熊谷直実ら搦手軍の奇襲を受けて敗退し彦島に逃げ込んだ。
この一の谷、屋島の合戦において平家は平教盛の子の通盛（みちもり）、業盛（なりもり）、平経盛の子の経正（つねまさ）、経俊（つねとし）、敦盛（あつもり）、重盛の子の師盛（もろもり）、宗盛、知盛の弟の清房（きよふさ）、清貞（きよさだ）、知盛の子の知章（ともあきら）、平忠度（たいらのただのり）などの多くの武将を失った。
宗盛は彦島に安徳天皇の行在所を設け、平家一門や肥前の松浦党、筑前の原田、山鹿、長門の紀、岩国らの将兵がその警護に当った。

その他、彦島の周辺には肥前松浦党、筑前の山鹿、平家一門及び長門の水軍の合わせて五百艘ほどの戦船が集まった。
平家一門の船や松浦党、山鹿の一部の船は宋との交易で外洋航海もできる大船で、安徳天皇の御座船は前後に二本の帆柱があり、長さ二十間（３６ｍ）、幅五間（９ｍ）もある百二十人乗りの大船だ。

源範頼を大将とする源氏の山陽道軍は、屋島の合戦の勝利により源氏に味方した瀬戸内水軍の船で九州の筑前に渡り、門司関（北九州市門司区）に陣を構えて、九州において平家に味方する家人と彦島に陣取る平家一門の間を遮断した。
この山陽道軍には北条義時、足利義兼、千葉常胤、三浦義澄、小山朝光、仁田忠常、比企能員、和田義盛、畠山重忠らの源氏の御家人に加え、豊後の緒方惟栄（おがたこれえい）、臼杵惟隆（うすきこれたか）、周防の宇佐木（うさき）ら六千の勢が加わる総勢二万の軍勢だ。
一方、源義経を大将とする搦手軍は熊野水軍、伊予の河野水軍、摂津の渡辺水軍ら瀬戸内水軍の戦船を集め、総勢八百余艘と称し壇ノ浦奥津（下関市）の沖にある千珠島（せんじゅとう）、万珠島（まんじゅとう）に集結しつつあった。
源氏に味方する水軍には平家のような大船は無く、多くは片舷十丁から十五丁櫓、長さは十間（１８ｍ）から十二間（２１．６ｍ）、幅は二間半（４．５ｍ）ほどの戦船だ。
この義経の搦手軍には安田義定、梶原景時、土肥実平、熊谷直実、田代信綱、三浦義連ら源氏の御家人に伊予の河野通信（こうのただのぶ）、熊野の熊野（くまの）湛増（たんぞう）らが加わり総勢一万ほどの軍勢だ。
後数日もすれば源氏の水軍は勢揃いし、平家は源氏との一族の存亡を掛けた戦いに臨む。
平知盛は既に何度も四国や九州の水軍に援勢を求める使者を使わしていたが、敗色濃い平家に味方する勢はどこからも現われない。
平家一の勇将と言われた知盛も、ここまで劣勢となった平家一門の勢いを盛り返す方策が浮かばなかった。
しかし、平資盛、有盛、教経ら若手の武将は今だに戦意は盛んであ

ったが、平教盛や経盛などの老将は一の谷や屋島の合戦で多くの子供や郎党を失い、戦意を喪失していた。

突然、眼下に見えた戦船が沖に向って激しく動き出した。

「神崎、見えるか。何が起きた」

知盛は脇に控える遠目の効く郎党神崎十太夫（かんざきじゅうろうた）に確かめた。

「殿。あれに、平戸下松浦党の小早が」

郎党の神崎十太夫は立ち上がると、早鞆の瀬戸の向こう側、響灘（ひびきなだ）の方を指し示した。

知盛の目には海上の黒い点にしか見えなかったものが徐々に大きくなり、響灘から早鞆の瀬戸へ入ろうとする小早船の姿になった。

丘を降りて入江で待つ知盛の前に現れたのは片舷五人櫓、舳先が尖り幅の狭い、船足の早そうな小早だった。

福浦の入江に入った小早の船上より水軍の戦装束を着けた武士が大声で告げた。

「下松浦党の深江三郎と申す。中納言平知盛様へ急ぎの文を持参した」

「知盛様はここにおわす」

郎党の神崎が知盛の居場所を告げると、深江は浜辺に船が着くのを待ちきれず、船を飛び降りて波に脚を濡らすのも構わずに走り寄って、厳重に封をした文箱を差し出した。

「我が主、平戸の松浦毅より中納言平知盛様への急ぎの文です」

神崎が文箱を知盛へ手渡し、中の文を読んだ知盛の顔が急に晴れやかになった。

「深江、この文に書かれている事は真か」

「はい、その通りです。主の松浦毅も急ぎ知盛様に平戸までお出でいただきたいと申しております」

平戸下松浦党の深江三郎、小早の水手を郎党の神崎に任せると、知盛は唯一人で安徳天皇の行在所に向かった。

知盛は母である二位の尼の部屋に入ると、何事かを小声で告げた。
「平戸に大船が・・・、清盛様が残された。久しぶりの良い知らせです。ですが、何故皆に告げず、母だけに告げるのです」
「残念ですが、以前、密かに兄や叔父上らに話した事が何時の間にか源氏方に洩れておりました。これはこの度の合戦の要。事前に洩れれば我らの勝利はなくなります。母上の胸だけにお留め下さい」
「では、宗盛にも告げずに行くのですね。合戦には間に合いますか」
「いかなることがあろうと、合戦には間に合うよう戻ってまいります。我がおらぬ間は、母上の力で兄が源氏の挑発に乗らぬよう抑えてくだされ」
「あの子の性分は、母でも抑えられぬ時がありますぞ」
その夜、彦島の平家の陣より五人の供を連れた中納言平知盛が、平戸下松浦党の深江三郎の小早で姿を消した。
「総大将の知盛がいなくなったとは。一体、どういう事です。母上」
翌朝、母の二位の尼より知盛が陣を抜け出した事を聞かされた宗盛は顔を赤くし、大声を上げた。
「母上は知盛が何処へ向かったか承知ですな。何処へ行ったのです。まさか、逃げ出した訳ではありますまい」
「何と言う事を。知盛が逃げ出す事はありません。合戦には間に合うよう、必ず戻って来ます」
「ですが、明日にも源氏が攻め寄せて来たならば、どうすれば・・・・・」
「その時は、そなたが総大将として戦に臨むのです」

三月二二日の深夜、知盛の郎党で侍大将伊藤景清の陣屋を叔父の伊藤景家が密かに訪れた。景家は知盛に従って七日前の十五日夜に彦島の陣を抜け出していた。
景清は叔父の顔を見ると、怒りの声で問い詰めた。
「叔父上、知盛様は今何処におられる。何時お戻りになるのだ」
知盛が陣を抜け出した時、郎党の伊藤景清の下には「暫くの間後を

頼む」と書かれた知盛の文が残されていた。
「景清、少し静かにしろ。他の者に聞かれるぞ」
伊藤景家は低い静かな声で景清をたしなめ、小声で話し出した。
「知盛様は密かに船団を率いて戻ってこられた。だが、源氏方には知盛様の率いる船団の事は合戦が始まる時まで隠しておく。この彦島の陣へは戻らぬ。既に、源氏水軍の六百余艘の船が壇ノ浦の奥津（下関市）の沖にある千珠島、万珠島付近に集結して、伊予の河野の戦船を待っているとか。源氏の将義経は奇襲を好むと言われるが、此度は正面からぶつかる合戦になる」
「総大将の宗盛様は落着きも無く、日々知盛様の戻りを待っておるだけ。このままでは合戦にもなりませんぞ」
「総大将が知盛様でも宗盛様でも、平家の合戦は変わらぬ。御座船を始めとする大船を中心にその周囲に戦船を配し、早鞆の瀬戸の流れに乗り源氏の戦船に矢を雨のように浴びせ、ひた押しに押すだけだ。その事は判っておろう、景清」
「だが押し切れぬ時は、逆に数にまさる源氏の水軍に押し包まれますぞ」
「潮目が変われば、源氏の勢いが増すのは始めから判っておる。源氏が数を頼りに押し包もうと迫って来たら、源氏の船を引き連れて早鞆の瀬戸を抜けて、彦島の先まで逃れるのだ。そこを知盛様の率いる船団が一気に強襲し、源氏の戦船を壊滅させる」
「それが、知盛様の策か。であれば、幼い安徳天皇を始め二位の尼様らを御座船に乗せて戦の真只中に連れ出す必要が何処にある」
「源氏の義経は幼い安徳天皇や二位の尼様ら女官と三種の神器が彦島にある事が分かれば、船戦の最中に彦島の行在所に奇襲を掛け、安徳天皇の身柄と三種の神器を奪い去ろうとする。だが、今の平家に行在所を護る船や兵を割く余裕はない。だから、共に船に乗ってもらうのだ。景清は御座船の宗盛様の脇に付き、安徳天皇と三種の神器を護ると共に、引き鐘を打つ時を過たぬようにせよとの知盛様の命だ。宗盛様ではいざという時の決断が遅れる恐れがある。この

合戦で、平家は船をなるべく損じず源氏を華々しく撃ち破る事で、源氏に与力する者や様子見をしている者を今一度平家の味方へ引き戻すのだ。我は知盛様に今の源氏の状況を告げたら、再び明日にはこの陣へ戻る」

伊藤景家はそれだけを告げ、小早で再び夜の闇の中に消えた。

翌三月二三日。彦島にある平家の陣に千珠島（せんじゅとう）、万珠島（まんじゅとう）周辺の見張りに出ていた物見船が戻り、源氏の戦船が出陣の用意を整えている事を本陣にある内大臣平宗盛に知らせた。

それを聞いた宗盛は行在所に二位の尼をたずねた。

「母上、知盛はまだ戻りませぬか。源氏は既に戦の用意を整え今にも押し寄せてこようとしております」

「落ち着きなさい、宗盛殿。知盛がいなければ、そなたが平家の勢を率いて立向かわねば、誰が源氏に立向かうのです」

母、二位の尼の叱咤を受け覚悟を定めた宗盛は、彦島（下関市）に集結した戦船の出陣を命じた。

肥前松浦党の船が百艘、筑前の山鹿水軍が三百艘、平家一門及び長門の水軍が百艘の計五百艘の船。舷側には楯を引廻し、矢を十分に積み込み、彦島を出航して兼ねて定めてあった田之浦（たのうら）（北九州市門司区）に集結し明日の戦に備えた。

合戦に臨んだ平家一門とその武将は、平宗盛、その息子の清宗（きよむね）、亡くなった重盛の息子資盛、有盛、宗盛の叔父の経盛、教盛、平時忠、教盛の息子の教経及び侍大将の平盛国、平盛澄、源李定らが顔を揃えた。

松浦党からは松浦正、松浦直、佐志調、波多保など、山鹿秀遠の勢では、山鹿時貞（やまがときさだ）、麻生家村（あそういえむら）、原田種正（はらだたねまさ）などだ。

平家一門の中では知盛が彦島の陣内より姿を消した事は知れていたが、その事をこの田之浦に来て始めて知った将もおり、山鹿秀遠などは遠慮なく宗盛に聞いた。

「この場に知盛殿の姿が見えぬが、それはいかなる訳だ。まさか、

陣を引いた訳ではあるまい」
「知盛が陣を引くことなどありえぬ。知盛は体を損ねただけだ。その勢は家人の伊藤景清が率いておるぞ」
阿波や伊予からの援勢もなく、意気が上がらぬだけではなく、平家一門や他の武将は互いに相手がいつ裏切るかと疑心に囚われていた。

「壇ノ浦《だんのうら》の海戦」　その２

「壇ノ浦（だんのうら）の海戦」その２

翌三月二四日、春の日差しが海上を照らし出す中、平家は宋との交易船、外洋航海にも耐える大船を中心に置き、周囲に小型の船を配置する陣形を組み田之浦（北九州市門司区）を粛々と出陣し早鞆の瀬戸に向かった。

早鞆の瀬戸の潮の流れを熟知している平家は、牛の刻（正午）に瀬戸の潮の流れに乗り出陣し、義経が率いる源氏の水軍と壇ノ浦で衝突した。

平家の大船は前後二本の帆柱に帆を掲げ、潮の流れに乗って源氏の戦船目掛けて突き進んで行った。

舷側に並べた楯の後ろでは、兵が大きく弓を引き絞り、源氏の戦船の頭上から矢を降り注いだ。

大船と並走する平家方の戦船でも水手が懸命に櫓を漕ぎ、楯の間より兵が弓を引き絞り、源氏の戦船に矢を降り注いだ。

中央に大船を置きその周囲に小船を配した平家に対し、源氏の戦船も矢を応酬しながら、大きく横に広がり平家の船を取り囲むように進んだ。

源氏の搦手軍の大将源義経は戦の前に、搦手軍の各将に「源氏の戦船は安徳天皇や建礼門院、二位の尼などが乗る御座船や女官や延臣が乗る大船に矢を集中させろ。この戦は平家の将を討取ることではなく、安徳天皇、三種の神器を取戻すことにある。平家の将を討取るよりも、三種の神器を取戻した者の方が手柄である」と告げた。

合戦の始まった当初、平家方の船より降り注ぐ矢は源氏方の戦船の兵を次々と射倒し、御座船に乗り白糸縅の鎧を着けた宗盛の機嫌は良かった。

やがて、源氏の矢が平家の大船に集中し、御座船に矢が射込まれる

ようになっても、矢倉に逃げ込む事なく、戦況を見ていた。
宗盛の傍には黒糸縅の鎧を着けた伊藤景清が宗盛の家人で同じ一族の伊藤景高（いとうかげたか）、景経（かげつね）と共に控えていた。
「景清、この勢いで源氏の水軍を押込めば、この合戦は我らが勝ち戦だ」
宗盛は機嫌の良い声で脇に控えた景清らに言った。

早鞆の瀬戸の潮の流に乗った平家の船は源氏の戦船に矢を散々に射掛け、源氏の戦船が今朝、集結した壇ノ浦の万珠島、千珠島の処まで追い詰めた。
小型の戦船が多い源氏は戦船の両舷にびっしりと楯を並べ、防御を堅くして、小回りを利かせて平家の水軍に対抗した。
合戦が始まり一刻（2時間）が過ぎて刻限が未の刻（午後2時）になると、早鞆の瀬戸の潮の流は逆転し、平家の船の行き足が鈍くなった。
しかも、牛の刻（午後12時）より目一杯に矢を放った平家の船は、備えつけた矢の数が少なくなり、源氏へ射掛ける矢数が見る間に衰えた。
「如何した。急に矢の勢いが衰えたではないか」
御座船に乗る宗盛が脇に控える郎党の伊藤景高に尋ねた。
「船に備えた矢数が減り、残りは僅か。このままの勢いで矢を射てば、間もなく尽きてしまいます」
平家からの矢の勢いが弱まった時、源氏はその船数の多さを利しての反撃に出た。
平家の戦船一艘に対し源氏は二艘以上の戦船で取り囲むように向かった。
今までとは逆の展開がそこ、ここで、繰広げられた。
源氏の戦船から矢を浴びた平家の戦船では楯の間で身をさらした水手や舵取りが射倒され、櫂や舵を失い、波間に漂う戦船が出始めた。
その様子を御座船の上から見て取った伊藤景清が総大将の宗盛に告

げた。
「宗盛様、今が引き時。引き鐘を打ちましょうぞ」
「まだ、まだだ。松浦党や山鹿の戦船に犠牲は出ておるが、僅かな数だ。あと少しで源氏を押し切る所まできておるのだ。後一歩我慢すれば・・・・」
宗盛は引き鐘を打つ事を拒んだ。景清は共に脇に控えた一族の伊藤景高、景経を見た。
「景高、景経、ここは源氏の矢に狙われる。宗盛様を安全な矢倉へお連れしろ」
「何をする。矢倉には入らぬぞ。手を離せ」
宗盛は肥った体を揺すって矢倉に入ることを拒んだが、伊藤景高、景経の二人は強引に宗盛を矢倉の内に連れ込んだ。
伊藤景清は宗盛の事を二人に任せ、自ら引き鐘を打ち鳴らしながら、船首を回して彦島（下関市）の方へ船を向けた。
後続する平家の大船は、御座船に習うように船首を回し始めた。
源氏の搦手の大将義経は熊野水軍、熊野湛増の戦船に乗って源氏の船団の中段で戦況を見守っていた。
湛増の船は片舷２０櫓の戦船で源氏の船の中では大きく船足も早い船だ。平家の勢いが衰えたのを見て取った義経は船縁を叩いて水手を励ました。
「平家の船が逃げ始めた。今が変わり目だ、追え、追え、追うのだ」
義経の声は源氏の戦船に伝わり、水手の櫂を漕ぐ手にも力がこもった。
義経の乗る戦船の船足が早まり、源氏の船団の中段から先陣近くまで漕ぎ上がった。
平家の大船の周囲を護る小船は、源氏の戦船から矢を受けて、楯の間に身を晒す水手、舵取りが真っ先に矢で射られ、行き足を止めた戦船が漂い始めた。
源氏の戦船の上より手鉤を差し伸ばした兵が平家の船を引き寄せ、乗り移り、長刀、大太刀を振るい平家の兵を打倒した。

海上には矢を何本も浴びた水手、舵取りの屍骸が漂い、矢を受け、長刀、大太刀で斬られて海に落ちた兵はその鎧の重さで海中に沈み、傷から流れ出た血が海上を赤く染めた。
平家の戦船は一艘、又一艘と降伏する戦船が出てきた。
だが、平家一門の乗る大船は整然と船首を彦島に向けて退却して行く。
壇ノ浦を過ぎ、前方には彦島が見え、平家の大船は早鞆の瀬戸を抜け出そうとしていた。
「あの大船の中に安徳天皇や三種の神器が乗る船がある。急ぎ、その船を見つけて捕らえろ。あの大船に逃げられれば、勝ちはないぞ」
義経の檄が源氏の戦船に飛んだ。この合戦で平家を撃破っても、三種の神器を確保できなければ勝利したとは言えない。
源氏の先陣を行く梶原景時は配下の船に命じた。
「我らが、一番手柄を立てるのだ。大船に乗移り、天皇や三種の神器を探せ」
水手を励まし戦船の速度を上げ、一艘又一艘と平家の大船に取付き縄梯子を掛けると兵は大船に乗り移った。
何時の間にか、源氏の先陣は平家の大船を追って早鞆の瀬戸を抜け出した。

「この船は何処まで逃げるのですか」
源氏の矢が射込まれる船上に現われた二位の尼が伊藤景清に問質した。景清が何かを答えようとした時、船首の見張りに立つ水手が大声で告げた。
「前方に大型の宋船の船団。帆には揚羽蝶の印が。味方、味方の船です」
「あれは知盛様の船団です。船は大型の宋船。この戦は平家の勝ち戦です」
見張りの声を聞いた伊藤景清が喜びの叫び声を上げると、御座船の後方に続く平家の大船に拡がった。

前方から接近してくる宋船は長さが三十間（５４ｍ）幅は六間（１１ｍ）あり、安徳天皇の乗る御座船よりも一回り大きい。
宋船の船首には龍の飾り物が施され、前後の二本の帆柱には大きな白帆が風を受け、片舷から突き出た三十本の櫂は忙しげに動いていた。
先頭の船の船首には水軍鎧を着込んだ知盛が立ち、その後方より四十艘の宋船が続いた。
宋船の船団が二列に分かれ、御座船を始めとする残された平家の大船、戦船を船団の中に囲い込んで、横に広がった源氏の戦船の中央を引き裂くように進んだ。
宋船の舷側には楯に囲まれた幅半間（９０ｃｍ）の連弩が片舷に二十基も並び、雨のように源氏の戦船に矢を降り注いだ。
一基の連弩には給手と射手の二人が付いた。給手が連弩の中央部にある装着棒を曳くと、鉄線で出来た弦が引かれ、矢を載せる。射手は連弩を廻して照準を合わせ、引金を引く。
更に、宋船の中央の矢倉の上には幅一間（１．８ｍ）の大連弩が据えられていた。
この大連弩には、弦を引く引手、矢を番える給手、照準を合わせて引金を引く射手の三人が付いた。
大連弩で用いる矢は、通常の矢よりも鏃が二回りも大きく、長さが四寸（１２ｃｍ）もある矢で、源氏の戦船の舷側を撃ち抜くと、大穴を開け、舷側に並べた楯を一撃で破壊し、その背後に隠れる兵の鎧までも射抜いた。
宋船の進路を塞ぐように前に出た源氏の戦船には乗り掛け、船ごと押しつぶした。
幅が狭く、潮の流れの早い早鞆の瀬戸に再び押し戻された源氏の戦船は船首を回して逃げ延びようと、お互いの船を衝突させて沈没するなど混乱に陥った。
特に、功をあせって先陣を進んだ梶原景時とそれに続いた三浦義連の船団は多くの戦船を沈められ、散々な目にあった。

先陣の僅か後方にいた義経が乗る熊野湛増（くまのたんぞう）の戦船は、その混乱に巻き込まれる寸前、快速を生かして後方へ逃げ出した。
「湛増、あのような大型の船を見た事はあるか。いったい何処の船だ」
「平家の旗印が掲げられているが、あの船首の飾り物を見ると、宋の船のようですな」
「では、あの船は今まで何処に隠れていた。物見が見落としたか」
「あのような大型の船を見落とすような物見はおりません。彦島の平家の陣ではなく、別の場所に隠れていたかと。あのよう大型の船の相手が出来る船は今の源氏にはありません。早急に引き鐘を鳴らし、逃れぬと大変な事になりますぞ」
「後一歩の所まで平家を追い詰めたが、仕方がない。引き鐘を鳴らすぞ」
赤糸縅の鎧兜を身に付けた義経が残念そうな声で告げると、熊野湛増は大きく引き鐘を打ち鳴らしながら後退を始めた。
残った源氏の船団は壇ノ浦の万珠島、千珠島には留まらず、そのまま周防や伊予方面へ逃出した。
再び早鞆の瀬戸に船首を向けた平家の船団は、筑前の門司関（北九州市門司区）に陣を構え、平家に味方する九州の家人と彦島に陣取る平家一門の間を遮断し、岸に近づく平家の戦船に矢を浴びせていた源範頼の軍勢に向け連弩を放ち、悠々と早鞆の瀬戸を抜けた。
この壇ノ浦の合戦で敗れた源氏の水軍は、熊野水軍、伊予の河野水軍、摂津の渡辺水軍ら瀬戸内の水軍八百余艘のうち、残った船は僅かに百艘足らずだった。
討取られたり、水死した将兵の数は五千を越え、水手、舵取りに到っては万に近かった。
この大損害を受けた源氏の水軍を再編するには一年以上の年月が掛かるとみられた。
一方、勝利を収めた平家でも、肥前松浦党や筑前の山鹿秀遠の戦船

が合わせて二百艘ほどが沈められたが、将兵や水手、舵取りは残った船に助けられ、死傷した者は三千ほどだ。

「博多　行在所《あんざいしょ》」その１

「博多　行在所（あんざいしょ）」その１

平知盛に率いられた平家の船団は壇ノ浦（だんのうら）から早鞆（はやとも）の瀬戸（せと）から響灘（ひびきなだ）に向った。

合戦の最中に源氏の戦船に追い散らされ、陸近くの岩陰などに潜んでいた平家の松浦党や山鹿水軍の戦船は二艘、三艘と知盛が率いる船団に合流してきた。

早鞆の瀬戸を抜けた処で、知盛は舵取りに命じて宋船を御座船に並ばせた。

舷側は宋船の方が高い。両船の間に綱を渡し、一人の供を連れた知盛は身軽に御座船へ乗り移った。

御座船の船上には、二位の尼、建礼門院、宗盛以下の主な平家一門の将が揃っていた。

「ご心配を掛けました」

水軍鎧を脱ぎ、狩衣に着替えた知盛は二位の尼、建礼門院、宗盛らに頭を下げた。

知盛に一言文句を言おうと宗盛が前に出た時、二位の尼が二人に向って言った。

「宗盛も知盛も二人力を合わせ、よくぞ勝ち戦に導きました。これで、平家一門も再起出来ます。ご苦労様でした」

二位の尼にこのように言われては、宗盛も知盛の行動に文句をつける事は出来ない。

この合戦の勝利は二人の手柄だと二位の尼は言ったのだ。

ここで知盛に文句を付ければ、この合戦の勝利が全て知盛の立てた策によるもの認めなければならない。そんな事に宗盛は耐えられない。

「この船団は博多へ向かっております。詳しい事は内で・・・」

知盛は一人の供と一緒に矢倉の内に入った。

二位の尼、宗盛、叔父の経盛、教盛、平時忠の五人を前に、彦島において平戸の下松浦党の松浦毅から文を受取った処より知盛は話しを始めた。

松浦毅からの文は簡潔であった。

「博多の唐商人（しゃくにえい）謝国栄が清盛公より頼まれた宋の大船四十艘の船団を率いて杭州湾（こうしゅうわん）の慶元府（けいげんふ）（寧波（にんぽー））より平戸に戻った。この船団を知盛殿に引き渡したいと言っている。至急、平戸へ来て欲しい」書かれていた。

「この者が博多の唐商人謝国栄です」

知盛が一緒に矢倉に入ってきた男を紹介した。

謝国栄も知盛と同じような狩衣姿に太刀を持ち、唐商人というより武者であった。

平清盛が博多の唐商人謝家に宋との交易に使う大船の建造を依頼したのは、今より五年前の治承四年（１１８０年）の九月の事だった。

知盛は五年前の事を思い出しながら、集まった五人に父の清盛が大船の建造を依頼した時の事を話した。

福原（神戸市兵庫区）の雪見御所で高倉上皇、安徳天皇を招いて行った月見の宴を覚えているだろ。その席で、父の清盛は宋との交易を行う大船を五十艘、百艘も手に入れると言う夢を語ったが、清盛の亡き跡は交易の事は全て知盛に任せると言った事を覚えておられようか。

「おお、そのような事もあったな。あれは、月見の宴の上の事。酒に酔った清盛殿の戯言かと思った」

伯父の時忠は往時を懐かしむように言った。

だが、その時は既に父の清盛は博多の唐商人謝邦明へ莫大な量の砂金を渡し、船の建造を頼んでいた。

知盛も偶然にその席に同席していたが、源氏との戦が激化し、京を

去るなどの出来事追われ、船の事は忘れ去っていた。
国栄殿は邦明殿の息子で、父が船の建造を頼んだ席にも同席していた。
国栄殿は父清盛の渡した砂金を持って謝家の本家がある宋の杭州湾の慶元府（寧波）に向かった。
国栄殿は博多で生まれたが、十二歳の時に勉学の為に慶元府（寧波）に渡り、二ヶ月ほど前に博多へ戻ったばかりだった。
宋に戻った国栄殿は謝家の本家の力を借り、何軒もの造船場を当たった。
だが、いずれの造船場でも国外へ売り渡す外洋航海の大型交易船を作る事は断わられた。
だが、国栄殿は諦めることなく何軒もの造船場を廻り熱心に頼み込んだ。
そして、遂に二年前に杭州湾の入口、舟山群島（しゅうざんぐんとう）にある一つの造船場の一つが承諾した。
その返事を博多に持ち帰った謝国栄に、邦明は次に大型船に乗込む水手や舵取りを集める事を命じた。
博多の謝家にも宋との交易船に乗る水手や舵取りはいた。しかし、新たな大型船に乗る水手や舵取りを謝家の中より出しては、謝家の船が動かなくなるので、出すわけには行かない。建造するのは、平家の船なのだ。
国栄は謝家の船乗りの中でも平戸出身の老練な舵取りの治助を連れ、平戸にある下松浦党松浦毅の屋敷を訪ねた。
耕地の乏しい平戸では松浦毅自らも船を出し、高麗や宋との交易を行っていたので、新たな船乗りを平戸から出すことを渋った。
だが、国栄は十二歳の時まで松浦毅が刀、弓、騎乗など武者としての心得を教えた者で、今後の宋との交易では、平戸に寄って荷を積み込むとの約定をする事で、平戸から船乗りを出すことを承知した。
その後、博多の謝家の宋との交易船は途中で平戸に寄り、新たな交易船の水手や舵取りとなる船乗りを乗せ、杭州湾にある舟山群島に

運んだ。

四十艘の宋船が舟山群島の造船場で完成し、船乗りの調練が終了し、平戸に向かって出航したのは日本海の荒れが収まった今年、寿永四年（１１８５年）の二月末の事だった。

宋の慶元府（寧波）に住む謝国栄への下には博多の父邦明や、その他の博多の商人や船乗りから平家が源氏に都を追われて西国に逃げ出した事、平家と源氏の間に大きな合戦が何度も行われ、多くの平家の将が討ち取られ、平家の敗色が濃い事を知らされていた。

この宋船が知盛の手に届けば、源氏との戦に使われる事は間違いない。

国栄は知盛が源氏に討取られて欲しくはなかった。

その為、四十艘の宋船には大小の連弩を装備し、予備の連弩や矢、その他の宋の武具を大量に積み込んだ。

通常の交易品の絹、綾、錦、陶器、書籍なども積み込んだが、その量は僅かであった。

国栄が率いた四十艘の船団は天候にも恵まれ、十日間の航海で平戸湾に入港した。入港すると、直ぐに国栄は松浦毅の屋敷を訪れ、平知盛に船団の到着を知らせる事を頼んだ。

国栄の率いてきた宋船の船団を見た松浦毅は、平戸島一体に触れを回し津吉久（つよしひさし）、志々依正（ししいただし）らの兵を急ぎ集め、連弩の調練を行った。

平知盛と伊藤景家以下の五人の郎党が平戸に着いた時、既に宋船には松浦毅が下松浦党の兵と国栄が宋より連れて来た兵が乗り、戦の仕度は整っていた。

知盛の話が終わると、二位の尼が国栄に向かって頭を下げ、礼を言った。

「今、知盛からの話しを聞くと、この戦の勝利は謝家の方々の努力のお陰。亡き清盛に成り代わりお礼を申しあげます」

「信義を守らぬ者はいずれ破滅すると、父より言われております。

父邦明が清盛様と交わした約定を守ったにすぎません」
国栄は五人に頭を下げたが、二位の尼だけは国栄の顔をじっと見ていた。
「この船団は博多（福岡市）に向かっています。博多では邦明殿が安徳天皇の行在所を確保し、二位の尼、建礼門院、女官の方々、時忠殿ら延臣の方々の宿舎も用意しております。我らは、筑前、肥前、豊前、豊後の者らにこの戦の勝利を告げる使いを出します」
「知盛、何故博多なのだ。折角、源氏に勝利したのだ。安芸や備後、備前の方が京に近いではないか」
叔父の経盛が不満げに言った。
「この船団が安全に停泊出来る湊はこの近辺では博多しかありません。しかも博多は、平家が源氏との戦を続けて行く上で必要となる米などの食料や弓、矢、鎧兜などの武具を入手するにも便の良い場所です。博多に腰を据え、九州を平家の拠点とし、九州各地より兵を集め京へ侵攻するのが最も確実な方策です。一度の合戦の勝ち負けでは揺るがぬ体勢を築きたいのです」
「源氏に勝利したのだ、経盛殿もまずは博多に落ち着こうではないか」
時忠の一言でその場は収まった。

博多の袖の湊に平家の船団が入ったのは三月二十四日の夕暮れ。
浜辺には篝火が焚かれ、松明を灯した小船が湊に入った大船に漕ぎ寄せた。
博多の湊に慣れた松浦党や山鹿水軍の戦船は船を浜に着け、兵が上陸を始めていた。浜には国栄の父で唐商人の謝邦明も店の者を連れ、安徳天皇一行の迎えに出ていた。
安徳天皇の行在所（あんざいしょ）となる筥崎宮（はこざきぐう）までは、浜から五町（５００ｍ）の参道が続く。
参道の両側には所々で篝火が焚かれ、松明を手に持った水手が十間（１８ｍ）に一人が立ち、参道を照らし出していた。

米、乾物などを扱う店、絹や綾の織物を扱う店、唐物を扱う商家、参拝客に飲食を供する店、妓楼などが参道の両側には建ち並んでいたが、今宵はいずれの店も戸を閉め、店の前で船から下りてくる安徳天皇一行を待ち受けていた。
その間を輿に乗った安徳天皇、建礼門院、二位の尼、女官、平家一門の平宗盛とその息子の清宗、知盛、宗盛の叔父の経盛、教盛、教盛の息子の教経、資盛、有盛、平時忠や延臣、松浦党の松浦直、佐志調、山鹿秀遠と原田種正などが兵を率いて続いた。
安徳天皇一行は応神天皇を祀る筥崎宮を行在所とし、その周辺にある神官の屋敷や商人の屋敷をなど平家一門の仮の宿とするように謝邦明が手配した。

筥崎宮の近くの唐人街、その一区画を占める広大な謝家の屋敷の奥座敷で当主の謝邦明と国栄、平知盛、資盛、教経らが宋風の円卓を囲んで座った。
円卓の上には資盛、教経が始めて見る料理が並んでいた。
「これは、宋の国の料理や酒だそうだ。我も始めて国栄殿の船で出された時は驚いたが、意外にうまいものだ」
「では、知盛殿はもうこのような料理をお食べになった事があるので」
資盛と教経の二人は恐る恐る箸を伸ばし、卓上の料理を食べ始めた。
そんな三人に謝邦明が告げた。
「今日の昼前、大宰府の近くを通りましたが、肥後の菊池隆直や木原、南郷ら凡そ二千の勢がいるだけで、その他の者の姿はないと大宰府に住む者が言っておりました。大宰府の近くに住む商人や農民などは多くが家に戻っておりました」
「明日にも門司にある源氏の山陽道軍の様子を探る物見を出す。大宰府には山鹿、原田を中心にした勢で押寄せる」
知盛は資盛と教経に明日の大宰府攻めの仕度を命じた。これまでの源氏との戦で多くの平家の将が討死、捕えられていた。

知盛が見るところ残る平家の将の中で、武勇に優れた侍大将は多くいるが、一手の将を任せられるのは平教経と平資盛の二人位だ。だが、この二人も一手の将であり、総大将の器ではなかった。
知盛が顔を上げると、教経と談笑する謝国栄の顔があった。
平戸から彦島への僅か二日の航海の間ではあったが、国栄とは源氏との戦について随分と話しをした。
国栄は宋で勉学した間に学んだのは航海術だけでなく、孫子の兵法などの兵学も学んでいた。
国栄は知盛に平家はいきなり京を目指すのではなく、九州にしっかりとした地盤を築いてから東進すべきだと言った。
その後の壇ノ浦の合戦においても知盛は国栄と並んで矢倉の前に立ったが、宋船の武器や能力をよく知る国栄に船戦の指揮を任せていた。国栄は、知盛の目の前で鮮やかに船団を指揮し、お陰で源氏に大勝できた。
「国栄殿なら一手の将どころか、平家の総大将として指揮を執るだけの器と力がある」
知盛は国栄に今後の源氏との戦で、平家の将として助けてくれと頼んだ。
しかし、国栄は「今、私が清盛の子だと名乗り出て、平家勢の指揮を執ろうとも、心から従う者はおりますまい。そのような勢を率いてはいざと言う時に力を発揮する事は出来ません。どうしてもと言われるのなら、知盛殿の傍でお助けいたします。我はあくまで謝邦明の息子です」と知盛の頼みを断わった。
知盛が唐人街にある謝家の屋敷から筥崎宮へ戻ると、二位の尼から呼ばれた。
「ご苦労様でした。なにやら久しぶりにゆったりとした気持ちで過ごす事ができました。ですが、唯一つ気になる事があります。本日お会いした国栄殿の事です。あの方は本当に謝邦明殿のお子なのですか」
「邦明殿の妹殿が母親だと聞いております。その方は国栄殿を生ん

ですぐに亡くなられたので、邦明殿の息子として育ったのだと」
「知盛、では父親は何方ですか。私は先ほど国栄殿に会った時、清盛様の若き日を思い出しましたぞ」
だが、知盛はそれに答える事なく部屋を出た。

「博多　行在所《あんざいしょ》」その2

「博多　行在所（あんざいしょ）」その2

三月二十五日の朝、筥崎宮の前に大宰府攻めに向う平家一門の軍勢一万が勢揃いした。

先陣を務めるのは壇ノ浦の戦から引続き、筑前の山鹿秀遠と麻生家村及び原田種直とその弟敦種（あつたね）の四千の勢、中軍は総大将平知盛と資盛、有盛、教経ら一族とその郎党で侍大将の平盛国、平盛澄、源李定、伊藤景清、景家ら四千、後備えは上松浦党の松浦直、佐志調、波多保らの二千だ。中軍には謝国栄が総大将知盛の陣に従っていた。安徳天皇の行在所である筥崎宮周辺の警護にあたったのは、平宗盛とその息子の清宗、叔父の経盛、教盛らは凡そ三千の兵だ。

松浦毅を始めとする津吉久、志々依正ら下松浦党の面々は早朝に五艘の宋船と松浦水軍の戦船五十艘を率いて博多の湊から彦島（下関市）へ向かった。

彼らの役目は門司関（北九州市）に陣を張った範頼の山陽道軍と長門、周防の間を遮断し、山陽道軍の動きを探索、監視することだった。

黒糸縅の鎧兜に身を包んだ知盛が筥崎宮の神殿の前に額ずき、平家の勝利を祈願し、馬に跨り大宰府（大宰府市）に向け兵を進ませようとした時、砂塵を上げ百騎の鎧武者が筥崎宮に向けて駆けてきた。

「源氏方の奇襲か」

「何者だ」

先陣を務める山鹿秀遠の郎党が弓矢を構え、緊張した声で誰何した。すると、先頭を駆る馬から赤糸縅の鎧の武者が降り、路上に平伏し、大声で言った。

「我はかつて鎮西探題を命じられた平貞能（たいらのさだのり）なり。先の源氏方との戦に破れ筑前の山中に潜み再起を図っていたが、宗盛様、知盛様が源

氏の水軍を撃ち払い、博多に上陸したと聞き参上した。聞けば、大宰府の源氏方を攻めるとか。先陣の片隅にお加え下され」
貞能と名乗った武者の鎧には前の戦で受けた矢の跡やほつれが目立つが、その意気は盛んであった。

その声を聞いた、平教経が先陣へ進みでた。
「貞能殿、ご無事だったのか。よかった。まずは、我らが陣へおいでなされ」
「教経殿、お言葉はありがたいが、我らに雪辱の機会を与えて下され。先陣の片隅にお加え下され」
貞能を先陣に加えた平家の勢は博多から西海道（さいかいどう）を大宰府へ向かった。大宰府まではほぼ五里（２０ｋｍ）の道。緑が芽吹いた原野の中の道を半ば頃まで進んだ時、夜明け前に出した物見が馬を駆け、戻ってくるのと出合った。
「知盛様は何処に、物見でござる」
大声を上げ戻った物見は、隊列をかき分けて中軍の知盛の下へ急いだ。
「知盛様。我らが大宰府へ到着した時には、既に菊池勢は大宰府より退去しておりました。残りの者で、その行方を探っております」
物見の知らせを聞いた知盛は、「菊地の奴らが逃出した大宰府を受取りに参る」と笑って、全軍を大宰府に向けた。
巳の刻（午前１０時）、平家の勢は大宰府政庁前に到着した。
以前は朱塗りの柱に白塗りの壁、青瓦を輝かせていた大宰府政庁も、占拠した菊池勢に荒らされ、見る影も無いほど荒れていた。
政庁の中庭には余程慌てて逃出したのか、菊池方の弓矢や楯などが散乱していた。
大宰府の街中に戻った商人や農民などは不安げな顔つきで平家の勢を眺めていた。
それらの者から話を聞くと、大宰府を占拠していた菊池方の兵は深夜に慌しく動き出し、夜明け前には馬蹄の音を響かせ、東に向かっ

て出発したと言った。
やがて、戻った物見が菊池方の行方を知らせてきた。
「知盛様、敵は大宰府の東にある昔の城跡にこもっている模様です。土塁、石垣に楯を並べ、鷹の羽を記した菊池の旗印が陣のそこかしこに立ち、我らが来襲を待ち受けております」

前日の三月二四日、壇ノ浦の合戦の当日。
筑前の門司関（北九州市門司区）に陣を構え、目前の壇ノ浦で行われている源氏と平家の水軍の合戦に、浪打際まで馬を進めて平家の船に遠矢を射掛けていた範頼率いる山陽道軍は、急に現れた平家の船団により戦況が逆転し、義経が率いる熊野、河野、渡辺らの戦船は万珠島、千珠島の先まで追い立てられるのを呆然と眺めていた。
壇ノ浦の海域から平家の船が見えなくなると、残された海域には漕ぎ手や乗り手を失って漂う船、転覆して船底を見せた船だけが残されたが、その多くは源氏の戦船だった。
水手や舵取り、兵の屍骸は海岸に流れ着き、いくらか元気のある者は板片にしがみ付いて岸に逃れようともがいていた。
門司関を望む小高い丘、笹竜胆の紋を描いた幔幕を張った山陽道軍の大将源範頼の本陣には状況の急変に驚いた山陽道軍の主な諸将が集まってきた。
北条義時、足利義兼、千葉常胤、三浦義澄、小山朝光、仁田忠常、比企能員、和田義盛、畠山重忠、豊後の緒方惟栄、臼杵惟隆、周防の宇佐木と言った山陽道軍の主な将が続々と集まってきた。
「味方の戦船は岩国や伊予の方面へ四散し、残るのは平家の船ばかりだ。このまま、ここに留まれば、陸と海より平家に攻められる。急いで撤退すべきだ」
「早鞆の瀬戸は平家に押さえられ、長門、周防との間は断ち切られた。だが、我らの軍勢が平家と合戦をして負けたわけではない。大宰府にある肥後の菊池や木原、南郷らの勢を合わせ、平家と一合戦して討ち破ろうぞ」

「三浦殿は威勢がよいが、昨年の末から今年に掛けて兵糧米が不足し、周防より船で運び込んだ事を覚えておられるか。今の合戦で味方の水軍は大きな打撃を受けた。兵糧米を運び込む事はおろか、我らが長門、周防へ戻る事も出来なくなる。豊後より周防へ戻り、軍勢を立て直すべきだ」
「北条殿は、この地で源氏に与力する我が緒方や臼杵、肥後の菊池を見捨て、周防へ戻ると言われるのか」
豊後の緒方惟栄の一言で北条義時は顔色を変えた。
「緒方殿、そなたらを見捨てる積りはござらぬ。周防で体勢を立直し、再びこの地へ戻ってまいる」
「この地へ源氏の勢を運んだ周防の船所殿は今の合戦で多くの戦船を失った。船があっても平家のあの大船に見つかれば、船は沈められ、水手や舵取りは屍を海に浮かべることになる。沈むと分かってる船は出しませぬぞ。ここは、三浦殿の言われる通り、平家を一戦して撃ち破るしかございません」
緒方惟栄の言葉に愕然とした北条義時は陣幕を背に床几に腰掛けた総大将の範頼を見た。
三浦義澄と北条義時の話を聞いていた範頼が最終的な判断を下した。
「まだ、兵糧米は十分にある。三浦や緒方の言う通り、平家と一合戦するしかあるまい。その戦に勝てば、壇ノ浦での味方の負けを帳消しに出来る。だが、この門司関は場所が狭く、我らが得意の騎馬を駆け合わせるのには不都合だ。適しい場所はないか」
「平家の船団の行き先は博多辺りかと。博多へ向かう途中にある遠賀川（なががわ）の葦屋浦（あしやうら）（福岡県芦屋町）なら広大な原野が広がっておりますぞ」
「緒方殿、ここより葦屋浦へはどれほど掛かりますかな」
「一日もあれば・・・・」
「では、明朝にも葦屋浦へ向う。大宰府の菊池らにも葦屋浦へ集まるよう使いを出せ」
範頼の命で源氏の山陽道軍は門司関から陣を引払い、葦屋浦へ移る

用意を開始した。

門司関の範頼から使わされた大宰府への使者は、休む事なく馬を駆け、亥の刻（午後１０時）前には菊地隆直の陣屋へ入った。

「使者殿、このような深夜に一体何事ですかな」

この一ヶ月近く平家方の襲撃もなく、気が緩んでいた菊地隆直は酒に酔っていた。

「本日の昼過ぎ、早鞆の瀬戸の壇ノ浦において味方の水軍と平家の水軍が合戦に及び、味方の水軍は壊滅的な打撃を受けて周防、伊予へ撤退しました。なお、平家の船団は博多へ向かった模様です」

使者の言葉で菊地隆直の酔いは一度に醒めた。

「で、範頼様は何と言われた」

「急ぎ、遠賀川の河口、蘆屋浦に集まれと。そこに陣を構え、平家と合戦を行うと」

「では、範頼様は直ぐに九州から退去するのではなく、平家と一戦に・・・」

菊地は木原盛実、南郷惟安に急ぎの使いを出し、自分の陣屋へ呼んで範頼の言葉を伝えた。

「急いで、兵を起こし、大宰府から退去だ。下手をすると平家の軍勢に囲まれるぞ」

慌しく退去の用意を始める中、菊地隆直は郎党の山代信惟を呼んだ。

「信惟、大宰府を攻められた時、こもる用意をした裏手の大野城跡に我が旗を立て、折れ弓を楯の後に置き、兵がいるように偽装しろ。上手くやれば、平家の追撃の足を一時的に止められる」

山代は急ぎ五十騎の手勢に旗や折れ弓、楯を持たせて大野城跡へ向った。

菊池方が慌しく大宰府から撤退したのは、二十五日の卯の刻（午前６時）前だ。

同じ三月二十四日の夕刻、周防の三田尻湊（山口県防府市）におい

ては、舷側に廻らした楯に矢を何本も受けたままの戦船が今にも止まりそうな、力尽きそうな船足で入ってきた。
船底には矢傷や刀傷から血を流した兵や息絶えた兵が横たわっていた。
「湛増、完敗だ。これだけ木っ端微塵に叩かれると悔しさも湧いてこぬぞ。あの大型の船は一体何処に隠れていた。物見船が見落としたのか」
壇ノ浦で平家の水軍に敗れた源氏の水軍の大将源義経は熊野水軍の熊野湛増の戦船で周防の三田尻湊へ戻っていた。
義経の乗る船に続き、湊に入って来る熊野水軍や摂津の渡辺水軍の戦船は、いずれも傷付き血を流した兵や鎧に何本もの矢を受け、息絶えたまま船底に横たわる兵を乗せており、その船足は遅かった。
数日前、この三田尻湊を五百艘以上の源氏の水軍の戦船が力強い櫓捌きで出陣したのが夢のようだ。
「あの大船は間違いなく宋の船だ。平家一門や九州の水軍が使う宋との交易船よりも一回りは大きく、船首には龍や鵬の飾り物が施されていた。二、三度大輪田泊（おおわだとまり）（神戸港）で見たことがありますぞ。あの船が彦島（下関市）にあれば、見落とす事などありませぬぞ」
「筑前一帯は範頼の軍勢が押さえていた。あのような大船が隠れる湊などなかったはずだ。一体何処から出てきたのだ。これからの平家との船戦であの船が出て来た時、熊野や摂津の水軍は勝てるか」
「同じような大船があれば勝てますが、熊野や摂津、伊予や阿波でもあのような大船は作れません。それにあの大船が放つ矢が問題です。どのような弓でこのような矢を放つのかわかりません」
湛増は船に刺さった太い矢を手に持って、義経に示した。
「この矢を防ぐにはよほど分厚い板を舷側に張った船を作り、分厚い楯も作らねば。それとて、生き残った水手や舵取りがどれほどかによりますぞ。船を作っても水手や舵取りがいなければ船は動きません。熟練した水手や舵取りを育てるには何年もかかりますぞ」

源義経は郎党の佐藤忠信（さとうただのぶ）、武蔵坊弁慶（むさしぼうべんけい）、伊勢義盛（いせよしもり）らと浜に上がり、戻ってくる船を待った。
伊予の河野水軍の船は本拠地の三津浜（みつはま）（松山市）へ向かい、三田尻の湊へ入って来るのは熊野水軍か摂津の渡辺水軍の戦船だ。
「一体、何艘の船が戻ってくるかだ」
義経は鎧に受けた矢をそのままに、立ち尽くし湊を見ていた。
春の夕日が沈み、鮮やかな夕焼けが瀬戸の海を覆う中、又一艘の船が戻ってきた。
「静かに下ろせ、ゆっくりとだ」
右足に傷を負った将が二人の兵に抱えられるようにして浜に下りた。兜を失い、髪はザンバラに解け、顔にも血しぶきがこびりついていた。その武者は義経の姿を浜に見出すと、よろよろと近づいてきた。先陣をつとめた梶原景時だ。
「大将が先に逃げ出すとは何事ぞ。おかげで息子の景高は討ち死にしたぞ」
「そなたは自ら先陣を願い、手柄を求めて、中軍や後陣を省みず、無謀にも平家の船団へ突入したではないか。平家の逆襲を受けた時、味方の被害を少なくする為に引き鐘を打ち、退いたのだ」
「いずれにせよ、義経殿の指揮振りは鎌倉殿に伝えるぞ」

義経は薄暗闇となった三田尻の浜に目印の大篝火を焚かせた。
その篝火を目印にして、搦手軍の主な将、安田義定、土肥実平、田代信綱、三浦義連らの戦船が戻って来た。
だが、いずれの将も自ら矢傷や刀傷を負って血を流し、多くの郎党を失っていた。
「義経殿、あの大船は何処の船だ。今までに見たことも無いぞ」
相模の三浦半島に本拠を置く、三浦水軍の一員である三浦義連が聞いてきた。
「湛増は、宋で作った船ではないかと言っていた。何度か同じような船を大輪田泊（神戸港）で見たことがあるそうだ」

「伊予や阿波、摂津辺りで作れぬのか。同じ船が出来ねば、平家に海の合戦で勝つことなど出来ぬぞ」
三浦義連も湛増と同じ事を言った。
「三浦殿も矢張りそう思われるか。平家の水軍に勝つには新たに船から作り直さねばならない。それにあの船が射る矢も、どんな弓を使っているのかわからない。湛増も渡辺守嗣も摂津、熊野に戻り、新しい船の工夫を急ぎ行ってくれ」

三月二十五日の牛の刻（午後１２時）。
平家の先陣、山鹿秀遠の軍勢が大野城跡に前に迫った。楯を並べ、弓矢を持った兵が木立の間を横に広がり、大野城跡のある四天王寺山の斜面をゆっくりと進んだ。山鹿秀遠は兵のすぐ後ろで、敵陣の動きを見守った。
山鹿は菊池方の旗が風にはためく大野城跡の陣まで二町（２００ｍ）の所へ兵を進ませると、様子を見るために一旦そので止まった。
山鹿勢の後方より知盛が率いた中軍も、敵陣が一望出来る四天王寺山の麓へ到着したが、知盛の脇に馬を並べた謝国栄が敵陣の様子を見て不審を感じたように言った。
「知盛様。今、敵が陣を構える大野城跡に数羽の鳥が降りました。鳥は敏感な生き物です。殺気の満ちる兵がいる場所に鳥が舞い降りるなど考えられませんぞ」
「我も先程から敵陣に勢いが無く、不審に思っていたところだ。あれは虚の陣かもしれぬな」
知盛は使い番を山鹿秀遠の下へ走らせ、敵陣へ火矢を射込むように命じた。
「敵にも知恵者がいる。我ら平家の勢をこの大野城跡へ導き、その隙に別の方面に逃げ延びようとしたのか」
知盛が大宰府を脱出した菊池勢の行方を考えていると、前方の大野城跡の敵陣に何本もの火矢が射込まれ、敵陣より炎が上がったが、消しに走る兵はいなかった。

「矢張り敵陣は空でしたな。国栄殿、敵は何処に向かったと思うかな」
「肥後に引揚げたか、門司関にある源氏の勢と合流するために向かったか。肥後に向かったのなら、直ぐの脅威にはなりません。放置して置いてもかまいませんが、門司関の源氏勢と合流すれば平家に向かってくるのは必定。物見を出しましょう」
知盛は肥後方面と門司関方面へ物見を出し、菊池勢の行方を捜させた。

「葦屋浦《あしやうら》の合戦」　その１

「葦屋浦（あしやうら）の合戦」　その１

三月二十五日早朝、平知盛より早鞆の瀬戸の警護を命じられた下松浦党の松浦毅は、博多の湊より彦島へ五艘の宋船と五十艘の松浦水軍の戦船を率いて向かった。

その途中、早鞆の瀬戸に入る手前で船団を遊弋させると、津吉久（つよしひさし）に三艘の戦船で、彦島から門司関、赤間が関一帯の物見に向かわせた。その中の一艘、門司関に向かった戦船が真っ先に戻り松浦毅に伝えた。

「門司関に源氏の軍勢は見えません」

「何処へ向かったか、分らぬか」

「西へ向ったのを付近の漁師などが見ておりますが、行き先は不明です」

彦島、赤間が関に向かった戦船も戻ると、源氏の軍勢が見えないと松浦毅に告げた。

「深江、急ぎ博多の知盛様へ伝えよ。門司関の源氏勢は西方へ向かい、赤間が関には現れず。引き続き源氏の行方を探索、行方が分り次第連絡する」

大宰府より戻った知盛は鎧を脱ぐ間もなく、筥崎宮（はこざきぐう）の行在所へ入ると、兄の宗盛に会う前に、母の二位の尼と出会った。

「ご苦労様でした。我らはこの博多の地で久しぶりにゆったりとしております。知盛殿は随分と忙しく動いていると聞きました」

「は、只今大宰府より戻りました」

「勝ち戦だそうで、先ほど宗盛より聞きました。おめでとうございます」

「源氏は平家の勢いに驚いて逃げ出しただけ。戦はせずに済みまし

た」
「それは、よかった。宗盛の所へ行きなさい」
知盛は母の二位の尼の前を辞すと、宗盛の下へ向かった。
「大宰府の敵は壇ノ浦の合戦の結果を聞き及んだようで、我らが大宰府に到着した時には既に逃げ出しておりました」
「これで、暫くは安心だな」
「まだ源氏の範頼が率いる軍勢が門司関に残っております。この勢を九州より追出さねば、安閑としておられませんぞ」
「だが、この勢いで迫れば、門司関の敵など大した脅威にはなるまい」
「兄上、勢いだけで京を回復することは出来ませぬぞ。昨日も言いましたが、九州を平家の地盤として、京の回復を行う為にも、大宰府を逃げ出した官史を召しだし、博多を都となし、政を行っては・・・・」
「都を博多にだと、馬鹿馬鹿しい。知盛、戯言もいい加減にしろ」
「兄上、唐の国に於いても、賊に追われた帝が一時的に別の地に都を移す事があります。我らは京へ戻る事を諦める訳ではありません。京には後白河法皇が後ろ盾となった後鳥羽を天皇と称し、院宣を下して我ら平家に朝敵の汚名を着せた。だが、後鳥羽は三種の神器を持たぬ偽り帝だ。我ら平家に逆らう者こそ朝敵になる事を明らかにすべきだ。兄上は内大臣として延臣を束ね、朝議を催し、政を行って頂きたい」
知盛の勢いに押された宗盛は「時忠殿と相談する」とその話を打ち切った。
知盛は自分の部屋に、平資盛、平教経と鎮西探題（ちんぜいたんだい）をつとめた平貞能の三人を呼んだ。
「三人に来て貰ったのは他でもない。先ずは、平家に謀反を起こし源氏に味方したこの地の平家の家人を引き戻し、我が平家の勢を拡大する事だ。筑前、筑後の山鹿や原田、肥前の松浦党は我らの与力

だが、その他の者はどうなのだ。貞能ならよく知っておろう」
知盛の問いに貞能は九州各地の見知った顔を思い浮かべながら話し始めた。
「今も平家に与力するのは宇佐八幡宮の大宮司宇佐公通と板井種遠、肥前の神埼重光だ。豊後の大勢力の緒方惟栄、臼杵惟隆は源氏に味方し、範頼率いる山陽道軍の九州へ上陸に手を貸し共に軍勢を進めている。肥後の菊地隆直や木原、南郷らも源氏に味方し、大宰府まで出兵した。日向の宮崎惟尚《みやざきこれ日さ》は九州で唯一の源氏で平家に味方する事はない。肥後の川尻康高や相良延由、阿蘇一族、大隅、薩摩で平家の家人惟宗忠信も旗幟を明らかにしてない」
「では、豊後の宇佐と板井、肥前の神埼には博多へ集まるよう使いを出そう。肥後の川尻、相良、阿蘇、薩摩の惟宗には壇ノ浦の合戦の模様を告げ、味方するよう貞能の方から説いてくれ。戦で敵を倒すのも大事だが、今は味方を増やす事の方が大事だ。頼むぞ」
「知盛殿、物見からの知らせはまだ入らぬか。源氏がまだ門司関（北九州市）に留まるならば此方より押寄せ、合戦におよぼうぞ」
「教経、慌てるな。戦をするのは相手の行方を掴んでからだ。それまでは、味方を増やす工夫が大事だ。阿波の田口重能はどうなっている」
「壇ノ浦の前は伊予の河野と攝津の渡辺党に挟まれ、身動きが取れぬと言って来たが、河野も渡辺党も壇ノ浦で大きな痛手を受けた。今なら阿波の田口も博多まで出て来られるはず。讃岐の新居、土佐の滝口も同様かと」
博多の湊を警護していた山鹿秀遠の兵より、彦島へ出陣した下松浦党の松浦毅よりの急使が来たとの知らせが入った。
山鹿の兵に案内された松浦毅の急使が筥崎宮の行在所にやって来た。
「確か、深江だったな。何があったのじゃ」
急使は松浦毅の郎党深江三郎で、彦島の知盛に宋船の船団の到着を知らせた。

「門司関にあった源氏の軍勢は既に陣払いを行い、西に向かった模様です」
「何時頃、陣を払ったか判っておるのか」
「今朝、日の出前に漁に出た漁師が西へ向かう軍勢を見たとのことです」
源氏の山陽道軍が西へ向かったと聞いて資盛は顔を強ばらせた。
「我らが博多に入ったのを、源氏の者どもは既に知ったか」
「宋船のような大船の船団が停泊出来る湊は博多しかないことは、この地の者なら直ぐにわかる。門司関からこちらへ向かうなら道は決ってくる。我らより出向いて源氏を迎え撃つ。資盛、教経、戦の用意だ。皆に知らせい」
教経は足音高く知盛の部屋を出ると、境内を警護する兵を呼んで命じた。
「その方ら、聖福寺（せいふくじ）や櫛田神社（くしだじんじゃ）などの宿坊や神官の屋敷を廻り、戦仕度で集まるよう伝えい」

博多に集結する平家の勢は宗盛、知盛ら平家一門が七千、山鹿秀遠、原田種直、美気敦種、賀集種益ら筑前、筑後勢が七千、松浦党らの肥後勢が四千の合計一万八千だ。
だが、この全軍を出陣させる事は出来ない。
筥崎宮の行在所を護るため、三千ほどの兵を残す必要があり、彦島にある平盛時率いる平家一門と下松浦党の松浦毅の勢二千は早鞆の瀬戸を確保する為に動かせない兵だ。
二万余と言われる源範頼率いる山陽道軍に対し平家は一万三千と劣勢だが、場所と策を選べば戦える。範頼ならば義経と違い正攻法でくるので、義経よりも扱いやすい。
知盛が宗盛に範頼の山陽道軍の様子を告げ、出陣の手配りをしていると、謝国栄が急ぎ足でやって来た。
「今、響灘の馬島（うましま）（下関市）より戻った船の舵取りが、葦屋浦（あしやうら）（福岡県芦屋町）に陣を築いている軍勢を見たと知らせてきました」

「葦屋浦とは、どの辺りなのだ」
「遠賀川が玄界灘に注ぐ所の河口で、博多より徒歩で一日半、門司関からは一日ほどの処にあります。あの辺りは山鹿様の配下、宗像様の知行地の近くです」

三月二十六日の寅の刻（午前４時）。
昨晩遅くに降り出した小雨が降り止む気配は見えなかった。
暗闇の中、僅かな篝火を目印に博多の湊に近い筥崎宮の大鳥居の所に集まった平家の軍勢が二手に分かれて出陣した。
一手は平知盛自らが率いる五千の騎馬武者。色取り取りの鎧を着た武者は雨除けの蓑を着け、兜より滴る雨を物ともせず、粛々と西海道を葦屋浦へ向け出陣した。
先陣は侍大将の平盛継、盛貞を従え赤糸縅の鎧兜を着けた平教経。
中軍は総大将知盛が黒糸縅の鎧兜を着け青鹿毛の馬に跨り、その前後を侍大将の伊藤景清、景家らの郎党が固めていた。
もう一手は平資盛、貞能が率いる八千の徒歩だ。徒歩の兵は博多の湊より平家水軍の宋船で、宗像の神湊（福岡県宗像市）へ向かった。筥崎宮の行在所に残った平宗盛と息子の清宗は三千の兵で安徳天皇、建礼門院、二位の尼などの警護についた。

知盛は謝国栄より源氏勢の行方を知らされると、葦屋浦付近に知行地を持つ山鹿秀遠の侍大将の宗像三郎を呼び、葦屋浦の様子を説明させた。
「蘆屋浦は遠賀川が玄界灘に注ぐ河口にあり、河口の幅は二町半（２５０ｍ）ほど。今の時期は水量もそれほど多くなく、騎馬であれば楽に渡河できます。河口には葦が生茂る中洲が散在しますが、河原は広く騎馬を掛け合わせるに適した場所といえます」
宗像より蘆屋浦の様子を聞いた知盛は、集まった諸将に告げた。
「源氏は得意とする騎馬を生かして戦える場所を選んだようだ。我らも出陣、迎え撃ち、源氏の軍勢をこの九州の地より追い払う」

又、宗像は葦屋浦の手前に、宗像大社へ詣でる者が船を着ける神湊（かみみなと）（福岡県宗像市）があり、そこならば大船を着けられると告げた。
「国栄殿、至急に宋船、大船の用意を。明日の未明、八千の徒歩を博多より宗像の神湊まで運ぶ」
知盛は源氏が一日先行して葦屋浦へ向かった事で、足の遅い徒歩は船で運び、騎馬武者だけで西海道を進もうと思った。
そうすれば、二十六日の早朝に博多を出発しても夕刻には蘆屋浦へ着ける。
源氏の勢は今朝早く門司関を発ったが、兵糧米など荷駄の者を伴なうので、葦屋浦に到着するのは今晩遅くか明朝だ。
ここで、範頼の勢に敗れれば、壇ノ浦での勝利も水の泡になる。知盛の思いは先陣の平教経や徒歩を率い平資盛、貞能にも伝わった。

西海道はぬかるみ、蓑を着けても鎧の隙間より入り込む雨が体を濡らす。
平家の騎馬武者は馬の脚を休める事もなく、雨で増水した多々良川（たたらがわ）を渡り、香椎宮（かしいのみや）（福岡市）から宗像の神湊（福岡県宗像市）へと進んだ。
知盛が率いる五千の騎馬武者が神湊へ着いたのは巳の刻（みのこく）（午前１０時）頃。
同じ頃、博多の湊より徒歩を乗せた宋船や大船が次々と神湊へ到着し、徒歩を降ろしては博多の湊へと引き返した。
浜で徒歩の上陸を見守る謝国栄の脇に、先陣を率いて到着した平教経が並んだ。
「雨に体を濡らし、ぬかるんだ道を馬で進むより船で来た方が楽だったのではないか」
「教経様、わずかな間でも船に揺られ、気分が悪くなる兵も出ました。それに、大船から上陸用の小船に乗り移る際に海へ落ちる兵もおり結構大変でした。ですが、海に慣れた兵なら、敵の後方へ上陸して奇襲を掛けることもできますぞ」

「どうだ、この合戦でもその策は使えるか」
「それは、源氏がどの辺りに陣を構えるかによりますぞ」
「それが、可能であればそなたに船の手配を頼むことになるな」
二人が話している間にも徒歩は神湊へ上陸すると、平資盛、貞能の指揮の下に蓑を着け笠を被り西海道を葦屋浦へ向かった。
教経が上陸の様子を見守っていると、徒歩の上陸が一段落した頃、宋船より大型の連弩を乗せた台車が小型の船に積み込まれ陸揚げされた。
「国栄殿、あれは壇ノ浦の船戦で源氏の船板に大穴を開け、楯を打ち砕いた大連弩ではないか。知盛様の命か」
「いや、この戦でも役立つと思い用意した台車で陸揚げしたまで、何方の陣に置くかは知盛様とこれから相談です」
「ならば我が陣で使わせてくれ。知盛殿には我より伝える。国栄殿も一緒に葦屋浦へ来て下され」
教経は自分の替え馬を国栄に与えると、葦屋浦への同行を願った。

葦屋浦の村落は遠賀川の河口より二町（２００ｍ）ほど中へ入った所にある。
風除けの板塀で囲まれた網元の屋敷を中心に、板葺きの漁師の家が数十軒ほどかたまった小さな村落で、僅かに切開かれた田畑がある他は原野が広がっているだけだ。
門司関（北九州市）から西海道を進んで来た源範頼率いる二万余の山陽道軍の最後尾は荷駄を運ぶ豊後の緒方、臼杵の勢。葦屋浦に達した頃には日も暮れ小雨が降り始めていた。
山陽道軍は葦屋浦へ到着した順に陣を構え、大宰府からの菊池勢の到着を待った。
源氏方が陣を構えた場所は葦屋浦の河口から十町（１ｋｍ）ほど内陸に入り、遠賀川の河原や対岸がよく見通せる右岸のやや小高くなった所だ。
河原に向かって楯を引廻し、水捌け用の溝を掘り、陣幕を張り、陣

小屋を組んだ。
中央に総大将の源範頼が陣を構え、その左右には北条義時、足利義兼、千葉常胤、三浦義澄、小山朝光、仁田忠常、比企能員、和田義盛、畠山忠重ら坂東よりの将が陣を並べた。
緒方、臼杵の豊後勢、周防の宇佐木の勢は遠賀川の河口に近い場所に陣を構えた。

二十六日の朝、昨晩より降り続いた雨で増水した遠賀川は河口付近では三町（３００ｍ）にも達し、「ゴウ、ゴウ」と音を立てて流れた。
「今日は、各自の陣で休息だ」
天候の様子を見た範頼の命が各陣に伝えられると、ほっとした空気が流れた。
そんな中、深刻な顔をして臼杵惟隆が緒方惟栄の下を訪ねた。
「緒方殿、今朝になると雑兵、人足合せて百名ほどが陣内より逃亡しました」
「そなたの陣でもか。我が陣でも二百名ほどが逃亡したぞ。門司関を出る時より、間もなく田植えの時期、早く豊後へ戻りたいと不満をもらす者が多かったからな」
「坂東や周防の者は田畑を耕す者を残しておるから、少しばかり長陣となっても痛痒は感じないだろ。だが、我らは田畑を耕す者まで狩り出し来ている。これ以上、戦が長引けば今年の収穫は期待出来ない。菊池勢も同じではないか」
「だが、我らは源氏方に与力したのだ。今更、陣を引く訳にはいかぬぞ。だが、いざとなれば・・・・・・」
緒方惟栄は小声で臼杵惟隆に何事かを告げると、二人で臼杵の陣へ向かった。
その日は一日中雨が降り止まず、目の前を流れる遠賀川の水量は次第に多くなった。
雨中の移動に疲れた菊池隆直や木原、南郷らの肥後勢二千が葦屋浦

へ到着したのは、その日の夕刻だった。

「葦屋浦《あしやうら》の合戦」　その２

「葦屋浦（あしやうら）の合戦」　その２

三月二十七日、雨の上がった空に朝日が昇った頃。
源氏の勢が目を覚まして左岸を見ると、何時の間にか、赤い旗をなびかせ、楯を並べ、揚羽蝶の印の陣幕をめぐらした平家の陣が築かれていた。
源氏の各将は慌ただしく山陽道軍の総大将源範頼の陣へ集まった。
北条義時、足利義兼、千葉常胤、三浦義澄、小山朝光、仁田忠常、比企能員、和田義盛、畠山重忠ら坂東から遠征してきた将に加え、豊後の緒方惟栄、臼杵惟隆、周防の宇佐木遠隆、肥後の菊池隆直らだ。
各将の陣でも不寝番を立てていたが、平家が陣を構えた事に気付いた者はいなかった。
「平家が出てきたは好都合。矢を合わせ、馬を掛け合わせ、平家の勢を討ち破ろうぞ」
三浦義澄は相変わらずの強気で総大将の範頼に迫った。
「敵の数も分らぬまま討ち掛かるは、猪武者。まずは平家の勢がどの程度か、物見を出すのが先決では」
「あの陣構えをどの様に物見するのだ。矢合わせをし、平家の勢いを探るのが物見だ」
「義澄殿、川は雨で増水しており、平家の陣までは四町（４００ｍ）はありますぞ。どの様に矢合せを行うのじゃ」
「北条の若殿に三浦の戦ぶりを披露してやる」
憤然と立ち上がった三浦義澄が陣を出て行った。
「範頼殿、三浦殿を止めた方が」
「いや、ここは三浦殿の言う通り、平家の勢いを探るのが第一。三浦殿にお任せする」

平家の陣は中央の陣を二段に構えていた。
一段面は平教経が四千の騎馬武者と謝国栄が率いる百基の大連弩の台車で陣を構え、二段目はその後方に総大将の平知盛が侍大将の伊藤景清、景家と千の騎馬武者で陣を構えた。
左右の陣は平資盛と貞能が各四千の徒歩を率いて陣を構えていた。
黄糸縅（きいとおどし）の鎧の紐を締め直し、兜を目深く被り、栗毛の馬に跨った三浦義澄は、弓手に三人張りの繁藤の弓を携え、二十騎の郎党を引き連れ陣を出ると、河原から遠賀川に乗り込んだ。
増水した遠賀川の流れは激しい。三浦義澄は川に乗込んだ馬の脚を慎重に進めた。
川中の半ばに達する前に水は馬の下腹に達し、三浦の足を大きく濡らした。
平家の陣までは二町（２００ｍ）近くはあるが、これ以上進めば馬が川の流れに押し流される恐れがある。
さすがの三浦義澄も馬の脚を留めた。平家の陣よりも何事が始まったのかと、大勢の将や兵が河原に出て三浦勢の動きを見ていた。
ここまで来れば、名乗らずに引返す事はできない。
「我こそは、相模の国三浦の住人三浦義澄なり。平家の者共、我が矢を受けてみろ」
三浦義澄は馬上で弓を大きく引絞り鏑矢を射放つと、その矢は大きく円弧を描いて平家の陣の前に構えた楯を見事に射た。
それを見た源氏の陣より、「ワー」と歓声が上がった。
三浦義澄の矢に合わせ、二十騎の武者が一斉に矢を放った。
「カッツン、カッツン」平家の構えた楯に鏑矢が当たる音が辺りに響いた。
その時、平家の中央の陣より赤糸縅（あかいとおどし）の鎧に烏帽子（えぼし）姿の武者が前に進み出た。
「我は中納言平教盛が一子教経なり。源氏のヒョロヒョロ矢は我が平家の楯も射抜けぬと見える。我が平家の矢を受けてみよ」

教経が手を上げると、その脇に馬に引かれた木の台車が現われた。遠賀川に乗入れた三浦勢や対岸の源氏の陣では何が始まるのか注目した。
教経の右手が振り下ろされると、「シャー」台車の上からものすごい勢いで矢が飛び出し、義澄の脇に従っていた郎党の鎧を射抜いた。矢の勢いで、その郎党は馬上より弾き飛ばされ、遠賀川の中に落下し、強い流れに？み込まれた。
平家の陣では、武者が弓を振り上げ、馬の鞍を打ち鳴らし「ワー、ワー」と大きな歓声が上がった。
逆に源氏の陣からは声も無く、三浦義澄も慌てて馬を返し、自陣へ戻っていった。
「国栄殿、この大連弩の威力の凄まじさを改めてみたぞ」
陣の前面に立った平教経は宋船の矢倉に据えたのと同じ一間（1.8m）の大連弩を操る国栄に声を掛けた。
「この大連弩を百も並べ、源氏の陣へ射ち込めばこの合戦の勝利は間違いない。この前の船戦で威力は知ったが、それを台車に乗せて使えるようにするとはさすが国栄殿だ」
教経の陣の処まで総大将の知盛が出てきた。
「どうだ、教経。源氏はすぐにも押し出してくると思うか」
「この川の流れが落着くまでは、いくら源氏の武者でも無理でしょう。それに、国栄殿の連弩の威力を見た後で、直ぐには・・・・」
「では、その間に、徹夜で陣を築いた兵の体を休め、合戦に備えさせよ」

三月二十八日の早朝、昇り始めた朝日の中を大楯、弓矢を持った源氏の徒歩の水の引いた河原を進み、遠賀川の川沿いギリギリまで進み出た。
その後方からは赤糸縅、黒糸縅、黄糸縅など色取り取りの鎧兜を着た騎馬武者が続いた。
平家の陣でも源氏の武者や兵の動きを見て、左右の陣より弓矢を持

った徒歩が河原に組んだ楯の陣まで進み出た。
源氏勢と異なり、平家の陣の中央には馬に曳かれた台車が百基並び、その後に色取り取りの鎧兜の騎馬武者が並んだ。
「放て、放て。川を渡る敵の動きは鈍いぞ。狙って射落とせ」
源氏の弓兵より矢が放たれたのを見た平資盛が大声で徒歩に命じた。
両軍より放たれた数千本にものぼる矢が空を薄暗く覆い、ザーザーと音を発て、兵の頭上から落下した。
楯に刺さり、地に刺さる矢も多いが、徒歩の被る薄い陣笠や具足を射抜き、血を流して倒れる兵が続出した。
源氏方では「丸に三引両」の旗印を掲げた三浦義澄が先陣に立ち、五百の騎馬武者が馬を揃えて遠賀川を押し渡り始めた。
足利義兼、千葉常胤、和田義盛ら四千の騎馬武者がそれに続いた。
馬の腹下ほどの深さの遠賀川を源氏の騎馬武者が一斉に押し渡り始めた。
騎馬武者は馬の背に伏せ、兜の錣を傾けて、上空より降る矢を防ぎ、馬足を急がせた。
遠賀川の川幅は一町半（１５０ｍ）ほどだ。川の半ばに源氏の騎馬武者が達した所で、国栄がずらりと並んだ百基の大連弩の射手に発射を命じた。
「中央を進む武者を狙え、続けて矢を射ろ」
太い百本の矢が遠賀川を渡る源氏の騎馬武者の中央を襲った。船の側舷に大穴を開けるほどの威力がある矢だ、人の体を射抜けば一たまりもない。
大連弩の矢を受けた騎馬武者は鎧を打ち抜かれ、腕や脚に矢を受けた者は腕や脚を失い、血を流して遠賀川の流れに落ちた。
馬の背に伏した者も馬の首筋ごと射貫かれ、そのまま川の中へ落ちた。
目前を掛ける武者が一斉に百騎ほど矢を受けて川の中へ落ち込んだが、後続の騎馬武者は前方で何が起きたのか分らずそのまま突き進む。

再び、大連弩からの太い矢が、連続して源氏の騎馬武者を襲うと、百騎ほどの騎馬武者が矢を受け、鎧から血を流し、悲鳴を上げ遠賀川の中へ落ちた。

ようやく後続の騎馬武者にも何が起きたのか分った。
平家の陣の前に据えた台車から放たれる矢に射られたのだ。後続の騎馬武者はその矢に射られぬよう、川の上流や下流に逃げようとする者、馬を返し自陣へ戻ろうとする者で中央部は混乱した。
上流を押し渡る菊地勢や下流部を渡る豊後勢には何故中央を進む騎馬武者が自分達の方へ向ってくるのか分からなかった。
菊地勢や豊後勢は中央を進む騎馬武者の陣が混乱しても、そのまま平家の陣を目掛け馬を進めた。
大連弩の指揮を取っていた謝国栄が大声で射手に命じた。
「狙いを左右に分けろ。上流、下流より迫る騎馬を狙い、続けて射ろ」
上流と下流に向きを変えた台車から再び太い矢が射られた。
すると、中央を進んだ源氏の騎馬武者を襲った惨劇が今度は菊地、豊後勢を襲い、遠賀川を進んだ源氏の騎馬武者は平家の陣に背を向け一斉に自陣へ逃げ戻った。
「今だ、駆けろ、駆けて、源氏の者の首を討て」
平教経は赤糸縅(あかいとおどし)の鎧兜を締め、四千の騎馬武者を率いて源氏勢の追撃を開始した。河原の小石を跳ね上げ、平家の騎馬武者は突進した。先頭には赤糸縅の鎧兜に長刀を小脇に抱え、青鹿毛(あおかげ)の馬を駆った平教経が立った。
「楯を倒して脇に退け。味方の馬蹄にか蹴られるな」
徒歩を率い、弓の陣を指揮していた平資盛が命じた。
遠賀川に走り込んだ教経が率いる四千の騎馬武者は水飛沫を上げ、源氏の騎馬武者を追った。左岸では川岸に弓の陣を構えた源氏の徒歩と騎馬武者が縺れ合う様に混乱した。
「この機を逃すな、討て、討つのだ」

教経は騎馬武者の先頭で長刀を振り、後続の平家の騎馬武者を叱咤した。
先陣の侍大将平盛継、盛貞は大太刀、長刀を振るい、逃げる源氏の武者に振り下ろす。
源氏勢の背後に取り付いた平家の騎馬武者は、一人又一人と源氏の武者を斬り倒した。
大太刀と長刀、大太刀と大太刀がぶつかり合う音、馬と馬がぶつかり合い、傷ついた武者の叫び声が遠賀川の河原に渦巻いた。

「何故だ、何故、騎馬武者らが崩れたのだ」
河岸の土手に進出した陣から戦の様子を見ていた源氏の山陽道軍の総大将源範頼は、床机から立ち上がり叫んだ。
「敵陣に並んだあの台車より放たれる矢で、騎馬武者が討ち取られ、崩れました。このままでは平家の武者の追撃を受け、陣が崩されます。今より、追撃してきた平家の騎馬武者の側面をこの重忠が叩きます」
範頼の脇で戦の様子を見守っていた畠山重忠は、急ぎ自分の陣へ戻り、五百騎ほどの騎馬武者を率いて出陣すると、遠賀川の川下から大きく迂回した畠山勢は、教経が率いる平家の騎馬武者隊の側面に突入した。
「我は武蔵の国男衾（埼玉県深谷市）の住人、畠山重忠。我と思わん者は勝負いたせ」
黒糸縅（くろいとおどし）の鎧兜、黒鹿毛（くろかげ）の大柄な馬に跨った畠山重忠は、平家の騎馬武者の間に強引に馬を入れ、大太刀を振るった。
「我は、伊勢の国は白子の庄の住人、平盛国が一子盛嗣（もりつぐ）なり。畠山重忠殿と巡り合えたは我が誉なり、勝負いたす」
畠山の振るう大太刀を長刀で受けた平盛嗣は馬首を変え、畠山と向き合った。大太刀と長刀の撃ち合いは僅か三合で終わった。畠山の大太刀が盛嗣の長刀を弾き飛ばし、盛嗣を川の中に叩き落した。
「平盛嗣を畠山重忠が討ち取った」

畠山は平家に追われる味方の源氏勢に聞こえるように声で叫んだ。
それを聞いた侍大将の平盛貞は、教経に馬を並びかけて告げた。
「教経殿、今が潮時だ。この辺りで、引き上げましょうぞ」
「分った。盛貞、引上げの合図を」

「葦屋浦《あしやうら》の合戦」　その３

「葦屋浦（あしやうら）の合戦」　その３

未の刻（ひつじのこく）（午後２時）、総大将の平知盛が源氏の騎馬武者を討破り引揚げてきた平教経を陣の前で迎えた。

「教経殿、見事な戦振りだった。連弩の使い方も見事であったぞ」

知盛のほめの言葉にも教経の顔はそれほど冴えなかった。

「あの側面からの突入さえなければ、大きく源氏の武者を蹴散らす事が出来たと思うと残念です。源氏の中にも猪武者でなく、戦の駆引きを心得た者がいたようです」

「あれは、武蔵の畠山の勢だな。一の谷や屋島の戦でも何時もここぞという所へ畠山勢が現れた。明日からも畠山勢の動きには警戒が必要だな。源氏の勢をあれだけ痛めつけたが、これを挽回しよと夜襲を掛けてくる事も考えられる。陣構えをどうするか皆に集まってもらった」

平知盛が教経を伴い本陣へ入ると、既に平資盛や貞能、侍大将の平盛澄、伊藤景清、景家に松浦党の松浦正、松浦直、佐志調、筑前の山鹿秀遠、美気敦種、賀集種益、原田種正らが集まっていた。

「先ほどの戦は教経の策が見事当り、源氏の勢を蹴散らす事ができた。だが、次は源氏も策を巡らして来るだろう。源氏はどのような策で来ると思うか」

中央の床机に座った知盛は、そう言って皆の顔を見廻した。

「まずは、今晩辺り大連弩を狙い、夜襲を掛けてくる事が考えられますぞ」

「夜間は台車から馬を切り離すだけに、簡単に動かす事も出来ず狙われると厄介だ」

平貞能や平盛澄から夜襲を懸念した声が挙がった。

「それは、国栄殿からも言われておる。左翼、中央、右翼の三箇所

に分散して置く。そうすれば、いざという時に壊滅する恐れはない」
「連弩の事は教経に任せるぞ。今宵は各陣共に宿直を増やし、夜襲に備えろ」
知盛が陣構えを確認しようと立上がった時、平貞能が言った。
「こちらか一つ仕掛けませんか」
「貞能殿、何を仕掛けようと言われるのだ」
「豊後勢を率いる緒方惟栄、臼杵惟隆の両名は元来重盛殿の家人で、一の谷、屋島と平家の負け戦が続いた後に九州に上陸した範頼の山陽道軍に味方した者。以前はいくら平家の味方に戻るよう問いても無理でしたが、今なら翻意させる事も可能かと」
「壇ノ浦に続き、この戦でも我が平家が優位に立っておるからか」
「それも御座います。だが、今は三月も末の田植えの直前。豊後勢は兵や人足として農民をずいぶんと狩り出したと聞いております。このまま滞陣が長引けば今年の収穫は無理となります。両名に源氏の陣を抜け、国許へ戻るなら何も咎めぬと言えば」
貞能の言葉で知盛は平家の陣でも筑後の山鹿、原田の一党や肥前の松浦党辺りも同じではと質した。
「この辺りは我が山鹿や原田の所領の一部。我らは源氏を追い出さねば、田を作り苗を植える事も適いませぬ」山鹿秀遠が答えると、松浦直も「我が松浦の者は漁で日々の糧を稼いでおり、田畑はごく僅かしかありません。その心配はご無用です」と答えた。

三月二十九日、寅の刻（午前４時）。対岸の源氏の陣から兵や馬が河原の石を踏む音が響いた。
だが、河原には前夜の冷え込みで川霧が立ち込め、十間（１８ｍ）先も見通せぬほどだ。
その川霧の中より「ワー」と吶喊の声が聞こえてくる。だが、源氏の武者や兵の姿は見えない。中央の陣に陣取る平教経にも源氏の陣構えは不明だ。
前日、一方的に平家の大連弩と騎馬武者に叩かれ、惨憺たる有様

となった源氏勢では、遠賀川の流れに沈み、河原に血を流して倒れた武者が千名以上に達していた。
範頼の本陣へ戻った源氏の諸将、三浦義澄、足利義兼、千葉常胤、和田義盛、緒方惟栄、菊池隆直らの鎧には折れ矢が残り、大袖は千切れ、大太刀は曲がり、額や腕、脚に巻かれた布からは血が滲んでいた。本陣へ最後に戻って来たのは畠山重忠だ。
畠山勢は三浦、足利、豊後、菊池らの勢を救うため、僅かな人数で平家の騎馬武者の側面を強引に衝いたので、傷付き血を流している武者が多かった。
重忠は本陣に入るなり、並んだ諸将に向かって言った。
「今日の様な戦をしては、死者が増えるばかりだ。何か策を考えねば」
畠山のその言葉に、何時もは強気の三浦義澄も黙って肯いただけだ。
「明日は平家の陣の全面に亘り徒歩、騎馬による激しい矢の攻撃で平家を牽制し、上流より渡河迂回させた騎馬武者を平家の陣の側面に突入させ、平家勢を撃破る」
範頼の脇に控えた北条義時が集まった諸将へ告げると、下総の千葉常胤が中央の床几に座る総大将の源範頼に質した。
「迂回攻撃は誰に命じるのか。迂回に余り大人数を回せば、平家陣への牽制攻撃の勢いが弱まり、迂回の事を平家に嗅ぎ付けられますぞ」
「迂回は本陣の小山、仁田、比企に命じる。左翼（遠賀川の上流方向）は肥後の菊池殿と足利、千葉殿の勢合せて五千、右翼は緒方、臼杵殿らの豊後勢の四千、正面は北条、三浦、和田、畠山の勢に周防の宇佐木殿を合せ六千。本陣は範頼様の手勢二千で護る。迂回する小山、仁田、比企の各勢は本日の夜半過ぎに上流の渡河地点で待機に入る。夜明けと同時に我らは平家の陣へ矢戦を仕掛け、迂回の者はその喚声を合図に渡河、攻撃を行う」
平家の陣の中央では平教経の脇に総大将の知盛が立ち、霧の向こ

う側にある源氏の陣を睨んでいた。
日付が二十九日に変わる子の刻（ねのこく）（午前０時）、夜襲を警戒して増やした宿直の者が源氏の陣より伝わる静かなざわめきに気付いた。
「源氏の陣に動きがみられます」
宿直の者が告げると、知盛から密かな声で戦仕度が命じられた。
総大将の知盛以下全ての兵が鎧兜を着け、大太刀、長刀、弓矢を持ち、馬には鞍を置き、楯を用意した。
平家では総大将平知盛の命で二十八日に夕刻には陣変えを行っていた。
右翼（遠賀川の上流側）に陣を構える平資盛の指揮に、中央の教経の陣より侍大将の平盛澄と松浦党の松浦正、直らの二千の騎馬武者が入った。
資盛は徒歩四千、騎馬武者二千の四千で右翼を守り、遠賀川の上流を迂回、渡河して攻めてくる源氏の勢に備えた。資盛の下には国栄が指揮する五十基の大連弩も加わった。
中央の平教経の陣には左翼の山鹿勢より原田種正が率いる騎馬武者と知盛の本陣より伊藤景家が率いる騎馬武者合わせて千が加わり、騎馬武者二千と徒歩二千、五十基の大連弩で源氏の来襲に備えた。
教経の陣の後方に置かれた知盛の本陣は僅かに侍大将の伊藤景清が騎馬武者五百で護るだけで予備の兵はない。
左翼（遠賀川の下流側）は山鹿秀遠の下に騎馬武者五百と徒歩兵四千で源氏勢の来襲を待ち構えた。

川霧で十歩先も見通せぬ中、「バラ、バラ」と音を発てて源氏の兵が射込む矢が遠賀川の河原に陣取る平家の勢の手前に落ちた。
「霧の中の敵へ矢を射込め」
教経は国栄より大連弩ならば二町半（２５０ｍ）先の鎧を射貫けると聞かされていたので、五十基の大連弩に発射を命じた。
大連弩から放たれた太い矢が霧の中へ吸い込まれると、霧の奥より兵の悲鳴や楯が割れる音、兵が倒れこむ音などが響いた。

「続けて、矢を射込め。連射、連射しろ」
教経の発射の声を合図にしたように、右翼（遠賀川の上流側）の平資盛の陣でも戦が始まった。
対岸の源氏の陣に対し楯を並べ弓矢を持った徒歩が横に拡がり、その後方に平盛澄と松浦正、直が率いる騎馬武者が馬面を並べていた。
国栄が率いる大連弩は徒歩と騎馬武者の中間に位置していた。
資盛の合図で、国栄は対岸の霧の中への発射を命じると、こちらでも霧の奥から兵の悲鳴や楯が割れる音が響いた。
だが、暫くすると河原を掛ける多数の馬蹄の音が遠くより響いた。
「源氏が上流から来るぞ、徒歩の向きを変えろ」
「騎馬が前に出ろ」
慌てた声が資盛の陣に響いた。上流より迂回して攻める源氏勢に対し、資盛の陣はまったく無防備な横腹を晒していた。
「大連弩で攻撃する。敵は近いぞ、早く向きを変えろ」
国栄の命で、一斉に五十基の大連弩が上流に向きを変え、太い矢を川霧の中を駆けてくる源氏の騎馬武者に向けて放った。
「シャ、シャ」大連弩より太い矢が放たれる毎に、騎馬武者が落馬する音、傷付いた武者の上げる呻き声、矢に射られた馬の嘶きなどが蹄の音に混じり聞こえた。
大連弩を四射した処で朝日が昇り、気温が上がると川霧は緩やかに晴れ、半町（５０ｍ）先の武者の姿がぼんやりと見えた。
「盛澄、松浦直、前にでろ。大連弩の前で源氏の奴らを止めるのだ」
資盛が大声で命じると、侍大将の平盛澄と松浦正が二千の騎馬武者を率い、馬面を揃えて前進した。それを見た国栄が大連弩を後退させた。

上流を渡河、迂回した源氏の騎馬武者は小山、仁田、比企の三千だ。
大連弩の矢を受けて三百騎ほどが倒れ、落馬したが、残りの騎馬武者は長刀、大太刀を構えて突入してきた。
五十基の大連弩のうち最後尾を走る三基が源氏の騎馬武者に追いつ

かれた。
源氏の武者の振るう長刀がその内の一基の馬手を斬ると、馬手を失った台車は荒地に乗り上げ転倒した。
その様子に気付いた国栄は乗っていた台車を止めて、降り立ち三叉槍（さんさそう）を持って源氏の騎馬武者に対抗した。
国栄の他にも後ろの台車の様子に気付いた者が方天鉾（ほうてんほこ）や狼牙棒（ろうげぼう）などの武器を手に持って、台車より降立って源氏の騎馬武者と渡り合った。
相手が振り下ろす大太刀を三叉槍の柄で横に弾き、鎧の胴を三叉槍の柄で殴り馬から叩き落し、穂先の三叉で相手の長刀を絡め取った。
国栄ら十人が二十騎ほどの源氏の騎馬武者を防いでいる所へ、平家の平盛澄、松浦正らが率いる二千の騎馬武者が大太刀、長刀を構えて突入し、国栄らを救った。
馬と馬がぶつかり合い、長刀と大太刀の撃合う鋭い金属音が響き、傷ついた武者の叫び声が渦巻き、平家と源氏の騎馬武者同士の戦いは果てしなく続く様に見えた。
だが、平家の騎馬武者二千に対し、源氏は三千の騎馬武者。徐々に平家は源氏に圧倒され、押し包むように倒された。
「矢だ、矢で、奴らの馬を止めろ」
資盛が河原に陣を構えた徒歩に命じた。平家の騎馬武者を圧倒した源氏の騎馬武者が既に一町（１００ｍ）のところまで迫っていた。前後二段に分かれた四千の徒歩兵が一斉に弓を引き絞り、矢を放った。
「ザ、ザ、ザザー」
四千もの矢が河原一杯に広がった源氏の騎馬武者に射込まれた。
馬を射られ、鎧に矢を受けた源氏の騎馬武者が河原に投げ出されたが、倒れた騎馬武者や馬が後続の騎馬武者の脚を止めることは無かった。
左翼（遠賀川の下流側）に陣を構えた山鹿秀遠は奇妙な戦をして

いた。
前面に陣を構えた源氏の豊後勢は「ワー、ワー」と喚声を上げ、矢を射てくるが、その矢は鏑矢(かぶらや)だった。
昨晩、葦屋浦の網元の家で平貞能は豊後の緒方惟栄、臼杵惟隆の両名と密かに会い、総大将平知盛の言葉を二人に告げた。
「緒方、臼杵の両名がこの合戦の場より兵を引けば、これまでの平家に対する謀反は不問とする。だが、今後も源氏に味方するようであれば、宋船で豊後の曲の浦（大分市佐賀関港）を襲撃する」
貞能から知盛の言葉を聞いた緒方惟栄、臼杵惟隆の両名は安堵の息を漏らした。
この葦屋浦に滞陣して以来、豊後勢の中から毎日二百、三百と兵や人足が逃げ出し、当初五千はいた豊後勢も今では四千以下に激減した。
四月の田植えの時期を間近に迎え、田や苗代の事を心配して豊後へ戻ったのだ。
緒方惟栄、臼杵惟隆の二人も宿直の兵を増やし、兵や人足の逃亡を取締まったが、取締る側の兵も同じ農民の出で、逃出す兵や人足に同情し見逃す事も多く、軍勢の減少に歯止めが掛からず困惑していた。
二十九日未明、緒方惟栄よりの使いが平貞能の陣を訪れ、緒方、臼杵の両名が署名した熊野牛王符(くまのぎゅうおうふ)を持参し告げた。
「緒方、臼杵の両名共、今日の合戦の最中に陣を引きます。用いる矢は全て鏑矢です」
その事は直ぐに左翼（遠賀川の下流側）の陣の山鹿秀遠には知らされたが、山鹿はその事を配下の兵には誰にも知らせず合戦に臨んだ。
やがて、川霧が晴れて対岸の源氏勢の陣が見えた。豊後勢の多くは既に陣を払い、残った僅かな騎馬武者が大声をあげて駆け回っていた。
それを見た山鹿秀遠は大声を上げた。
「この戦は平家の勝ち戦だ。川を押し渡り源氏の陣を衝く。我に続

け」
五百の騎馬武者を先頭、山鹿秀遠は源氏方の中央の陣を側面より衝くように遠賀川の渡河を始めると、続いて賀集種益が三千の徒歩兵を率いて渡河を始めた。
その様子を見た総大将の平知盛が命じた。
「教経、騎馬武者を率い源氏の中央を突破しろ。我は資盛の援勢に向かう」
黒糸縅の鎧兜姿の知盛は、侍大将の伊藤景清と五百騎の騎馬武者を率いて資盛の陣へ馬を駆けた。
「大連弩で三連射したら、弓兵の援護の下に突入するぞ」
赤糸縅の鎧兜の教経が青鹿毛の馬の跨り、長刀を振りかざし、騎馬武者の先頭で叫んだ。
大連弩より放たれた太い矢が三連射で源氏の陣へ向かった。
その後を追うように二千の徒歩が遠賀川の川岸に進出し、上空目掛け一斉に矢を放った。
一瞬の間に広がった黒い傘の下を、平家の二千の騎馬武者が馬脚を早め、遠賀川を渡河した。

源範頼の本陣に動揺が広がった。
右翼（遠賀川の下流）の豊後勢がいつの間にか陣を引き、がら空きとなった右翼へ平家の騎馬武者が迫ってきた。
中央の陣では右翼の護りを固めようと北条義時が陣を動かした。その為、隣の三浦義澄、和田義盛の陣の間に大きな隙間が出来た。
その隙間に平家の侍大将伊藤景家が五百の騎馬武者を率いて突入した。
「我は、平中納言知盛の郎党にて伊勢の国の住人伊藤景家なり、尋常に勝負いたせ」
伊藤景家は頭上に構えた長刀を前に立ち塞がった源氏の騎馬武者に振り下ろした。
二人の馬がぶつかり相手の体が傾いた。景家の振り下ろした長刀は

相手の兜を打ち据え、大太刀を取り落とした源氏の武者は河原に落馬した。
伊藤景家は馬を止め、武者の首を取る事もなく別の源氏の武者へ向った。続いて、源氏の陣へ突入した教経も自ら長刀を振るい、源氏の武者を斬り倒した。
平家の武者に馬乗りになった源氏の武者を、平家の徒歩が太刀で倒す。
平家の騎馬武者と源氏の騎馬武者が馬を駆け合わせ、大太刀を撃合わせる。遠賀川の右岸に構えた源氏の陣は平家と源氏の武者や兵で混戦となった。
「八田、本陣の兵を出せ」
遠賀川の土手上に築かれた本陣から戦況を見た範頼が立ち上がり、脇に控えた八田友則（はったともの り）へ声を掛け、自らも兜の紐を締めて青鹿毛の馬に跨った。
ここで、範頼の本陣の二千の騎馬武者が目の前の混戦に加われば、戦は一気に源氏に傾く。範頼は自ら先頭に立ち、混戦に決着をつける覚悟で土手を降り始めた。
その時を狙っていたように、源氏の本陣が置かれた土手の裏から小型の連弩や弓を抱え水軍鎧を身に着けた平家の兵が現れた。
この平家の兵は彦島へ向かった松浦毅が率いる下松浦党の兵だ。宗像の神湊で謝国栄より海に慣れた者ならば、船で相手の後方へ上陸し、奇襲を掛ける事も可能だと聞かされた教経が、彦島の松浦毅に命じて奇襲隊を葦屋浦に上陸させた。
遠賀川の戦で大連弩が陸戦でも威力を発揮した事を聞いた松浦毅は、宋船に備えた連弩を外して兵に持たせた。
二百の連弩を持つ兵と七百以上の弓兵が一斉に範頼勢の後方から矢を射た。
「後方に敵だ」
「豊後勢の裏切りだ」
「平家の奇襲だ」

範頼の勢の中から様々な声が上がった。
矢に射られ騎馬より落馬する者、反撃しようと馬を返す者などで、範頼の勢は混乱した。
先頭を駆けた総大将の源範頼も後方の異変に気付いて馬を止め後ろを振り返った。そこへ、平家の誰が射たか分からないが、連弩の矢が範頼の白糸縅の兜の鉢を射抜いた。
「ウォー」
範頼は顔面を血で染め、青鹿毛の馬から落馬した。
「範頼様が討ち死にした」
「総大将が討ち死にだ」
「範頼死す」の声が源氏の勢の中にあっという間に広がり、北条、三浦、和田、畠山、周防の宇佐木の勢はずるずると後退を始めた。
「戻せ、戻せ、平家を叩き潰すのだ」
「負けてはおらぬ、戻すのだ」
畠山重忠や三浦義澄らはしきりに源氏の武者や兵に声を掛けるが、浮き足だった兵は弓矢を捨て逃げ出した。
悲惨だったのは、上流を迂回し平家の陣の側面を衝こうと渡河した小山朝光、仁田忠常、比企能員の三千の勢だった。
北条、三浦、和田、畠山、周防の宇佐木ら中央の陣が崩れに、連鎖的に反応し左翼（遠賀川の上流方向）に位置した肥後の菊池、足利、千葉の勢も後退し、対岸に取り残された。
仁田忠常は討死を覚悟し、平家の総大将平知盛に一矢報いんと、大太刀を振るって平家勢の中に馬を乗入れた。
だが、侍大将の伊藤景清に阻まれ、平家の騎馬武者に取り囲まれ討ち取られた。
小山朝光、比企能員の二人も対岸に戻ろうと遠賀川を渡河の最中に、国栄の指揮する大連弩の太い矢を受け、遠賀川にその屍を流した。
葦屋浦を逃出した源氏の勢は十人、二十人の小勢に分かれ、門司関の方面へ向かった。
その後を平教経が率いる四千の平家の騎馬武者が追撃に掛かった。

「九州の地より源氏を追い払え」
「源氏の勢に赤間が関の地を踏ませるな」
教経に率いられた平家の騎馬武者は源氏の勢に追いつくと、その背を長刀で裂き、大太刀で兜首を討ち、矢を散々に射ち込んだ。

「伊予沖《いよおき》の海戦」　その１

「伊予沖（いよおき）の海戦」　その１

博多の筥崎宮に置かれた安徳天皇の行在所へ平知盛が戻ったのは四月一日のことだ。

前日、知盛よりの使いが兄の内大臣平宗盛の下へ葦屋浦（あしやうら）での勝利の知らせをもたらし、行在所の中は歓喜の声に包まれた。

平知盛は黒糸縅（くろいとおどし）の鎧を着け、青鹿毛（あおかげ）の馬に跨り、四千の騎馬武者の先頭で凱旋した。

知盛に続く騎馬武者の黒糸縅、赤糸縅（あかいとおどし）、黄糸縅（きいとおどし）など色取り取りの鎧兜には生々しい戦いの跡が残っていた。

鎧は所々で糸が解け、大袖が千切れ、兜の前立てが曲がっている者もいた。手足や額に巻かれた布は血が滲んでいたが、皆、胸を張って堂々と馬脚を進めた。

騎馬武者の直ぐ後には、馬に曳かれた百台の大連弩が続き、最後に疲れきった足取りの六千の徒歩が続いた。

四日前、騎馬武者五千、徒歩兵八千で意気揚々と筥崎宮の大鳥居前を出陣した平家の武者のうち三千ほどが死傷していた。

主な平家の将で死傷したのは平盛嗣、山鹿一族の美気敦種、松浦党の佐志調などだ。

一方、源氏方の主な将で死傷したのは山陽道軍の総大将源範頼を始めとして、三浦義澄、仁田忠常、小山朝光、比企能員などだった。

門司関から葦屋浦へ向かった二万の源氏勢の中で豊後勢は離脱し、残った一万五千の将兵のうち長門や周防へ逃げ戻れたのは僅かに五千ほどで、残りの者の生死は不明であった。

坂東から遠征した主な将、北条義時、足利義兼、千葉常胤、和田義盛、畠山重忠らは脇之浦（わきのうら）（北九州市）、岩屋（いわや）（北九州市）、波津の浦（なつのうら）（福岡県岡垣町）などの湊から漁船などに身を隠し、長門や周防

の浜へようように辿り着いた。
その中、肥後の菊地隆直や周防の宇佐木遠隆（うつきとしたか）らは豊後の緒方惟栄を頼って落ちていった。

「知盛、よくやったぞ。これで博多が源氏の勢に脅かされる事はなくなったな」
筥崎宮の行在所の留守を預かった平宗盛は、弟の知盛の顔を見て安堵の声を出した。
「兄上、これを機に九州の地より源氏に与力する者を一掃し、後背の憂いを無くし、平家の地盤を確固たるものにせねば」
「そなたがこの戦に向かう前に話しておった事だな。既に、時忠卿や経盛殿、教盛殿とも話を行い、母上にも博多の地を仮の都とする朝廷を開く事に賛同を得た。京より付き従った官吏や女官、大宰府に使えた者を召し出し、役官（やくかん）を整える。中務（なかつかさ）、民部（みんぶ）、兵部（ひょうぶ）、刑部（ぎょうぶ）位を整える」
「官の事は兄上にお任せしますが、九州各地の将を博多に召集する為の詔を出して下され。貞能や山鹿秀遠などより九州や四国、長門、周防などの地の諸将の様子を聞いたが、源氏に与力する者や源氏、平家のどちらへ付くか迷っている者も多いようだ。この度の召集に応じて博多へ出頭した者は、これまでの経緯を全て水に流し、新たな朝廷の臣として迎える事で、兵を損じずに平家の与力を増やしたい」
「むー、戦をせずに見方を増やすか」
「は、今は何処も田植えの時期、戦をするところではない。ここで無理に軍勢を集めて、戦を催そうとも、兵や兵糧は集まらず、諸将や民の恨みを集めるだけになります」
「だが、集まらぬ諸将が多ければ、朝廷の権威が・・・・・・・・」
「壇ノ浦、葦屋浦と我が平家は源氏を討破っております。この詔を受け、集まらぬ者は朝敵として討つとはっきり伝えます」
「どのような者らを集めるつもりなのだ。知盛」

「豊後から宇佐八幡宮の大宮司宇佐公通と板井種遠、この度の合戦で源氏方から陣を引いた緒方惟栄、臼杵惟隆。肥前から松浦党の外に神埼重光。肥後からこの度の合戦で源氏に与力した菊地隆直、木原盛実、南郷惟安らと川尻康高や相良延由、阿蘇一族の者。日向から宮崎一族。薩摩、大隈からは惟宗忠信。四国からは阿波の田口重能、周防の宇津木や船所、長門の紀などの者らです」

五月の陽光が筥崎宮の広大な境内にある木々の葉の色を鮮やかな緑に染めていた。

今日はその広大な境内も各地より集まった諸将及びその郎党、行在所の警護に当たる平家の将兵で満ち溢れた。

三月末の葦屋浦の合戦における平家の勝利とそれに続いて内大臣平宗盛の名で出された宣旨は、九州や四国でこれまで源氏に与力していた将や、日和見を決め込んでいた将に大きな衝撃を与えた。

九州に上陸した源氏の山陽道軍は総大将の源範頼が討取られる大敗を喫して、九州より撤退した事で、源氏に与力していた九州や長門、周防の諸将は、平家の軍勢に何時囲まれるかと絶望的になっていた。

だが、内大臣平宗盛の宣旨によれば、博多の筥崎宮に行在所を置いた安徳天皇が五月十日に博多を仮の都とし政を開始する。五月十日の儀式に参列する者は今までの経緯を問わず、新たに朝臣として取立てるが、参列しない者は朝敵と看做して討つと記されていた。

特に、葦屋浦の合戦で最後まで源氏に味方して、平家と戦った肥後の菊地隆直、木原盛実、南郷惟安らは、何時平家の勢が攻込んでくるかと菊池一族の本拠地である肥後の菊池谷（熊本県菊池市）の館に兵を集め、堀を深くし、楯、逆茂木を並べ、矢数を集め、防備を固くしていた。

最初、この宣旨を見た菊池隆直は、博多に呼寄せ謀殺する罠ではないかと疑った。

だが、内大臣平宗盛の使いとして菊池谷を訪れた伊藤景経が菊池隆直に対し説いた。

「今、平家が声を掛ければ九州各地の諸将はその兵を率いて、菊池谷のこの館を包囲する。わざわざ、博多に呼出し、謀殺するなど九州の諸将の信を失うような手段を平家が取る必要はないのです。博多に集まった方にはこれまでの経緯を取りませんぞ」
それでも伊藤景経の言葉を信じられぬ菊池隆直に対し、「隆直殿がこの地へ戻るまで、それがしがこの館に留まる」と景経は告げた。
菊池隆直も遂には景経の説得に応じて博多へ向かう事を承知し、同腹の木原盛実、南郷惟安を誘い、郎党五十騎を引連れ四月末に博多へ向かった。

朱塗りの柱に白壁、鉄色に輝く瓦、筥崎宮の神殿では主神である応神天皇のご神体を背にした御簾の奥で、まだ五歳と幼い安徳天皇が祖母の二位の尼とともに座した。
一段低くなった場所には、衣冠束帯に身を包んだ内大臣平宗盛を中心にして、その左右に大納言平時忠、中納言平教盛、参議平経盛、中納言平知盛、左近衛中将平資盛、左近衛少将平有盛らが横に並んだ。
能登守平教経、従五位下平盛国、左衛門尉平盛澄、松浦党の松浦正、松浦直、波多保、山鹿秀遠、山鹿時貞、麻生家村、原田種正などが左側に並び、右側には豊後の宇佐公通、板井種遠、緒方惟栄、臼杵惟隆、肥前の神埼重光、肥後の菊地隆直、木原盛実、南郷惟安、川尻康高、相良延由、阿蘇忠宗、日向の宮崎惟行、薩摩の惟宗忠信に加え周防の宇佐木高遠、船所正利、長門の紀光則、岩国金秀、阿波の田口重能が並んだ。
宗盛は自らの名で宣旨を送った九州の諸将や周防の宇佐木や船所までもが集まり、宗盛の機嫌も良かった。
小太りの体を揺すりながら、宗盛は御簾の奥の安徳天皇に礼を送り、参列者の方を見た。
本来の朝廷であれば五位以上の者でなければ昇殿は許されない。
召集された諸将がそのような位を持つはずもなく、緊張で体を硬く

して深く礼をしたまま固まっていた。
「よくぞ、召しに応じ集まってくれた」
宗盛のやや甲高い声が神殿の中に響いた。
「この御簾の奥には応神天皇のご神体に見守られた安徳天皇が三種の神器とともに御座されておる。京で後白河院が天皇と称する者を立てておるが、その者は三種の神器を持たぬ騙り者である。ここに集まった者の中にはその偽の綸旨に踊らされ、平家を見限り謀反を起こした者もおった。だが、安徳天皇はこの西都博多の朝議に参列した者は全て許すとの広い御心を示された。皆の者は今後とも、安徳帝に忠誠を尽くすように・・・・・・」
宗盛の話し終わると、御簾の奥からは安徳天皇が退席する気配が伝わった。
そこへ、蔵人頭（くらんどがしら）の橘直正（たちばなのなおまさ）が三方に積んだ任官状を持って現れ、諸将の一人、一人の名を読み上げ、任官状を手渡した。

昼を過ぎた頃、筥崎宮の近い唐人街の唐商人謝邦明の屋敷に平宗盛、知盛、資盛、有盛、貞能、教経、伊藤景経、景清ら平家一門と主な侍大将、各地より今日の朝議に出席した諸将が再び集まった。
謝邦明の屋敷の広間は五十畳はある板張りの広間だ。その中央に九州、四国、山陽道筋、山陰道筋から摂津、若狭、京までを記した四畳はある大絵図が広げられていた。
集まった者は宗盛を中心にして大絵図を取り囲むように座った。
「まずは知盛殿からの話を聞いてくれ。その後、別室には唐人街の妓楼より妓を呼んであるので十分に楽しんでくれ」
平貞能が集まった諸将に告げたが、諸将の目は前に広げられた大絵図に集中していた。
「話とは戦の事か・・・・・」
筑後の山鹿秀遠が集まった皆の疑問を代表するような形で訊ねた。
「本日、この博多を都とする初の朝議を開いた。だが、この博多はあくまでも福原、京を回復までの仮の都である事を承知しておいほ

しい。二年前にこの貞能がそなたらと共に軍勢を率いて、京の回復に向かったが、その時は拙速に過ぎて失敗した。この度は九州、瀬戸内の海を固め、次に四国、山陽道、山陰道筋を固め、それから福原、京を目指したい。瀬戸内の海を固める為には、まず、この者を討つ」

知盛は手に持った扇の先で四国の伊予を指した。

「伊予の河野通信にも本日朝議を行う事は知らせたが、遂に博多へは来なかった。伊予の河野を討てば、瀬戸内の水軍で源氏に与力するは攝津渡辺党、熊野水軍だけになる」

「知盛殿。伊予の河野は壇ノ浦の戦で兵や水手、船頭、船の多くを失い、河野を討つだけならば、我が田口の勢だけでも十分出来ますぞ」

「田口殿、それは十分に承知しておる。この河野攻めは平家の水軍が集まり、戦を行う際の調練を兼ねていると思って欲しい」

「調練とは。我ら阿波水軍だけでなく、各水軍とも十分に戦働きはしてきたが」

「それは、夫々の水軍が単独で動く場合のこと。今までなら、いくつもの水軍が合同しても、各水軍が独自の合図で動いていた。だが、これからは平家の水軍として動く場合には、同じ前進、後退の合図で進退が行えるようにしたい」

「すると、伊予の河野攻めをおこなうのは・・・」

「調練が終り次第行う。各水軍の半数を彦島へ遣して下され。集まり次第、調練を始める。この合同水軍の指揮は教経に任せる」

「水軍を持たぬ我らは、いかにすれば・・・・・・」

薩摩の惟宗忠信が知盛の方を見た。

「何れ、出陣をお願いする。その時期が来るまで国許で兵を養い下され。出陣はこの秋だ。時期が決まれば使いの者を送ります」

「伊予沖《いよおき》の海戦」　その２

「伊予沖（いよおき）の海戦」　その２

五月二十日過ぎ、早鞆の瀬戸の彦島（下関市）に続々と各地の水軍より戦船が集まった。

元々、彦島には早鞆（はやとも）の瀬戸（せと）の警備で平有盛が大船十艘、戦船五十艘に下松浦党松浦毅の宋船五艘を加えて駐屯していた。

そこに最初に現れたのは教経が率いる平家水軍の大船三十艘と宋船十五艘だ。

教経が率いた大船は博多の湊に停泊中に、宋船に倣い一艘当り二十基の連弩を舷側に備えた。教経は彦島に着くと、駐屯していた十艘の大船にも舷側に連弩の装備を命じた。

有盛に大船を福浦の入江に集めさせると、教経が宋船の船蔵に積み込んできた連弩を運び出して大船に取付けた。

続いて彦島に来たのは上松浦党の松浦正が率いる松浦水軍の戦船五十艘だ。

その後、山鹿水軍は山鹿時貞が戦船百艘を、豊後水軍は臼杵雅幸が戦船五十艘を、周防水軍は船所正利が戦船五十艘を、阿波水軍は田口重直が戦船百艘を率いて彦島に来た。

勢揃いした平家水軍の総数は宋船二十艘、大船四十艘、戦船四百艘の大船団。兵、水手、船頭を合せると二万を超えた。

教経はこの船団の武器である連弩をいかにすれば最大限に生かせるか考えた。

宋船と大船に備えた連弩を生かすには、これらの船を並べて相手の矢の届かぬ所から連弩の一斉攻撃を浴びせ、相手の行き足を止める。

この行き足の止まった船団に戦船を突入させ、相手の船に横付けして兵を乗り込ませ、叩くのが有効な戦法だ。

しかし、逆に宋船や大船は、舷側近くまで相手の戦船に潜り込まれ

ると何の対応も出来ない。そこで、教経は戦船を宋船と大船を守る船団と相手に斬り込む船団の二つに分けた。
宋船、大船を守るのは百五十艘の戦船、一方、相手の船団の中に突入するのは二百五十艘の戦船だ。
無論、相手の船団に乗り込む方が手柄を立てられるので、誰もが相手の船団に斬り込む方を望む。教経は不満をなくす為に攻撃船と防御船の交替制を取った。

教経は五月二十五日から調練を始めた。
先陣に平家水軍と豊後水軍の戦船各五十艘、中軍には大船四十艘、宋船二十艘が位置し、後陣を松浦水軍の戦船五十艘が固めた船団が彦島（下関市）を出航し、早鞆の瀬戸に姿を現すと、壇ノ浦に向かった。
大船と宋船は二本の帆柱に揚げた大帆に風を受け、櫂には水手が取付いて漕いだ。
一艘、船団から離れて後方に付けた宋船があったが、その船上には平家の総大将平知盛と資盛、有盛、貞能などの姿があった。その中には謝国栄の姿も見えた。
宋船、大船の舷側に並んだ連弩には射手と給手が取付き、いつでも模擬矢が放てる体勢を取った。
矢倉の上に据えた大連弩は威力が強すぎ、模擬矢でも当たれば死人が出るし、船も沈没するので、この調練では使用しない。
一方、早朝に彦島を出航した山鹿水軍、阿波水軍、周防水軍の計二百五十艘の戦船は艫の帆に風を受け、櫂を忙しく動かし、壇ノ浦の奥津（下関市）の沖合いにある千珠島、万珠島のところで旋回し、壇ノ浦の合戦の源氏の水軍のように進んだ。
この戦船も、舷側に引廻した楯の後に弓兵を置き、攻撃の仕度は整っていた。
山鹿水軍と阿波水軍の戦船が二本の棒になって迫ってきた。周防水軍は阿波水軍の後方に位置した。

両船団の距離が二町半（２５０ｍ）ほどになった時、大船と宋船より連弩が矢を射始めた。
一度の射られた矢は千を越え、「ザ、ザ、ザー」と音を発てて山鹿水軍、阿波水軍の船に降り注いだ。
まだ、山鹿水軍と阿波水軍の戦船は自分達の矢頃に教経の船団を捉えられない。
水手や兵は軽く丈夫な革製の兜、胴当て、小手、脛当てを着けていたが、矢が当たると「ギャ」「痛い」と悲鳴を挙げた。
矢を受けて櫂の漕ぎ手の力は弱まり、山鹿、阿波水軍の船足は一旦衰えた。
だが、三十艘ほどの戦船が阿波水軍の中から抜出した。船足を速め二町（２００ｍ）の距離を詰めると、教経が率いる宋船や大船の間近へ取付いた。
戦船の船上に立つ阿波水軍の田口重直が見ると、宋船と較べ大船の方が舵の効きが鈍い。
しかも、大船に十二、三間（２２，３ｍ）の処まで近づくと、連弩の死角に入り、連弩の矢はほとんど飛んでこない。
「手鉤を掛け、船を寄せろ。縄を掛けよじ登れ」
田口重直は抜いた太刀を振りかざして兵を励まし、自らも鉤縄を伝い大船の舷側をよじ登った。
そこへ、五艘ほどの平家水軍の戦船が矢を射掛けて迫り、阿波水軍の戦船に舷側を並べ掛けると、十人ほどの短薙刀を持った平家水軍の兵が飛び移った。
しかし、この場では阿波水軍の戦船の方が三十艘と数が多く、逆に五艘の平家水軍の戦船が包囲された。

教経が乗った宋船から調練の終了を告げる太鼓の音が壇ノ浦に響くと、戦船は船足を止めて、喚声も静まった。
まだ、その辺りの海面では小早が走り回り、海中に落ちた兵や水手、舵取りなどの救助を行っていた。

各水軍の主だった将が教経の乗る宋船に戦船を漕ぎ寄せた。舷側より垂らされた縄梯子を上り、松浦党の松浦正、松浦毅、阿波水軍の田口重直、山鹿水軍の山鹿時貞、豊後水軍の臼杵雅幸、周防水軍の船所正利らが宋船に集まった。
まだ、全員が今の調練の興奮を引き摺っていた。
特に、今回初めて連弩の威力を知った阿波水軍の田口重直は、宋船に上がると教経の所へ行くよりも前に舷側の連弩の処へ向かい、実際に連弩に触り、矢の置いてみた。
さらに、矢倉の上に据えた大連弩の処へも行きたそうだったが、教経の周囲に各将が集まったので、教経の処へ向かった。
教経は唯一連弩の攻撃を掻い潜り、大船へ乗船攻撃を行った阿波水軍に注目した。
「田口殿、今の調練はどうであった」
「連弩の威力は聞いていましたが、実際に受けてみると驚くほどでした。阿波水軍の戦船の中でも二段甲板以外の船は早々に水手や舵取りまでが連弩の攻撃で壊滅的な打撃を受けました。ですが、二段甲板の船は連弩の矢を上甲板と楯で防ぐ事で大船に接近できました。十二、三間（２２，３ｍ）まで近づけば、連弩からの矢は戦船の上を抜けてしまいます。今も、連弩の台を見てきましたが、あの台では下方への攻撃は無理ですな」
「二段甲板の船か。一段目に水手や舵取りが据わり、二段目に楯を置いて弓兵などが並ぶようになったやつだな」
「今回は連弩の攻撃を避ける為、二段目には誰も乗せず、一段目に詰込みました」
「田口殿、二段甲板の船は先日の壇ノ浦の戦では源氏の水軍には無かった船。大連弩の矢で射るとどうなるか試してみたい」
謝国栄が田口重直に頼んだ。
教経や知盛も興味を示したので、田口は二段甲板の船を宋船より二町（２００ｍ）離れた所へ動かした。
通常の矢の数倍はある太い矢が大連弩の柄の上に置かれた。引手が

力を入れ、固い弦に長い棒状の物を引っ掛けて引くと、太い矢が弦に装着された。
射手が大連弩を廻し、二段甲板の戦船に照準を合わせて矢を放った。
「ブーン」矢音も高く大連弩から矢が射られた。続いて引手が再び弦を引くと太い矢が置かれ、射手が矢を放った。
二本とも戦船の二段の甲板を打ち貫いて、船底に二箇所穴を開け、見る間に二段甲板の戦船は沈みだした。
「流石、大連弩の矢だ。あの戦船を僅か二射で沈めてしまった」
田口重直が感嘆した声で言った。
田口重直が指摘した大船や宋船の近間へ入った相手の戦船への対応として、国栄は舷側に傾斜台を取付けた。その台に連弩を据えれば、四間（７ｍ）位までの戦船なら連弩で攻撃する事が出来るようになった。それよりも接近された時は通常の弓矢、長刀、大太刀で迎え撃つ事になる。
調練はその後も三日に亘り続けられた。
太鼓や旗を使った進退の合図も戸惑う事なく、大船団がほぼ一体となって動けるようになった。
六月二日、梅雨が降りしきる中、平教経率いる総勢四百六十艘の平家の大船団は長門の彦島（下関市）を出航した。
行き先は河野水軍の本拠地、伊予の三津浜（みつはま）（愛媛県松山市）だ。瀬戸内海を平家水軍の海とする為、唯一残る敵である河野水軍を討つ。
三日は梅雨の合間の晴れとなった。昇る朝日に合わせ、周防の三田尻湊（みたじりみなと）（山口県防府市）を出航した大船団は伊予の三津浜へ向かった。
摂津の渡辺津（わたなべつ）は渡辺党の本拠地で、九州、四国、山陽道方面からの米や塩、味噌などの物資を積んだ船が、ここで荷を川舟に積替え、淀川を利用して京へ運ぶ中継の湊で廻船問屋や川舟問屋、米や塩を扱う問屋などが集まっている。
そこで、この地には九州、四国、山陽道方面での出来事が二、三日すれば流れて来る。

渡辺津にある渡辺守嗣（わたなべもりつぐ）の屋敷には、壇ノ浦での合戦に敗れて周防の三田尻湊から戻った源氏の搦手軍の大将源義経が留まり、逃げ戻った源氏の将兵を集めていた。
だが、安田義定、梶原景時、土肥実平、熊谷直実、田代信綱、三浦義連ら坂東から遠征したて将は戦死、負傷した郎党、兵を補充しなければ戦も出来ぬと坂東へ戻った。
しかも、四月に入ると九州に上陸した源氏の山陽道軍が平家との合戦に敗れたという話が伝わってきた。しかも、総大将の源範頼が平家に討ち取られたという話も拡がった。
始めにこの話しを聞いた時、義経には信じられなかった。
壇ノ浦でが平家の繰り出した宋船に敗れたが、陸の戦では坂東の騎馬武者を揃えた源氏に利があると思っていた。
だが、北条義時、足利義兼、千葉常胤、和田義盛、畠山重忠ら坂東より遠征した将が僅か数十人の郎党を連れただけで摂津の渡辺津へ戻った事で、山陽道軍の敗北と範頼の討ち死を信じざるを得なかった。
「平家の将は誰だ。誰が指揮を執っていた。平家はどの様に攻めてきた。範頼殿はどの様に討たれたのだ」
義経は九州より逃げ戻った各将から葦屋浦での平家との合戦の模様を詳しく聞き出した。
その中で義経を驚かせたのは、壇ノ浦で源氏の戦船に壊滅的な打撃を与えた宋船の大連弩が、今度は馬に曳かせた台車に載せ、攻撃してきた聞かされた時だ。
「その大連弩は何基ほどあったのだ」
北条や畠山など答える将によりその数は異なったが、百基位はあったようだ。しかも、大連弩を乗せた台車は馬に曳かれているので、進退は苦労せずに出来るようだ。
大連弩の射程は通常の弓の倍以上、三町（３００ｍ）はあり、平家はその大連弩を先陣に置き源氏の騎馬武者の突進を防いだ。
この大連弩の攻撃を最初に遠賀川の渡河中に受けた三浦勢は、一度

に四百騎を失うような大きな損害をだしていた。
しかも、範頼の討死も後方より連弩を持った徒歩に襲われ、連弩の矢を受けて討死したと聞かされた義経は、「徒歩の者も連弩を使ったのか」と言ったまま押し黙った。
壇ノ浦の合戦の時は今まで通り、内大臣平宗盛が総大将を務めていた。たが、途中から宋船を率いた平中納言知盛に指揮が変わったと聞こえてきた。
葦屋浦の合戦での平家の総大将は平中納言知盛だと言われた。知盛が総大将となってから、平家の戦の仕方が明らかに変わった。
馬に曳かせた台車に大連弩を載せ陸戦で使うなど、義経でも考えつかない。
義経の中で知盛への対抗心が大きく膨らんできた。

「伊予沖《いよおき》の海戦」　その３

「伊予沖の海戦」　その３

河野水軍の将、河野通信は四月の中旬に自ら摂津の渡辺津にある渡辺守嗣の屋敷を訪れていた。河野は内大臣平宗盛の名で五月十日に西都博多において開かれる朝議への召集の宣旨を持参していた。河野通信は義経にその宣旨を渡し、河野一族は博多へ向う積りのない事を明言し、平家が攻寄せてきた時の援勢を要請した。

「宣旨には召集に応じぬ者に追討の勢を送ると書かれております。河野の家は壇ノ浦の合戦で多くの兵、水手、舵取り、船を失いました。残る老兵をかき集めても百艘の船を揃えるのが精々。何卒、渡辺党の援勢をお願いしたい」

渡辺水軍も壇ノ浦で兵や船を損じ、再建に取り掛かったばかりであった。

だが、義経は熊野の湛増殿とも話し、出来るだけの援勢をお送りすると河野通信に請合った。ここで、義経が伊予の河野を見放せば山陰道や山陽道、畿内で源氏に従う将が源氏を見放す事は間違いない。義経は平家水軍の出陣の兆候を探る為、三田尻湊から千珠島、万珠島周辺に、河野水軍、渡辺水軍より見張り船を出し、彦島（下関市）の平家水軍を見張らせた。

その間、渡辺津の造船場では義経が渡辺守嗣に命じて、舷側に宋船より放たれる大連弩の矢を防ぐ一寸（３ｃｍ）厚の板を張巡らした戦船を作っていた。

五艘が出来上がった五月末、万珠島周辺に進出していた見張り船から、平家水軍の宋船、大船、戦船など五百艘近くが集まり、盛んに調練を行っているとの知らせが渡辺津の義経の下へもたらされた。

義経は平家の調練は明らかに水軍が出陣する兆候だと判断し、渡辺守嗣とともに新たに作った五艘の戦船を含む五十艘の戦船に千の水

手と兵で伊予の三津浜（松山市）へ向った。
河野通信の屋敷は湯浅（松山市）にあり、高さ四尺（１．２ｍ）の土塁と堀を巡らした屋敷で通信と会った。
「河野殿、平家の水軍がいよいよ、五百艘もの大船団でこちらに向かって来ようとしている」
「宋船や大船も含まれていると聞いております。その後、第一団は大船四十艘に阿波、山鹿水軍の二百の戦船、第二団は宋船二十艘に周防、豊後、松浦水軍の二百の戦船だと知らせてきました。我ら河野水軍は百二十艘の戦船で三津浜の沖にある釣島（つりしま）に入り、三津浜へ向う平家の水軍を側撃します。渡辺党の皆様は釣島と小瀬戸を挟んだ戸ノ浦（とのうら）に潜み、横撃して下され」
釣島は三津浜より凡そ六十町（６ｋｍ）の海上にあり、三津浜に攻寄せる船は必ずこの島の脇を通る。
河野一族は三津浜防御の拠点として釣島に船隠しの湊を設けていた。通信はそこに現在の河野一族の全兵力を隠し、一気に勝負を掛けようとした。
戸ノ浦は釣島と幅五町（５００ｍ）の小瀬戸を挟んだ興居島（こういじま）にある同じ河野一族の船隠しの浦だ。

六月三日の早朝、梅雨の合間の久しぶりの晴天だ。
瀬戸の海には緩やかな風が吹き、波も穏やかだ。平家の船団の先陣を行くのは紺地に白の三本線の旗印を風になびかせた阿波水軍の戦船だ。
阿波水軍を率いる田口重直が乗るのは片舷十丁櫓、長さ十二間（２１．６ｍ）で幅は二間半（４．５ｍ）の二段甲板の戦船だ。
二段甲板の上段に幅一間（１．８ｍ）の大連弩を据え、先陣の中段に位置した。前方の釣島が大きく見えて来た時、田口は太鼓を打ち鳴らした。
先頭を行く四十艘の戦船が櫂を漕ぐ早さを上げた。後続する大船、阿波水軍の戦船との間が大きく開いた。

先頭を切る四十艘の戦船が釣島の脇を通り過ぎた時、釣島の山頂から一条の烽火(のろし)が上がり、阿波水軍の戦船の横を衝くように釣島の隠し浦より河野水軍の戦船が出現した。
櫂を漕ぎ急接近する河野水軍の戦船が一斉に矢を放った。阿波水軍には数を頼りにする油断があり、河野水軍の攻撃への対応が遅れた。
「ギャ」「ウァ」
矢を受け、舷側に崩れ落ちる水手や兵の悲鳴が響いた。
「カッツ、カッツ」
楯を撃つ矢の音が響いた。
「楯を上げ、矢を防げ」
「矢で応戦しろ」
矢の音に負けじと大声で叫ぶ戦船の小頭の声が響いた。
「この船団を包囲し、殲滅しろ」
河野通信は阿波水軍の先陣を進む四十艘の戦船を河野水軍の百二十艘の戦船で包囲した。
矢を射込み、熊手で相手の船を引寄せ、乗り移り船上での戦が始まった。
「矢張り、河野の奴らはこの島に船隠しを設けていたな」
後続の戦船で田口重直が呟き、再び太鼓を打ち鳴らした。先頭を行く四十艘の戦船と五町（５００ｍ）も離れていた距離が見る間に近づいた。
その距離が二町（２００ｍ）ほどになった時、田口が乗った二段甲板の戦船の大連弩が最初の矢を放った。
それを合図に後続の大船からも連弩の矢が一斉に河野水軍の戦船目掛けて放たれた。

釣島の山頂から上った一条の烽火を見て、興居島の戸の浦に潜んだ渡辺水軍も五十艘の戦船を揃えて小瀬戸へ漕ぎ出した。
河野水軍の戦船は阿波水軍の先頭を行く戦船を包囲しているが、渡辺守嗣と義経の目は後続する阿波水軍の船に向けられていた。

「我らは後ろの船団に向かおうぞ」
義経が命じると、渡辺守嗣が戦船の向きを変えた。渡辺水軍の先頭を進むのは連弩の矢を防ぐ様に一寸（３ｃｍ）の分厚い板で舷側を覆った五艘の戦船だ。
渡辺水軍の戦船が後続する阿波水軍の戦船に取付く前に、「ザ、ザ、ザー」と異様な音を発して平家の船団より射られ数百本の連弩の矢が河野水軍の戦船に向かった。
「ア、ア」
悲鳴ともつかぬ声が渡辺水軍の戦船に乗る兵、水手の間から上がった。
壇ノ浦で源氏の兵や水手が見た光景が伊予沖に再現された。後続する阿波水軍の戦船が近づき、連弩から放たれる矢は河野水軍の戦船の舷側に立てた楯を撃ち砕き、兵や水手を貫き、大連弩から射られた太い矢は舷側や船底に大きな穴を穿った。
兵、水手は血を流して船底へ倒れ込んで呻き声を上げ、船は海中に沈んだ。
連弩の矢が一射に止まらず、二射、三射と続くと、河野水軍の戦船で満足な形を保った船は一艘も無かった。
包囲した阿波水軍の戦船から熊手が伸ばされ、引寄せられた河野水軍の戦船に阿波水軍の兵が続々と乗移り占拠した。
最後に残った十艘ほどの河野水軍の戦船では生き残った兵が弓の弦を外し降伏した。
「平家方は大船や戦船にも連弩を据えたのか」
義経は愕然とした声を上げた。
「この場は引揚げましょうぞ」
渡辺守嗣が慌てた声で義経に告げた。
河野水軍の戦船に壊滅的な打撃を与えた平家の船団は、船首を渡辺水軍の方へ巡らした。
この後方にまだ宋船が率いる二百艘もの船団がいることを考えると、平家水軍の破壊力は壇ノ浦の時よりも格段に増大している事に義経

も気付いた。
渡辺水軍の戦船は船首を東に巡らして逃走を図った。
「今、あれらの船と戦っても、我らには勝ち目はないな。引上げよう」
義経も圧倒的な平家水軍の破壊力に呆れたような声で応じた。
「あれらの船は構わぬか」
後方で一戦もせず、宋船の屋形の前で戦の様子を見守っていた平教経に平有盛が聞いた。
「最初に言った通り、この戦は壇ノ浦での調練の総仕上げだ。無理な追撃は必要ない」
伊予の後始末を田口重直に任せると、教経は残りの船団に彦島への引揚げを命じた。

「征東軍《せいとうぐん》出陣」　その１

「征東軍出陣」　その１

寿永四年（１１８５年）。

京にある後鳥羽天皇の朝廷は改元して「文治」を称したが、西都博多の安徳天皇の下では引続き「寿永」の年号を用いた。

五月末の伊予沖の合戦以降、平家と源氏の間に大きな合戦は起こらず、静かな時が過ぎていった。だが、静けさの裏では次に向けて平家、源氏、京の朝廷が夫々動き始めた。

西都博多の筥崎宮では六月に内大臣平宗盛が弟の中納言平知盛を征東府の都督に任じた。

征東府は西海道、山陽道、山陰道、四国にまたがる地域の武士を束ねて指揮し、京の回復を目指す。その長である征東都督の知盛に対し安徳天皇より節刀が下された。

これが秋に行われると博多の街で噂されている大きな戦の前触れの一つだった。

その他にも西都博多、京、鎌倉の夫々において様々な動きがあった。

　壇ノ浦、葦屋浦の合戦で源氏が敗退し、五月には京の都周辺より源氏の兵の姿が見えなくなった。そして、今にも平家が九州の勢を率いて攻め上って来るという噂が京の町へ広がった。

源氏は頼朝の代官として義経が摂津の渡辺津にあったが、その下に集まった勢は摂津源氏の渡辺党が二千、近江源氏の佐々木定綱、高綱兄弟の二千、その他の勢を合せても五千に満たなかった。

坂東の将は戻ったままで、京へ上がる気配もない。

平家侵攻の噂で不穏な空気が広がった京の都では、後白河法皇がこの状況を払拭しようと、五月の中旬に鎌倉の源頼朝の下へ側近の従三位大蔵卿高階泰経を遣わし、早急に平家追討の勢を京へ送るようにとの院宣をもたらした。

だが、頼朝は自分の代官として義経を畿内へ遣わしてあるので、義経に命じて畿内で新たな兵を徴募させると返事をするに留まった。壇ノ浦、葦屋浦で戦い、坂東へ戻った安田義定、梶原景時、土肥実平、熊谷直実、田代信綱、三浦義連、北条義時、畠山忠重、足利義兼らの諸将は平家との戦で大きく兵を損じたが、鎌倉の頼朝にはそれらの諸将に報いる荘や知行国も無く、再度の平家追討の兵を坂東や東海道筋より徴募するのは困難な状況にあった。

六月始めの伊予沖の合戦後、摂津の渡辺津にある義経から一方的な平家水軍の勝利の様子が知らされると、急遽、義経を鎌倉へ呼び戻した。

鎌倉大倉山の源氏重代の大倉館、館に設けた侍所に頼朝と侍所別当の和田義盛、北条時政、義時親子、政所別当大江広江が集まり、義経が伊予沖の合戦の模様を詳しく話した。

「平家は宋船の他に大船や戦船にも連弩を据えたか。陸戦でも平家は連弩を用いた。源氏もあの連弩を使えぬのか」

北条義時が義経に尋ねた。

「都で弓師に尋ねたところ、猟師などが使う弩と形は同じだが、まったく別物だといわれた。弩を一間（1．8m）までに大きくしたら弦を何で作り、弦をどうやって張り、引くかの見当がつかぬと言われた。伊予沖の合戦においても河野通信にはどうにかして、連弩を一基でも入手しろと命じたが無理であった。だが、葦屋浦では迂回した騎馬武者が大連弩の台車を襲い、数台を仕留めたと聞いたが」

「台車を馬で曳いても、騎馬の速さにはかなわぬ。接近するまでに随分と犠牲を出したが、数基の大連弩を破壊したところで、救援の勢に阻まれてしまった」

「見通しが効く海戦では無理だが、陸上での戦なら伏兵や迂回攻撃で上手く使うことで連弩を破る事が出来るな」

平家との戦での連弩への対策が義経の頭の中に浮かだ。

「博多では中納言の平知盛を征東都督に任じたという噂が伝わって

きた。平家が直ぐにも京へ攻寄せてくるならば、急ぎ坂東より兵を送らねばならぬぞ」
頼朝が最も気にしていたのが、平家の京へ侵攻時期だ。
「鎌倉へ戻る直前に、彦島（下関市）の平家水軍を見張る船よりは平家侵攻の兆候は見られぬという知らせを受けておりますぞ」
義経のその言葉に頼朝はいくぶんか安心したようだ。
「当分の間、坂東より援勢は出せぬが、京の警護はそなたに任せるぞ」

京の後白河法皇は六月に入ると、博多の平宗盛の下へも院宣を持たせた側近の従四位蔵人藤原光能を送り込んだ。
宗盛の下には平家が安徳天皇と三種の神器を伴って京を下野してより、数度に渡り後白河法皇は使いを送っていた。
従四位蔵人藤原光能一行の五人は渡辺津から博多へ向かう博多の商人山浦屋の持ち船である全長十二間（２２ｍ）の一本帆の荷船に乗り込んだ。
山浦屋の荷船は瀬戸内の海を播磨の室津（兵庫県たつの市）、備前の牛窓（岡山県瀬戸内市）、備後の鞆浦（広島県福山市）、安芸の下蒲刈（広島県呉市）、周防の上関（山口県上関町）、長門の赤間が関（山口県下関市）と泊まりを重ね七日目に早鞆の瀬戸へ入った。
平家水軍は早鞆の瀬戸の途中にある彦島において、この瀬戸を通り抜ける船の船改めを行っていた。
山浦屋の荷船も船改めで彦島の福浦の入江に入った。入江には前後に二本の帆柱を持つ大きな宋船や大船が二十艘以上も帆を休めていた。
その間を何十艘もの戦船が兵を乗せ、早鞆の瀬戸との間を忙しげに行き来していた。
山浦屋の荷船に水軍鎧に身を包んだ平家の兵十人が舷側に掛けた縄梯子を伝って軽々と乗船し、船改めを行った。
その最中に兵の長が藤原光能の一行に気付き、舵取りに一行の名を

尋ねた。
その兵は戦船に戻ると慌しく動き、次に山浦屋の荷船に現れた時は狩衣姿の左近衛中将平資盛を先導していた。
「この彦島を預かる平資盛だ。蔵人の藤原光能殿、西都博多へは何用で向う」
平家の兵に囲まれた光能は足の震えを押隠し、精一杯に威厳を作っていた。
「都におわす院より前内大臣平宗盛殿への使いである。無礼は許さぬ」
「宗盛様への使いか。ならばこれより我らの船でお送りいたす」
資盛は蔵人藤原光能の一行を山浦屋の船より宋船に移して博多へ向かった。
宋船の出航に先立ち、資盛は宗盛まで院の使いの到着を知らせる小早を送った。
資盛からの知らせを受けた宗盛は行在所を置いた筥崎宮の一室で、大納言時忠とともに光能の到着を待った。
「宗盛殿、院の使いはどうせ三種の神器を返せという事であろうが」
「それは分かっておりますが、会わずに帰す事もありますまい」
衣冠束帯に着替えた蔵人の藤原光能が内大臣宗盛と大納言時忠の二人の前に進み出た。
その光能に宗盛は告げた。
「都の院へ告げよ。三種の神器を持たぬ後鳥羽を退位させ、安徳帝が京へ戻るのを待てと。三種の神器は安徳帝と一緒に戻る。それまでは、この博多にあると。それと九州、山陰道、山陽道、四国にある院領、摂関家領等などの荘や御倉は全て接収し、国司も全て任命し直す。そなたも、この博多に仕えぬか」

その後、京の後白河院から博多にある平家への使いは途絶えたが、京と鎌倉の間では引続き使いの遣り取りが行われた。
後白河院は鎌倉の頼朝に改めて平家追討の院宣を出して、早急に博

多の平家を攻め、三種の神器を取戻すことを命じた。
だが、壇ノ浦、葦屋浦の合戦で痛手を受けた坂東の諸将に何らかの恩賞を与える必要に迫られた頼朝は、後白河院に対して東海道、東山道の惣官（そうかん）に任じる事を求めた。
惣官となれば東海道、東山道の全域に対し兵、兵糧の徴募など戦の遂行に必要な全ての権限を一手に掌握し、戦の論功恩賞も自らの手で行える。
未だ不安定な鎌倉の体制の下で、恩賞に不満を抱く坂東の御家人を新たな戦に動員する為に、頼朝は権威付けと働きに報いる恩賞を与えられる事を示す事が必要だった。
頼朝からは惣官に任じられぬのであれば、摂津に留まる頼朝の代官の義経とその軍勢を鎌倉へ引上げるとの強硬な申入れが後白河院になされた。
頼朝の強硬さ、執拗さに根負けした後白河院は遂に頼朝の要求を受入れ、七月末には頼朝を東海道、東山道の惣官に任じた。
頼朝も平家追討の院宣を坂東を始めとする東海道、東山道の御家人衆に廻し、秋には追討軍を発すると命じた。

西都博多の筥崎宮で行われた六月二十日の朝議には、再び九州各地及び四国、長門、周防の諸将が集まった。
朝議終了後に征東都督の平知盛はこれらの諸将を唐人街の謝邦明の屋敷の広間に集めた。
板張りの広間の中央には九州、四国、山陽道筋、山陰道筋から摂津、若狭、京を記した四畳はある大絵図が広げられた。
平家からは知盛の外に平資盛、有盛、宗盛の息子の清宗（きよむね）、平教経、侍大将の平貞能、平盛国、盛澄、伊藤景経、景清が集まり、肥前松浦党の松浦正、松浦直、波多保に神埼重光、筑後は山鹿秀遠、山鹿時貞、麻生家村、原田種正、豊後では宇佐公通、板井種遠、緒方惟栄、臼杵惟隆、肥後は菊地隆直、木原盛実、南郷惟安、川尻康高、相良延由、阿蘇忠宗、日向は宮崎惟行、薩摩、大隈からは惟宗忠信、

周防からは宇佐木高遠、船所正利、長門では紀光則（きのみつのり）、岩国金秀（いわくにかねひで）、阿波は田口重能、土佐の滝口俊遠（たきぐちとしとう）、讃岐の香川光高（かがわみつたか）が加わった。土佐の滝口、讃岐の香川らは今回が初の朝議であった。

征東都督の知盛は集まった諸将の顔を見ながら告げた。

「この秋には山陰道、山陽道、瀬戸内の三道に分かれ京へ向け出陣する。水軍は彦島（下関市）、周防、長門の兵は赤間が関（下関市）、九州各地の兵は門司関（北九州市）へ十月始めに集まる。具体的な日取りは追って知らせるが、各自出陣の仕度を頼む」

知盛のその言葉を聞いて、集まった諸将の顔に緊張が走った。

「まだ、諸将の腹の内がよくわからぬので、気を使い疲れるぞ」

広間で九州、四国、長門、周防の各将に戦の事を告げた知盛が、国栄の部屋でほっとした顔を浮かべた。

「水軍の方は調練も出来て、連弩の装備も拡充出来たので一安心ではないですか」

「これも、国栄殿のおかげだ。残るは源氏の騎馬への対抗策だ。西国の馬は東国の馬に比べ馬格が落ち、数も少ない。どうしても徒歩が多く、連弩だけでは騎馬武者を防ぐことは出来ない。何かよい策はないか」

「葦屋浦の時、資盛殿の陣で大連弩の台車を率いていた時の事を覚えておりますか。あの時、迂回した源氏の騎馬武者が逃げる我らが大連弩の台車に追い付き、三基ほどがやられました」

「確か、国栄殿らが長柄で、源氏の騎馬武者を食い止めたと、資盛から聞いたが」

「徒歩の者の主に武具は弓矢。敵が近間に迫っても使えるのは貧弱な太刀位。同じ徒歩が相手ならば問題ないが、騎馬を相手では我らが使った長柄の武具が必要となります。この屋敷にも何種類かございますぞ」

国栄より聞いた知盛は自分一人が見るのではなく、資盛や有盛、教経と侍大将の平貞能、平盛国、盛澄、伊藤景経、景清らにも見せ

たいと呼び集めた。
その間に国栄は屋敷の蔵より三叉槍（さんさそう）、方天鉾（ほうてんほこ）や狼牙棒（ろうげぼう）、槍などの武具を運び出した。
中庭に面した板の間に知盛以下平家の将が座り、国栄が長刀を持ち、三叉槍、方天鉾、槍を持った男と対戦し、各武具の使い方を一通り示した。
「見ているだけでは分からぬ、我にそれを貸してくれ」
板の間で見ていた教経が中庭に降り、三叉槍を借り受け、片手でグルグルと振回した。
手応えを確かめた教経は長さ一間半（２．７ｍ）の三叉槍を構え、
「国栄殿、相手をして下され」と対峙した。
「突く」「叩き付ける」「横に払う」
教経が振回す三叉槍を国栄は長刀で丁寧に受けた。
五、六合、国栄と打合った教経は満足したように頷き、「長刀よりも使いやすい、景清も使ってみろ」と伊藤景清を手招いた。
景清は三叉槍、方天鉾、狼牙棒、槍を一通り振回して見ると、「これが、一番使いやすい」と槍を手に取り、長刀を持った教経と数合打合った。

「征東軍《せいとうぐん》　出陣」　その２

「征東軍（せいとうぐん）　出陣」　その２

この寿永（じゅえい）四年（１１８５年）、九州や四国の西国は天候にも恵まれ、秋の収穫も順調で、各地の荘園の蔵は米で満たされた。

そんな中、征東都督平知盛より九州、四国、長門、周防の各将に出陣の命が下った。

十月十二日、筑前門司関に九州各地より集まったのは騎馬武者一万、徒歩二万の総勢三万の平家の軍勢だ。

平家の本軍は平知盛が率い、平資盛、有盛、平清宗の三人の将の下に侍大将の平盛澄、伊藤景清、景家、伊藤景高、景経、源李定の六人があり、騎馬武者二千、徒歩兵四千、計六千が出陣した。この外に平家の本軍は博多筥崎宮で安徳天皇の警護に、宗盛の下で平盛国以下二千の兵が残った。

薩摩、大隈からは惟宗忠信が侍大将の惟宗忠行と藤原康隆の下に騎馬武者千に徒歩三千の計四千で出陣した。日向勢は宮崎兄弟の次男、宮崎惟直を大将に宮崎惟幸、高千穂有尚を侍大将として騎馬千に徒歩二千の計三千を率いた。

肥後勢は菊地隆直を筆頭に、木原盛実、南郷惟安、川尻康高、相良延由、阿蘇忠宗らが騎馬二千、徒歩三千の計五千で出陣した。

豊後勢は緒方惟栄を大将に、臼杵惟隆、宇佐公通、板井種遠らが騎馬二千、徒歩三千の計五千で、筑後勢は山鹿秀遠を大将に、麻生家村、原田種正が騎馬二千、徒歩三千の計五千で出陣した。

知盛は集結したこの三万の軍勢を山陰道軍と山陽道軍の二手に分けた。

山陰道軍の総大将は平資盛。平家本軍は資盛の弟有盛の下に侍大将の平盛澄、源李定が騎馬千、徒歩兵二千を率いた。筑後勢が騎馬

二千、徒歩三千、日向勢が騎馬千、徒歩二千で、合わせて騎馬四千、徒歩七千計一万一千の勢だ。
山陽道軍は総大将の知盛が率いた。平家本軍は宗盛の息子の清宗の下に侍大将の伊藤景高、景経が騎馬千、徒歩二千を率いた。大隈、薩摩勢は騎馬千、徒歩三千、肥後勢は騎馬二千、徒歩三千、豊後勢は騎馬二千、徒歩三千だ。
更に、知盛の直属としては侍大将の伊藤景家が大連弩を載せた三百基の台車とその護衛の徒歩五百を率い、伊藤景清が半間（９０ｃｍ）の連弩を持つ連弩隊と名付けた五百の徒歩と五百の騎馬を率いた。
連弩隊は、重い連弩を持って走りまわる調練を行った隊で、水軍の船で敵陣の後方に上陸して背後より攻撃する役目もあった。
この大連弩や連弩は、宋船や水軍の大船に装備した連弩を外すのではなく、伊予沖の海戦後、宋の慶元府（寧波）へ出航した謝国栄の宋船の船団が絹織物、陶磁器、書物などとともに運んできた武具の一部だ。
国栄は連弩やその矢以外にも、三叉槍、方天鉾、槍や投石器などの武具を運んできた。
三叉槍、方天鉾、槍の長柄の武具は、唐人街の謝家の中庭で国栄が源氏の騎馬武者に対抗する為の武具として実演を見せた中で使い勝手がよさそうなのを持ち込んだ。
特に大連弩の台車護衛に付いた徒歩には長さ一間半（２．７ｍ）の三叉槍か槍を与え、国栄が宋から連れてきた兵が厳しい調練を行っていた。
その他に赤間が関（下関市）には周防の宇佐木高遠と長門の岩国金秀、紀光則が集まり、宇佐木と岩国は騎馬五百に徒歩二千の兵で山陽道軍に加わり、紀光則は騎馬三百と徒歩五百で山陰道軍に加わった。
彦島（下関市）の平教経の下へ集まった水軍は、平家水軍から宋船三十艘、大船四十艘、戦船五十艘だ。この他に安徳天皇の行在所を

護る為、彦島と博多の湊に宋船十艘と戦船三十艘が残った。
松浦水軍からは松浦正が戦船百艘、山鹿水軍から山鹿時貞（やまがときさだ）が戦船百艘、豊後水軍からは臼杵雅幸（うすきまさゆき）が戦船五十艘、周防水軍からは船所正利が戦船五十艘、阿波水軍からは田口重直が戦船百艘、土佐、讃岐の水軍は滝口俊遠が戦船百艘を率いて加わった。
彦島に勢ぞろいした平家水軍の総数は宋船三十艘、大船四十艘、戦船五百艘の大船団で、兵、水手、舵取り合せて二万を超えた。
平教経は壇ノ浦の調練や伊予沖の海戦での阿波水軍の田口重直の力を認め、下松浦党の松浦毅が指揮する宋船十艘、阿波、土佐、讃岐水軍の戦船二百で資盛の山陰道軍を支援する水軍の大将に任じた。
教経は自身で宋船二十艘、大船四十艘、戦船三百艘を率いて瀬戸内を進み、源氏の水軍を阻んで知盛の山陽道軍を支援するのが役目だ。
謝国栄は総大将の知盛に頼まれ、教経の船に副将として乗り込んだ。
しかし、水軍の最初の仕事となったのは門司関（北九州市）に集まった平家の騎馬一万、徒歩二万の総勢三万の軍勢を赤間が関へ運ぶことだ。
兵糧や矢などは既に長門の赤間が関へ運び込まれていたが、兵だけではなく、馬や弓矢、大連弩の台車など膨大な量を運び込むのだ。
門司関から赤間が関の間を五百艘の戦船だけでなく、門司関、赤間が関周辺の荷船や漁船なども全て動員し、三日間で全て運び終わった。

石見（いわみ）（島根県西部）、出雲（いずも）（島根県東部）、伯耆（ほうき）（鳥取県西部）、因幡（いなば）（鳥取県東部）、安芸（あき）（広島県西部）、備前（びぜん）（岡山県東南部）、備中（びっちゅう）（岡山県西部）、備後（びんご）（広島県東部）の山陰道、山陽道各地の源氏方の諸将も黙って、何もせずに平家の軍勢の来襲を待っていたわけではなかった。
博多より聞こえてくる平家方の動きは、十月に九州各地よりの大軍を擁し、山陰道、山陽道へ押し寄せてくる事は確定的と思えた。

安芸の佐伯景弘が山陽道、山陰道の諸将で力を合わせ、平家の来襲に備えようとの呼びかけを行った。
これは摂津の渡辺津にある義経が平家の侵攻に際し、山陰道、山陽道の各将が個別に拠点に兵を集めても、わずかな抵抗しか出来ない。各地の兵を一箇所に集めて平家に対抗すれば、強力な抵抗が出来ると安芸の佐伯に呼びかけを行わせたものだ。
七月末の暑い盛り、因幡の長田実経、出雲の藤原能盛、石見の益田兼高、厚東武光、安芸の佐伯景弘、丹後の後藤基清、備前の難波利房、備中の妹尾兼康、備後の東條直昭らが安芸の宮島（広島県廿日市市）にある厳島神社の神官を務める佐伯景弘の館に集まった。

因幡の長田、出雲の藤原を始めとする各将も全てはかつての平家の家人であった。
中でも厳島神社（広島県廿日市市）の神官の佐伯氏は厳島神社が平家一門の信仰を集めると大きな恩恵を受けた。
平清盛は荘厳な社殿を造営し、莫大な社領を寄進し、他の平家一族も郎党を率いて厳島神社へ参籠し、金、銀、絹布などを多大に寄進していた。
だが、平家が一の谷の合戦で源氏に敗れた時、佐伯景弘は平家を見限って山陽道を進んだ源氏の範頼軍に兵や兵糧を提供した。
壇ノ浦や葦屋浦の合戦の後も、傷き逃げ戻った源氏の兵を治療、兵糧を供しており平家の博多の朝廷には不参加を決めていた。
山陰道、山陽道の諸将が厳島の佐伯の館に集まった時、鎌倉の源頼朝の代官として源義経と渡辺水軍の将渡辺守嗣が館で待受けていた。
皆の顔が揃った所で、義経が口を開いた。
「博多からは、十月の始めに九州各地の将が兵を引連れ、門司関に集まるようにとの命が征東軍を率い知盛から出されたと知らせてきた。源氏に与力するそなた達がこのままで平家の勢を迎え撃てば、多勢の平家に夫々が一気に押し切られるのは必死。それでは、今、

東国で兵を集めて用意しておる平家追討の軍勢が間に合わぬ。山陰道、山陽道共、どこぞの要害の地に兵を集結し、平家の勢を防ぎ止めてくれぬか」

「義経殿、東国よりの勢が西上するのは何時頃ですかな」

「十月始めには鎌倉を出陣すると聞いている。途中、東海道筋の勢を合わせ総勢五万となる軍勢だ。この勢が西国へ進出するまでは一ヶ月は掛かるはずだ」

義経の援勢が来るという言葉で集まった諸将の顔には安堵が浮かんだ。

「平家の勢はどの位の軍勢で攻めてきますか」

「陸と海を合わせれば総勢は四万を超えるはずです。これが山陰道と山陽道に分かれれば、各道に二万程度の軍勢が押し寄せると見てよいかと」

「二万の軍勢」と聞いた各将は不安な表情を浮かべ、どこの地で平家の軍勢を防ぐかの意見は中々まとまらなかった。

それでも、長門から石見へ大軍が移動出来る道は、長門の山口から中国山地の間を抜け石見（島根県西部）の津和野（つわの）（島根県津和野町）を経て益田（ますだ）（島根県益田市）へ向かう山陰道しかない。

日本海沿いの道は冬場には日本海の荒波で道が削られた所が何箇所もあり、大軍の移動には耐えられない。

迎え撃つ源氏方の石見、出雲、伯耆、因幡などの山陰勢は因幡の長田、出雲の藤原、石見の益田、厚東の勢を合わせても騎馬千に徒歩四千の僅か五千に過ぎない。

この勢で大軍の足を止めるには、この地方最大の河川である江の川（えのかわ）を前に陣を構え、渡河の時を狙って攻撃するしかない。

この江の川が日本海に注ぐところが江津（えつ）（島根県江津市）だ。

だが、益田荘（ますだのそう）（島根県益田市）を本拠とする益田兼高は江津に陣を構える事に抵抗したが、他に適当な場所がなく最後は了承した。

一方、山陽道が通る安芸、備後、備中、備前は瀬戸内沿いの平坦な土地が続き、平家の大軍を迎え撃つ狭隘な地、要害の地は余り見当

たらない。
備前や播磨（はりま）まで下がれば、児島（倉敷市）や三草山（みつくさやま）（兵庫県加市）、室山（むろやま）（兵庫県揖保郡）、一の谷（神戸市須磨区）などの地はあるが、摂津や京に近すぎた。
どの地がよいのか、話がまとまりそうもなくなった時、安芸の佐伯景弘が厳島（広島県廿日市市）と大野瀬戸（おおのせと）を挟んだ本土側の大野浦（おおのうら）が適していると言った。
大野浦は毛保川（けもがわ）と中津岡川（なかつおかがわ）に挟まれた中州の地で、葦原の中を水路が縦横に巡り、大軍相手に戦うには適した地形。平家の勢を待受ける場所は大野浦と決まった。

「江の川の攻防戦」

「江の川の攻防戦」

資盛の率いる一万二千の山陰道軍は、前衛に長門の紀光則の騎馬三百と徒歩五百をおき、十月十六日に赤間が関（下関市）を山陰道を通り出陣した。

前衛に続いて先陣には山鹿秀遠の筑後勢が騎馬二千、徒歩三千、中軍は総大将の平資盛が弟の有盛と侍大将の平盛澄、源李定の下に平家本軍の騎馬千、徒歩二千を率いた。後陣は宮崎惟直の日向勢が騎馬千、徒歩二千で続いた。

山陰道は赤間が関から山口を抜けると中国山地に入り、津和野から益田へ延びる。山口を過ぎるまでは道幅も二間（3．6m）はあり人馬の通行も楽であったが、山地に差し掛かると道幅は一間（1．8m）となり、行軍はなかなか捗らない。

前衛の紀光則（きのみつのり）は二十日に配下の侍大将、紀宗永（きのむねなが）に騎馬武者二十騎を付け、津和野、益田方面の大物見に向わせた。

平資盛の率いる山陰道軍の出陣を見届けると、阿波水軍の田口重直（たぐちしげなお）が率いる山陰道支援水軍は二百艘の戦船と十艘の宋船に山陰道軍の兵糧、弓矢、楯などを積み、石見の益田へ向け赤間が関を出航した。益田は源氏に与力する益田兼高の本拠地。阿波水軍の田口重直は益田への上陸に際し、一戦を覚悟していた。

しかし、田口重直が船上より益田の浜を眺めると、浜で漁より戻った漁師が網や魚籠を繕う姿が見受けられ、戦の前の緊張感は何処にも感じられなかった。

「憲隆、兵を十名ほど連れ、物見をしてまいれ」

田口は郎党の田所憲隆（たどころのりたか）へ命じた。戦船の艫より降ろした小早に乗込んだ田所憲隆が戦仕度で益田の浜へ上陸すると、浜の漁師らは一度は逃げ去った。

しかし、田所らが危害を加えぬ事が分かると浜に戻った。それらの漁師より田所が聞き出した所によれば、益田の兵は九月の半ばに江津（島根県江津市）に向かったままだと言った。

田口重直ら水軍が益田へ上陸し、兵糧などを一部荷揚げしている処へ、山陰道軍から大物見に出た紀宗永が益田に到着した。

田口重直より益田の兵が江津へ向かった事を聞いた紀宗永は、「江津の様子を探りたい。船に乗せてくれ」と頼んだ。

江津は丹後の神崎（舞鶴市）や伯耆の境（鳥取県境港市）越前の三国（福井県酒井市）、筑前の博多（福岡市）などを結ぶ日本海側の湊で江の川の河口にある。

紀宗永は益田より下松浦党の松浦毅が指揮する三艘の宋船に乗り込み、阿波水軍の田所憲隆と江津へ向かった。

沖合いから眺めた江津の湊は、帆をやすめて荷の積み降ろしをする荷船や艀の姿が一艘も見当たらない。

この十月は収穫を終えた米を運ぶ船が行き来する時期、日本海航路の江津の湊に一艘の荷船を見ないのは異常だ。

「湊の様子がおかしい。まず、沖合いで伝馬を下ろし、我が手の者に様子を探らせる」

十月二十三日、江津の沖合いに船掛かりした松浦毅が、紀宗永と田所憲隆に告げた。

松浦毅の命で、荷船の舵取りに扮した下松浦党の深江三郎は伝馬操り、江津の湊へむかった。江津の湊には艀や漁船など小型の船の姿は無く、漁師や水手の姿も見えず張詰めた空気が漂っていた。

浜に上陸した深江三郎が船問屋「江の屋」に寄って尋ねると、江の川の対岸に源氏に味方する石見の益田や厚東の兵だけでなく、出雲、伯耆、因幡の兵らが集結して陣を構え、平家の軍勢を待ちうけている。湊の船は艀や小型の漁船まで徴集され、商売にならないと嘆いた。江の屋の者の話を確かめるべく、深江三郎は再び伝馬に乗り込み、源氏方が陣を構える江の川を遡った。

江の川を河口から五町（５００ｍ）も遡ると、川中には渡河を防ぐ綱や棒杭が立てられていた。河原近くの丘には周囲を空堀で囲み、逆茂木を植えて楯を廻らしてた源氏方の陣が築かれていた。川沿いには長さが二町（２００ｍ）ほどの陣が途切れ途切れに続いた。

陣の規模はそんなに大きくない。数千規模の兵がこもる位だ。深江がそこまで確認して伝間を戻そうとした時、上流から数名の源氏の兵を乗せた船が迫ってきた。

「そこの船、待て」

舳先に立ち熊手を持った兵が大声で、深江の伝間を制止した。深江は櫓を漕ぐ手を止め、源氏の船が近づくのを待った。

「お前は何処の者だ」

「三国湊の栄丸の舵取りの三朗と言いやす。船は先ほど江津に沖掛りしたので、この先の安西に住む親戚を訪ねてきやした」

「この辺りは間もなく戦が始まる。益田の兼高様が陣を構えている。この先には進めぬ。戻れ、戻れ」

兵は威嚇するように深江を怒鳴った。

「間もなく、この辺りで戦が起きるので」

「そうだ。平家の軍勢をここで待ち構えている。この辺りをうろうろしていると、戦に巻き込まれるぞ。戻れ、戻れ」

深江はその場から伝間を戻し、江津の沖合いで待つ宋船の松浦毅の下へ戻った。

「源氏は江の川沿いに陣を構えたか。総勢はどの位と見た」

紀宗永は一番気に掛かる事を深江に聞いた。

「陣を遠くより見ただけ、直ぐに兵に追い払われたので数千位としか・・・・」

「分かった。松浦殿、船を益田へ戻してくれ。直ぐに、知らせに戻る」

「紀殿、既に刻限は夕刻過ぎ。夜の航海は座礁の危険があります。今宵はこのまま沖掛かりに留まり、深江に再度敵陣を探らせ、明日早朝に出航しましょう」
戌の刻（午後８時）、海上を照らす月明かりを頼りに再び一艘の伝間が宋船より降ろされ、静かに江津の湊へ漕ぎ出した。
伝間には下松浦党の深江三郎、紀家の侍大将紀宗永、阿波水軍の田所憲隆に二名の漕ぎ手が乗った。伝間が江の川の河口に入ると、源氏方が陣を構える岸辺に船を寄せ、深江、紀、田所の三名が上陸した。
「ザワザワ」と枯れた葦の葉が風に揺れて、三人が河原の小石を踏みしだく音を消した。
暗闇の中に篝火が見える処が、源氏方の陣だ。明りは数箇所に見られた。
十人ほどの宿直の兵がいる。だが、緊張感なく篝火の周りに座り込み、瓶子の酒を飲み廻していた。
出雲から来た藤原能盛の兵だ。十日前に来てから、毎日毎日、空堀掘りや逆茂木作りで飽いていた。
将の中には江津の妓楼に出かけて遊ぶ者もいて、酒に酔った兵らは不満を漏らしていた。
深江が船問屋より聞いた石見、出雲、伯耆、因幡の兵が集まったというのは間違いない。五、六千は集まっている。

益田に進出した平資盛の本陣へ江津（島根県江津市）に源氏方の兵五千が陣を構えている事が前衛の長門の紀光則より告げられた。
「長門の紀宗永、阿波水軍の田所、下松浦党の深江の三名が敵陣を探ってきた」
資盛は本陣へ集まった平有盛、山鹿秀遠、宮崎惟直、侍大将の平盛澄、源李定に源氏方の様子を告げた。
「敵は我らが半数ほど。すぐにも江津へ押し寄せ、源氏方の輩を討ち取ろうぞ」

若く血気盛んな有盛が威勢良く言い放った。
「有盛殿、物見によれば敵は江の川の中に綱を張り、杭を打ってあるとか。強引に渡河を行えば、相手の思う壷になりますぞ」
「山鹿殿の言われる通りだ。そこで、満潮の時に楯を廻し、連弩を乗せた戦船で江の川を遡り、敵陣に矢を降り注ぎながら川中の網や杭を取り除き渡河を行う」
「資盛殿は何艘位の戦船を江の川に乗入れるお積りか」
「八十艘ほどの戦船を考えております」
「すると、戦船は百艘ほど残りますな。百艘の戦船に二千ほどの兵を乗せ、江の川の対岸後方へ上陸させ、敵陣を攻撃するという策はいかがですかな。資盛殿が承知ならば我が手勢で行うが」
宮崎惟直が積極的な攻撃を志願した。
「面白い策ですな。連弩を乗せた戦船が川中の綱、杭を除き、渡河を始めた時に狼煙を上げます。その狼煙を合図に宮崎殿も攻撃を開始してくだされ」
十月二十四日早朝、平家勢は長門の紀と日向の宮崎勢の騎馬武者を先陣とし、中軍は平資盛、有盛が率いる平家本軍、後陣は山鹿秀遠の筑後勢の順で益田を出発した。
宮崎惟直の二千の日向の徒歩は益田の浜より阿波水軍の百艘の戦船に乗込み、江津を目指して出航した。
阿波水軍の戦船は片舷十丁から十五丁櫓で、長さは十間（１８ｍ）、幅は二間（３．６ｍ）から二間半（４．５ｍ）だ。残りの戦船は宋船より外した連弩を各船に五基積込み、江津を目指した。
益田から江津までは騎馬で二刻（四時間）、徒歩では三刻（六時間）ほど掛かる。
巳の刻（午前１０時）に益田を出陣した兵が江津に到着したのは申の刻（午後四時）。
山陰道軍の総大将平資盛は江の川の左岸に陣を築くよう命じた。宮崎惟直が率いる二千の徒歩兵は江津の湊を避け、江の川の右岸側の浜に上陸した。

宮崎が率いる二千の徒歩兵には下松浦党の深江三郎と阿波水軍の田所憲隆が同行した。
資盛は宮崎が率いる徒歩兵に源氏方の注意が向かぬよう、盛大に陣を築き始めた。
源氏方の将兵も江の川の河原に出て、その様子を眺めた。因幡の長田実経（ながたさねつね）は不安な声で益田兼高に告げた。
「あの平家の軍勢を見よ。我らの倍以上はあるぞ。あの勢が一斉に押し寄せてきたら防ぐことなど無理ではないか」
「川の水量が減ったとは言え、真ん中辺りは五尺（１．５ｍ）はある。騎馬に渡河は出来ても、徒歩は五町（５００ｍ）以上も上流に廻らねば渡河は出来ぬ」
「藤原殿が陣を構える辺りか」
「渡河の途中を矢で迎え撃てば、平家の奴らも容易くはこの川を渡る事は出来まい。この陣で数日間も防げば、我らの役目は果たせる」
益田の言葉に安心した長田実経は自陣へ戻った。

二十五日早朝、日の出と共に江の川の満潮の潮の流れに乗り、楯を引廻した八十艘もの平家の戦船が源氏の陣の前に現れた。
「敵だ。敵の船が現れた」
源氏方の各将、因幡の長田、出雲の藤原、石見の益田、厚東の誰もが平家の戦船が現れるとは思わず、海側への警戒は怠っていた。
厚東武光が漁船や艀など小型の船を二十艘集め、江の川の見張りに使用していたが、平家の戦船に立向かえるような船ではない。
「楯の所まで弓兵を進めよ。敵の矢が来るぞ」
益田兼高の声で、胴丸を着け、弓矢を持った五百ほどの徒歩兵が河原に並べた楯に向かい走り始めた。
源氏の徒歩兵目掛けて、平家の戦船より三百基の連弩と五百の弓兵が一斉に矢を放った。
連弩から放たれた矢は河原に並べた楯を撃ち抜き、その背後に潜んだ徒歩兵を射抜いた。

「ウォー」「ギャー」
悲鳴をあげて河原に伏せる源氏の徒歩兵の頭上から平家の弓兵が放った矢が降り注いだ。
江の川の河原には矢を受けて、傷付いて血を流す源氏方の徒歩兵が折れ重なるように倒れた。
平家の戦船が江の川の川面を埋めたのはわずか四半刻（３０分）の間だった。
だが、この僅かの間に源氏方では一千以上の徒歩兵が傷付き倒れて失われた。
源氏方の因幡の長田、出雲の藤原、石見の益田、厚東らは今までこのような短時間で多くの兵を失う戦をした事はない。唯、呆然と戦況を見ていた。
戦船の間より赤糸縅、黒糸縅、黄糸縅など色取り取りの鎧兜を着けた平家の騎馬武者が江の川を渡河して姿を現わした。
それを見計らって戦船は湊へ引上げ、平家の陣より数筋の烽火が上がった。

「あの烽火は何だ。何を仕掛け来ようというのだ」
益田兼高は対岸の平家の陣の動きを見ようと、自陣の前方に出た。
その時、陣の後方にある雑木林の中より「ザ、ザー」音を立てて矢が降り注いだ。
「敵だ、平家が後方に廻った」
「挟み撃ちだ。早く逃げぬと平家に殺れるぞ」
動揺した兵は、大声で叫びながら逃げ出した。
「逃げるな。敵を迎え撃つのだ。後方へも楯を廻せ」
黒糸縅の鎧兜を着けた益田兼高の侍大将、益田兵衛門（ますだへいえもん）が太刀を振りかざして兵の流れを止めようとした。が、兵の逃出す圧倒的な勢いに押され、流れを押し止める事はできない。
「兵衛門（へいえもん）、もうよいぞ。この戦は我らが負け戦。我らも逃げるぞ」
益田兼高は陣脇に繋いだ馬に騎乗すると、山越えで安芸（広島県）

に抜ける道を目指し江の川の上流を目指した。
出雲の藤原勢や因幡の長田勢も夫々が思い思いの方角へ落ちて行き、江の川を挟んでの戦は二刻（４時間）も掛からずに平家の勝利のうちに終わった。
「何とも歯ごたえの無い連中であったな」
平家の騎馬武者の後方から江の川を渡河した山陰道軍の総大将平資盛が有盛や侍大将の平盛澄に向かって言った。
「戦をしたのは、源李定の兵と宮崎殿の兵だけだ」
「資盛殿、この後は」
「知盛殿にこの戦の結果を知らせる使いを出し、我らはこのまま山陰道を京へ向う」
資盛は力強い声で皆の前で告げた。
資盛の「京へ向う」という声に、「ウォー」という歓声が兵や武将の間からあがった。

「奇襲　宋船奪取《そうせんだっしゅ》」　その１

「奇襲　宋船奪取」　その１

赤間が関（下関市）において山陰道軍を先行させた知盛は、翌十七日には山陽道軍を率いて周防の岩国（岩国市）を目指して軍を進めた。

先陣は周防の宇佐木高遠、長門の岩国金秀が率いる五百の騎馬と二千の徒歩及び惟宗忠信の率いる大隈、薩摩の千の騎馬と三千の徒歩。

中軍は宗盛の息子清宗の下に侍大将の伊藤景高、景経が平家本軍の千の騎馬と二千の徒歩を率いた。

知盛は直属する侍大将の伊藤景家が大連弩を載せた三百基の台車とその警護に当たる五百の徒歩を率い、同じ侍大将の伊藤景清が半間（９０ｃｍ）の連弩を持つ連弩隊と名付けた五百の徒歩と五百の騎馬を率いた。

後陣は菊地隆直の肥後勢が二千の騎馬と三千の徒歩に緒方惟栄の豊後勢が二千の騎馬と三千の徒歩。

山陽道軍全体で七千の騎馬、一万三千の徒歩の計二万、更に三百基の大連弩を持つ。

平教経が率いる平家水軍は宋船二十艘、大船四十艘と松浦水軍、山鹿水軍、豊後水軍、周防水軍が総勢三百艘の戦船で従う。

山陽道軍の総大将平知盛は源氏の源義経の行方を非常に気にしており、教経に命じて義経が居る攝津の渡辺津を探らせていた。

平家の全軍を挙げ博多を出陣し京の奪回を目指すこの時、知盛が恐れたのは義経が奇計により安徳天皇の行在所がある博多を衝く事だった。

今年の六月中旬、義経の姿が渡辺津より消え、七月末に安芸の厳島に姿をみせるまでの一月半の間、知盛は博多の湊や安徳天皇の行在所である筥崎宮の警備を一段と厳しくした。

平家の山陽道軍、山陰道軍が出陣の為門司関、赤間が関に集まりつつあるとの報が摂津の渡辺津にある義経の下へ伝えられたのは十月十日の事だ。
総勢七万と号する平知盛の率いる平家の征東軍を後白河院は大いなる脅威として受け止めていた。
後白河院は鎌倉にある頼朝へ至急に平家討伐軍の上京を求めると共に、十月十二日には摂津の渡辺津にある義経を六条西洞院の院庁へ呼び出した。
その頃には京の街中には平家の軍勢が上京するという噂が流れ、騒然とした空気が漂っていた。
六条西洞院の院庁には後白河院の傍に大蔵卿高階泰経、蔵人藤原光能、蔵人葉室光雅らが控えていた。
「鎌倉の求めに応じ頼朝を東海道、東山道の惣官に任じたが、平家が軍勢を揃え山陽道、山陰道を京へ攻め上ろうとするこの時になっても、坂東より平家討伐の軍勢は上京せぬではないか。鎌倉は何を考えておるのだ」
「鎌倉では安田義定、梶原景時、土肥実平、熊谷直実、田代信綱、三浦義連、北条義時、畠山忠重、足利義兼らの諸将に命じ兵を集め、兄の全成を総大将として既に出陣したと聞いております。我の方でも平家の動きについては鎌倉に報じております」
「その鎌倉よりの軍勢はこの度の平家の軍勢に間に合うのか」
「既に、因幡、出雲、石見、安芸、備前など山陰道、山陽道にある源氏に与力する諸将にはその勢を集め、平家の軍勢を足止めするように命じてあります」
「院は未だに坂東より一兵も上京せぬ事を案じておるだ。そこで、そなたにこの院宣を与える」
院の側近高階泰経が差し出したのは、近江、山城、河内、和泉、摂津、大和、紀伊の畿内各地の武将に対し、摂津の源義経の下に集まる事を命じた院宣であった。

「これは・・・」
義経はその院宣を受けるのを拒んだ。
「これは、院の命である。頼朝が自ら軍勢を率いて来るのならまだしも、そなたの兄とはいえ、一度も合戦に出たこともない者を総大将とするのは院としは納得が出来かねる。その者が敗れれば、京は再び平家の支配下に置かれる事となる。それを避ける為にも、そなたに京の守護を命じる院宣である」
義経が平家との合戦において、遅れを取ったのは壇ノ浦の合戦の時だけ。兄の範頼が葦屋浦の合戦において討死した今、自分が頼朝の代官として坂東、東海の将を率いる総大将となると思っていた。
ところが、鎌倉は義経ではなく、今まで一度も合戦に出たこともない兄の全成を総大将としてきた。その事に義経は大いに不満を持っていた。
「院の命とあらば仕方ありません。畿内の武士を糾合して、京の守護に付きます」
急ぎ摂津に戻った義経は、十月十五日には近江の安達清経、佐々木定綱、山城の後藤新兵衛、河内の石川義賢、摂津の渡辺広綱など総勢八千の兵を率い入京した。
義経は西国から京へ通じる山陰道、山陽道の両道に対して防御の陣を構えた。
山陰道は丹波と山城の境である老ノ坂峠にある大江関に、山陽道は須磨（神戸市）から山崎（京都府大山崎町）へ続く鳥羽口に陣を構えた。
老ノ坂峠にある大江関を近江の安達清経、佐々木定綱、山城の後藤新兵が三千の兵で、鳥羽口は河内の石川義賢、摂津の渡辺広綱らが五千の兵で守り、義経の本陣は鳥羽の安楽寿院に置いた。
一方、鎌倉を十月十日に出陣した源全成を総大将とする三万の平家討伐軍は、二十五日には尾張の熱田（名古屋市）に達し、先陣が入京するのは十月末か十一月始めとの知らせが義経の下へは届いた。

討伐軍の主な将は甲斐の安田義定、相模の梶原景時、土肥実平、和田義盛、田代信綱、三浦義連、北条義時、武蔵の熊谷直実、比企能高、畠山重忠、下野の足利義兼、小山信惟、下総の千葉常胤、結城朝充、駿河の勝間田平蔵《かつまた平蔵》、尾張の大屋安資、美濃の泉重光などだ。比企能高、小山信惟の二人は葦屋浦で討死した比企能員、小山朝光の兄弟だ。

義経の姿が鳥羽口の安楽寿院の本陣より消えたのは、十月十八日の事だった。

前日の十七日、義経の本陣を熊野水軍の熊野湛増が一族の熊野十郎太が数名の郎党と共に訪れた。

「これが、親方様からの文です」

熊野十郎兵が差し出した湛増からの文には「丹後の神崎（舞鶴市）」とだけ書かれていた。

その文を見た義経は「用意が整ったか」と小声で呟くと、郎党の佐藤継信、鎌田盛正、伊勢義盛、鷲尾義久、亀井重清らを呼んだ。

「この陣を密かに抜ける。その方らが供をせよ」

義経は狩衣姿、弓矢、大太刀、長刀を持った郎党二十騎を引連れ、大江関の陣を巡察する態で本陣を出た。

本陣に残した武蔵坊弁慶には近江、山城などの諸将より問合せがあれば、「平家の様子を探りに出た」と伝えるように命じた。

義経の一行は京の桂川の手前、吉祥院裏までは緩やかに馬を駆けさせたが、桂川を渡り山陰道へ入ると馬の脚を速めた。

周囲の木々は僅かに黄色や赤に染め、間もなく本格的な紅葉の季節を迎える。そんな風流を愛でる余裕もなく、一行は馬の脚を急がせた。

老ノ坂峠の大江関を抜けた義経一行は亀山（亀岡市）から丹波（京都府京丹波町）に差し掛かる頃には秋の日は落ち、暗闇が辺りを覆った。

先導する熊野十郎太の郎党の後を義経一行はくねるように丹波の山

中を通る山陰道を進んだが、綾部（綾部市）の里に到着した頃にはこれ以上の進むのは困難となり、里長の屋敷に泊まった。
翌朝早く、再び一行は由良川沿いに神崎（舞鶴市）を目指した。
神崎の湊では熊野湛増が丹後の船問屋「長岡屋」の印を掲げた三艘の長さ十間（１８ｍ）、幅三間（５．４ｍ）の荷船を揃えて義経一行を待っていた。
三艘とも俵を満載し、丹後から博多へ米を運ぶ船を偽装していた。
湛増は義経の顔を見ると、早速に告げた。
「明日の二一日早朝に出航する。既に、石見の益田辺りには平家の戦船が出没し始めたとかで、平家の戦船に見咎められても切抜けられるよう皆、水手や漕ぎ手に扮装している。無論、義経殿らも扮装をしてもらいますぞ」

今年の六月、義経は鎌倉からの帰路、熊野水軍の本拠地である紀伊の田辺に寄って湛増に告げた。
「源氏もあの連弩を手に入れ、平家と同じ装備を整えねば戦には勝てぬ。平家はいずれ総力を上げて京の回復を目指し、博多を出陣するはず。その隙に博多か彦島（下関市）を襲い、宋船ごと連弩を奪おうと思う。湛増、この策に力を貸してくれ」
「そんなに上手い具合に、宋船が博多や彦島に残っているとは思えませんぞ」
「平家が博多を出陣する際には、安徳天皇や三種の神器は博多に残る」
「京を退去した時のように、安徳天皇や三種の神器を一緒に伴うのではないか」
「あの当時は安徳天皇や三種の神器を落着かせる場所がなかった。だが、今は九州の地を平定し、九州には平家に逆らう勢力はもう残っていぬので安心して博多に残せる。しかも、彦島（下関市）の水軍が早鞆の瀬戸を監視しておれば、瀬戸内や山陰道、山陽道からの敵が九州に上陸する前に討つ事が出来る。だが、日本海側から博多、

彦島を衝けばどうだ」
「うーむ、日本海側からか」
「平家の主力は山陰道、山陽道の二道に別れ京へ向う。途中、源氏の勢が待ち受けておれば平家の関心はその勢に向けられ、数艘の荷船に注意を向ける者などおらぬ」

義経は丹後の神崎で博多、彦島へ潜り込ませた渡辺水軍の者よりの知らせを受けた。
「平家の水軍は博多に宋船五艘、戦船二十艘、彦島には宋船五艘、戦船十艘ほどを残しています。しかも、彦島の水軍は夕方になると兵は船から島の陣屋に戻り、船に残るのは僅かな水手だけになります」
米俵を満載した「長岡屋」の三艘の荷船が丹後の神崎（舞鶴市）を出港したのは十月二一日の早朝。
一艘の荷船には熊野水軍の兵六十名が水手に扮して乗込み、穏やかな秋風をその一本帆に受け、日本海の波を切裂き、三艘の荷船は伯耆の境（鳥取県境港市）を目指した。
「石見の江津には山陰道で源氏に与力する石見、伯耆、因幡、出雲の勢が陣を張り平家の勢を待受けている。石見の益田辺に平家の戦船が出没しておれば、まもなく江津で戦が始まる。その戦に紛れ石見の沖を抜ける」
境の湊へ向かう船上で義経は熊野湛増に告げた。
「では、境の湊で物見船を出し、戦の兆候を探りましょう」
境の湊で湛増は早速に物見船を手配して石見の江津に向けて出航させた。

「奇襲　宋船奪取《そうせんだっしゅ》」　その２

「奇襲　宋船奪取（そうせんだっしゅ）」　その２

二日後の二十四日、物見船より平家の戦船の動きが慌しく、間も無く戦が始まるとの知らせが入ると、湛増はすぐさま出航を命じた。幸い、海のうねりは強いが風は穏やかだ。

「これより石見の沖合を一気に突っ走るぞ」

当時の船は宋や朝鮮へ向かう外洋船以外は「地乗り」で陸地から離れず、山などの地形を目視しながら進み、夜間の航海は行わない。湛増は外洋航海と同様に「沖乗り」で進む事を命じた。

二十五日の夕刻、三艘の荷船は無事に響灘の六連島（下関市）と竹の子島の間を抜け、彦島の福浦に近づいた。そこへ、揚羽蝶の印を掲げた平家の戦船が近づいた。

「何処の船だ。何の用だ」

「丹後の船問屋『長岡屋』の荷船で、博多へ向う途中です」

湛増が乗る船の舵取りが答えた。

「何を積んでおるのだ」

「米です」

「荷改を行う。船に乗移るぞ」

平家の三人の兵が戦船から荷船に乗り移り船倉の米俵を改めたが、何も異常は無く、福浦への入港が認められた。

荷船の舵取りは、湛増の指示で二本帆柱に夕日を浴びる宋船の直ぐ近くへ荷船を停泊させた。船上より周囲の様子を伺った湛増が、小声で義経に告げた。

「五艘の宋船があるとの知らせだが。三艘しかおらぬようだぞ」

流石の湛増も緊張を隠せぬようだ。

「三艘もあれば十分。月が昇ったら始めるぞ」

三艘の荷船が錨を降ろすと、湛増の乗る船に他の二艘より伝馬に乗

った数名の兵がやって来た。皆、小頭を務める男だ。
「今宵月が昇った頃、湊にある三艘の宋船を襲う。夫々の位置をよく覚えておけ。遅れるな。他の船の事は気にせず、襲撃に成功した船から順次田辺を目指し出航せよ」
湛増が湊の周囲の様子を見ると、戦船は福浦の浜に引上げられ、宋船からは兵や水手などが伝馬に乗り浜へ戻っていた。
彦島の平家の水軍を率いる将は宗盛の郎党の一人、湯浅重徳（ゆあさしげのり）だが、源氏の勢がこのような処まで来る訳が無いと彦島の防備には注意を払っていなかった。
日は暮れ、中空には三日月が青白く輝き彦島の福浦に降り注いだ。
その月明かりの中を長岡屋の印を掲げた三艘の荷船から六艘の伝間が降ろされた。
水軍鎧を着け太刀や長刀で武装した兵が各伝馬に五名が乗って静かに宋船に向った。
兵は宋船の艫の碇の綱を伝って、宋船へ乗り込んだ。
三艘の荷船も静かに宋船に近づいた。舷側の高さは宋船の方が一間（1．8m）ほど高い、伝馬から乗り込んだ兵が垂らす縄梯子を伝い荷船から兵が乗り込む。
湛増や義経、義経の郎党も兵に続き宋船に乗り込んだ。
「佐藤継信（さとうつぎのぶ）、鎌田盛正（かまたもりまさ）は船倉を探れ、伊勢義盛（いせよしもり）、鷲尾義久（わしおよしひさ）は矢倉の中だ」
熊野水軍の兵は太刀を抜き、長刀を構え、宋船の矢倉や船倉に入り込み、平家の水手や舵取りを見出すと静かに殺戮が行われた。
義経の郎党は船倉や矢倉の中に入り込み、連弩の弦や矢などを探した。

義経や湛増が乗り込んだ宋船とは別の宋船では船上に誰何の声が響いた。太刀と太刀や長刀の撃ち合う音が暗闇の中に響く。
その宋船には水手だけでなく兵も残って、熊野水軍の兵は船内を速やかに制圧出来なかったようだ。

義経はもとより湛増も多少の犠牲は覚悟していた。平家の兵が抵抗を続ける宋船には構わずに大声で命じた。
「我らは出航するぞ。皆、櫂の座につけ。碇の綱を引上げろ」
宋船に乗込んだ熊野水軍の兵は太刀、長刀を置いて漕ぎ手の座に座り、櫂を手に取り漕ぎ出した。
義経は湛増と並び宋船の矢倉の前に立ち、月明かりの中で浜の方を見据えていた。二艘の宋船は平家の兵の抵抗を受ける事も無く、福浦の湊を静かに離れた。
しかし、残る一艘の宋船上では平家の兵が叫んだ。「敵だ、敵襲だ」夜の闇の中に声が響いた。福浦の浜に松明の明りがいくつも現れ、浜に上げた戦船を押し出そうとする掛け声が聞こえた。
湛増は浜の動きを気にして、宋船の行き足の遅さにやきもきしていた。
「まだ、早鞆(はやとも)の瀬戸(せと)に入らぬか」
やがて、潮の流れに乗って船足が早くなったのが義経にも感じられた。湛増は後続する宋船への目印として舳と艫に松明を点した。
二艘の宋船は、僅かばかりの月明かりと松明の明りを頼りに早鞆(はやとも)の瀬戸(せと)の潮の流れにのり壇ノ浦へ向かって船足を速めた。
義経と湛増が乗る宋船が先行し、後続する宋船は一族の熊野十郎太が指揮を執っていた。
二艘とも漕ぎ手の座に兵を座らせ、四十丁の櫓を忙しく動かし、前帆を半分ほど揚げて暗闇の中を進んだ。
その時、はるか後方で炎が上がり、その周囲に揺れ動く松明の明りがいくつも見えた。
その炎を見た義経が湛増に言った。
「もう一艘の奪取には失敗したようだな」
「やはり、三艘は無理でしたな。喜兵衛は失敗を悟り、宋船に火を掛けたようだな」
「追っ手はどうなった」

「この暗闇は相手も同じ、中々に追いつかれる事はない。この船の見張りに立つ千造は星明りの下でも十町（１０００ｍ）先まで目が利きます」
夜明けまでには、まだ三刻（６時間）以上はあり、この先に向かえば小島や浅瀬が多い海域へ入る。
いくら夜目の利く見張りがいても帆を揚げて船足を速める事は出来ない。だが、これは平家の追っ手も同じ条件だ。
「湛増、平家の山陽道軍はもう安芸か備後辺りまで進出しておろう。平家の水軍に遭遇せずに田辺まで逃げ切れるか」
「平家の水軍は山陽道軍の支援で、安芸や備後の岸近くを航行しておるはず。彦島からの知らせが届く前に四国よりの航路を取れば、見つかる事はありませんぞ」
強奪した宋船は熊野水軍の本拠地である田辺に運ぶ事になっていた。田辺であれば瀬戸内の航路から外れ、隠し湊も多くあり宋船の事を騒がれる事もない。
又、船大工や武具師、仏像、仏具の細工師もおり連弩を真似して作る際にも不足はない。

「島影が見えます」
船首に立つ見張りの千造が大声で知らせた。
二艘の宋船は壇ノ浦奥津（下関市）の沖にある千珠島（せんじゅとう）、万珠島（まんじゅとう）の付近に差し掛かっていた。
「この辺りで夜明けを待つ」
湛増の命で漕ぎ手の座に座った兵は一斉に櫓を上げ、半帆を下ろし錨を投げ入れた。
後続する熊野十郎太の船も櫓を上げ、帆を下ろし錨を入れて並んで漂った。だが、夜半を過ぎた頃から早鞆の瀬戸の方向より吹き付ける風がだんだんと強くなってきた。
海上は荒れ出し、万珠島の島影に錨を下ろした二艘の宋船も波にもまれ、左右に大きく揺れだした。

湛増ら熊野水軍の兵は船の揺れをものともせず、甲板の上を走り、帆柱に登り夜明け前の出航の準備に余念がなかった。
隣に停泊した十郎太の指揮するもう一艘の宋船でも同じように作業が行われていた。
夜明け前、東の空を覆う雲の切れ間から薄明かりが漏れる中、二本の帆柱に半分ほど掲げた帆に強い追い風を受け、二艘の宋船は荒れる波を切裂き、豊後の国東半島の沖にある姫島と周防の祝島の間を抜けて四国寄りの航路を取り伊予灘に入った。
夕刻には宋船は伊予沖に達した。
義経、佐藤継信（さとうつぎのぶ）、鎌田盛正（かまたもりまさ）、伊勢義盛（いせよしもり）、鷲尾義久（わしおよしひさ）、亀井重清（かめいしげきよ）らの郎党も既に何度も船戦で戦船に乗った事はあるが、このような激しい揺れは始めてだ。
船酔いに襲われ、青白い顔で矢倉の中で横たわる者もいた。それでも、義経は揺れる矢倉の前に立っていた。
「湛増、この先にある釣島と興居島には河野水軍の船隠しがある。今宵はそこに船を入れて休もう」
「何故、河野水軍の船隠しをご存じか」
「六月始めに伊予の河野一族が平家の水軍に攻められた時、摂津渡辺水軍の渡辺守嗣と共に援勢を率いて伊予に来た。その時、河野通信は釣島、興居島の船隠しに船を隠し、来襲する平家水軍に備えたが、圧倒的戦力の平家水軍に圧倒され、渡辺水軍は興居島の船隠しより逃げ出したのだ」
やがて、目の前に釣島の島影が見えた。通常の瀬戸内航路の航海では一日半以上掛かる処を、二艘の宋船は僅か一日で到達した。
釣島の船隠しの中は、外の荒れが嘘のように静かだ。
翌二十七日の朝を迎えると、空に掛かる厚い雲が勢いよく流れ、雨は時折横殴りに降り、瀬戸内の海は大いに荒れた。
だが、この荒れは何とか紀伊の田辺に逃げ込もうという義経や熊野湛増には幸運だった。

この荒れた海に通常の漁船や荷船、戦船で乗り出せば、船体は砕け、遭難するのは目に見えている。この二艘と同じような宋船か外洋航海用の大船しか航海できない。

二艘の宋船は平家水軍の影を見ることもなく、釣島、興居島、睦月島らの島々の間を抜け、更に豊島、大崎下島、大三島、大島、伯方島、因島などの島々が密集する備後灘から淡路島の島影を見て、二十八日の昼過ぎには攝津の渡辺津に入港した。

通常、摂津と博多を結ぶ荷船であれば七日は掛かるところを僅か三日ではしりぬけた。

「湛増、我はこの渡辺津より京へ向う。そろそろ坂東からの軍勢が京へ入って来る頃だ。これ以上京を空けておく訳には行かぬからな」

義経は郎党とともに摂津の渡辺津で宋船を降り、宋船より外した二十基の連弩とその矢を渡辺党の川船に積替えて淀川を京の伏見まで遡った。

「安芸厳島《あきいつくしま》の合戦」　その１

「安芸厳島の合戦」　その１

十月二十三日の昼、知盛の率いる山陽道軍の本軍は安芸の小瀬（広島県岩国市）に到着した。

小瀬の本陣へ騎馬で二刻（４時間）にある玖波（広島県大竹市）に陣を構えた先陣の周防の宇佐木高遠より使番が来た。

「安芸、備後、備中の源氏方に与力する勢が厳島（広島県廿日市市）の対岸、大野瀬戸の本土側、大野浦に陣を構えております。総勢は安芸の佐伯を中心とした七、八千。毛保川と中津岡川の二つの川に挟まれた中洲に陣を構えております」

「安芸の佐伯景弘が敵勢の中心か。父、清盛は厳島神社の神殿だけではなく、広大な社領も佐伯の家に寄進した。あの者だけは許せぬ」

知盛も父、清盛の代理として何度か厳島神社を訪れ、その時出会った神官の佐伯景弘を思い出した。

「大野浦の湊は厳島に参拝者が渡る湊で、門前町も開けておった。宇佐木には源氏の詳しい陣立ての様子を調べるよう伝えろ。我らの陣も急ぎ玖波に進める」

「山陰道を進む資盛よりも知らせが来た。山陰道でも石見の江津（島根県江津市）に五千ばかりの源氏方に与力する者らが陣を構え、資盛らの行く手を阻んでおる。宇津木が知らせてきた大野浦に陣を構える源氏の勢も我らの行く手を阻み、東国から源氏の勢が進出する時を稼ぐ積りのようだ。我らは一気に大野浦の陣を抜き、京へ進もうぞ」

知盛は本陣に本軍の清宗や侍大将の伊藤景高、景経、景家、景清、後陣の菊地隆直、緒方惟栄を集め、急ぐように命じた。

本陣の小瀬（広島県岩国市）出発に際、知盛は郎党の伊藤景清と水

軍の平教経、謝国栄を呼んだ。
「海上より大野浦の敵陣の様子を探ってまいれ。周防水軍の船所正利ならば、大野瀬戸の浅瀬は何処で、大船が通れる水路は何処を十分に承知しているはず。大連弩の射程に敵陣があれば、海上からの攻撃で一気に敵陣を落せるぞ」
岩国の湊（広島県岩国市）へ戻った三人は、教経の本陣を置いた和木（広島県岩国市）へ船所を呼んだ。
「今、知盛殿の本陣より戻ったところだ。先陣の宇津木殿から安芸、備後、備中の源氏方の将兵が大野浦に陣を構えて待ち構えていると知らせがあった。知盛殿より海上から敵陣の様子を探り、攻撃が可能かどうかを探って参れと言われた。この辺りの海に詳しい船所殿に案内を頼みたい」
「判りました。ですが、間もなく日も暮れます。大野瀬戸の狭い所は五町（５００ｍ）ほどしかありません。暗闇の中を通り抜けるのは困難です。明日の早朝に岩国を出て、大野浦へ向かいます」
二十四日の早朝、日の出前の微かな星明りの中を艫に松明を点し、十人の水手が漕ぐ周防水軍の小早がゆったりと岩国の湊を出て、瀬戸の海へ漕ぎ出した。
小早の舵を取るのはこの辺りの海をよく知る与平治という老練な舵取りだ。
平教経、謝国栄、伊藤景清、船所正利らが乗った平家水軍の大船はその小早の後をゆったりと進んだ。
大船に備えた舷側の連弩と屋形上の大連弩には射手が付き、いつ敵が現われても対応出来る態勢を取った。
源氏方も平家の軍勢が近づいているのは知っている。物見や警備の船に何時遭遇してもおかしくない。
教経は舳と舷側に見張りを立てただけでなく、高さ六間（１１ｍ）の帆柱にも見張りの者を登らせた。
「大野浦にある源氏方の陣に大連弩の矢が届くか。国栄殿には見極めてもらいたい」

教経の言葉に頷く国栄に、船所が尋ねた。
「大連弩の射程はいかほどですか」
「単に矢を射るだけであれば、五町（５００ｍ）は飛びます。だが、鎧や楯を打抜くような威力を発揮するのは三町（３００ｍ）程ですか」
五町（５００ｍ）も飛ぶと聞いて、船所は驚いた。普通の弓では五人張りの大弓でも二町（２００ｍ）には届かない。

十月末の瀬戸内の海は風もなく穏やかだ。薄暗闇の中、波の音に混じり、櫂の音、帆が風を切る音が響いた。
小早に先導された大船が大野瀬戸の手前に差し掛かったのは、朝日が明るく海上を照らし出す頃だ。
「間もなく、大野瀬戸に入ります。大野浦は左手に、右手には厳島が見えます」
船所が教経に指し示した時、大野浦の湊から漁に出てきた小船が、近づく大船を見て慌てて湊へ戻った。
先導する周防水軍の小早はゆったりと大野瀬戸の中央を進む。ここまで来ても源氏方の船には行き合わない。
「船所殿、もう少し、大野浦に近づけぬか」
「教経様、全て舵取りの与平治に任せてあります。船を損ないたくなければ与平治に従ってください」
その時、帆柱の上の見張りから声が掛かった。
「葦原の中に源氏方の陣が見えます」
教経らの乗る大船の船上からも大野浦の湊を過ぎた前方に、二つ河口に囲まれて茫洋として半ば枯れた葦原の中州が広がり、その中を何本もの水路が巡っているのが見て取れた。
だが、源氏方が陣を構えた辺りは葦原の陰に隠れ、船上からはよく見えない。教経の脇で大野浦の様子を見ていた国栄が怒ったような声で言った。
「源氏の将は一体何を考えておるのだ。葦原に隠れた積もりだろう

が、枯れ葦に火を放たれれば、兵の逃場はなくなる。そんな事も思い浮かばぬのか」
再び、帆柱の上の見張りから声が降りてきた。
「源氏の陣は岸より四町（４００ｍ）は奥まった所にあります。船からは六町（６００ｍ）も離れています」
その声を聞いた伊藤景清が船所に尋ねた。
「戦船ならば、あとどれほど浜に近づけますかな」
「あと一町（１００ｍ）ほどなら近づけるかと」
「うーむ、大連弩でぎりぎり届くかどうかの所か。火矢攻撃なら問題にならぬ距離だ」
その頃になり、ようやく枯れ葦の陰より三艘の小早が漕ぎ出してきた。源氏方がようやく、この戦船に気付いたようだ。各小早には弓矢を持ち水軍鎧に身を包んだ兵が十名ほど乗っている。
左舷から迫る源氏方の小早とは二町（２００ｍ）ほど距離がある。教経は舵取りの弥三郎に命じた。
「今日は戦にしたくはない。この場より立ち去るぞ」
「僅かに追風があります。二枚帆を揚げれば大丈夫です」
弥三郎は帆柱の上の見張りを降ろし二枚帆を揚げた。その間に謝国栄は連弩の射手に矢の仕度を命じた。
「そこの怪しげな大船、止まれ。何処の船だ。名乗れ」
左舷から迫る源氏方の小早の船上から、誰何する声が聞こえた。小早からの声が聞こえたのか、大野浦の葦原の中からも兵が現れて見慣れぬ大船を見た。
先導する周防水軍の小早は櫂を漕ぐ調子を上げて船足を速めると、中央の水路から厳島よりに航路を取った。
大船の水手も櫂を漕ぐ手に力を込めるが、船足は急には上がらない。だが、前後二枚の帆が上手く風を捕らえると、大船の船足も一気に上がった。
先導する周防水軍の小早を追い抜くと、源氏の小早を置き去りにして、大野瀬戸の中央水路を勢いよく進んだ。

岩国の湊に戻った平教経、謝国栄、伊藤景清の三人は、知盛が本陣を進めた玖波（広島県大竹市）へ馬を駆けさせた。
御園（広島県大竹市）を過ぎた辺りで、山陽道軍の最後尾を進む緒方惟栄が率いる豊後勢に追いついた。
「総大将知盛様の命で大野浦の敵陣を探り戻る所。道を通してもらう」
三人は豊後勢を掻き分けるように進んだ。豊後勢を抜けると、次は清宗が率いる平家本軍の勢が満ちて前を塞いだ。ようやく、教経ら三人が玖波の知盛の本陣へ入ったのは申の刻（午後四時）を過ぎた頃だ。
早速、教経が大野浦の源氏の陣の様子を説明した。
「地形を聞くに、中々に攻め難い場所のようだ。この辺りに詳しい佐伯景弘の策か」
知盛は難しい顔で考え込んだが、教経は続けて言った。
「ですが、国栄殿が源氏方の陣の弱点を指摘しました。今の時期、葦は半ば枯れ、この枯れ葦に火を放てば・・・・」
「火攻めか。それが一番有効な方法か。中にこもる源氏の兵には辛い戦だ。風向きを見計らって火矢を射込む。水軍には海側で待受けてもらう。水軍の仕度は何時出来る」
「明朝にも」

二十六日未明、先導する周防水軍の戦船が艫に点す松明の明りを頼りに、平家水軍の三百艘の戦船が岩国の湊より出航した。
松浦水軍百艘、山鹿水軍百艘、豊後、周防水軍が百艘の計三百艘だ。船団の中に二本柱を高くそびえる宋船が一艘混じっているが、その宋船は水軍の総大将平教経が乗る船だ。
「ここで、攻撃開始の狼煙を待つ」
岩国の湊を出た平家水軍は右手に厳島の島影が見える、大野瀬戸に突入する直前で待機に入った。

陸上の方では、既に夜半を過ぎた頃より平家の山陽道軍の軍勢が動き出していた。
大野浦の毛保川と中津岡川に挟まれた葦原を大きく迂回し、源氏方の陣を包囲するように陣を構える。
周防の宇佐木高遠の兵が松明を持って先導した。
長門の岩国金秀の騎馬五百、徒歩二千と惟宗忠信が率いる大隈、薩摩の騎馬千、徒歩三千は毛保川と中津岡川を渡り、中津岡川の右岸に陣を構えた。
毛保川の左岸には菊地隆直の肥後勢が騎馬二千、徒歩三千で、緒方惟栄の豊後勢が騎馬二千、徒歩三千で陣を構えた。
平清宗は侍大将の伊藤景高、景経とともに騎馬千、徒歩二千で大野浦の湊に陣を構えた。
大野浦の湊は山陽道を通り、厳島神社へ参拝する者が厳島へ渡る湊。参拝者相手に飲食を供する店や土産物を売る店、妓楼などの町屋が何軒も立ち並び、その外れには板葺きの小屋のような漁師の家が何十軒か密集していた。
だが、湊から二町（２００ｍ）も離れると田、畑の先に雑木林や荒地が拡がり、その向こうは源氏が陣を構える毛保川と中津岡川に挟まれた葦の原だ。
知盛は清宗の陣の脇に本陣を置き、侍大将の伊藤景家が率いる三百基の大連弩とその護衛の徒歩五百、伊藤景清の五百の騎馬に護られていた。
五百の連弩隊は謝国栄に任され、大野浦へ向かう山鹿水軍の戦船に乗り込んだ。
朝日が昇る頃、海から陸に向かって緩やかな風が吹き抜けていたが、何時、風向きが変わるか見当は付かない。
平家の各陣では火矢の仕度も整い、風向きの変わるのを今か今かと待っていた。大野浦の湊近くに陣を構えた清宗はじりじりと、脇の知盛の本陣の方を見ていた。
「景高、本陣からの合図はまだか。風向きは変わらぬか」

平家の火矢攻撃は知盛の本陣よりの合図で開始する事になっていた。
清宗は今まで父宗盛の下で安徳天皇の行在所である博多の筥崎宮(はこざきぐう)の警護に付き、一隊を率いる大将として出陣したのは始めてだ。
手柄を立てたいとの思いが強く、床机に座らず、幔幕の中を落着きなく歩き回っていた。
「清宗様、今日は火矢を射込むだけの戦。落ち着いて本陣からの合図を待ちましょう」
伊藤景高は父宗盛が信頼する郎党で、清宗の事を心配した父宗盛が侍大将として清宗に付けた。

「安芸厳島《あきいつくしま》の合戦」　その２

「安芸厳島（あきいつくしま）の合戦」　その２

大野浦の葦原の中に構えた源氏方の陣も、ひっそりと動きもない。
「佐伯殿、平家の者らは我らが陣を取り囲んだようだが、何の動きも見せぬな。どうしたのであろう」
「きっと、攻め口が見出せず、困惑しておるのではないか」
佐伯景弘は備前の難波利房（なんばとしふさ）、備中の妹尾兼康（せのうかねやす）、備後の東條直昭（とうじょうなおあき）らの諸将を前に自信たっぷりに言切った。
平家の軍勢はこの三日ほど前に、大野浦に程近い玖波（くば）（広島県大竹市）に進出して来た事が知らされ、前日には物見の船が大野浦を窺う不審な大船を発見して追跡したとの知らせがあった。
既に、佐伯景弘は集まった八千の軍勢の半数以上を、葦原を通る水路に点在する十数箇所の浮島に配し、平家の軍勢が葦原の中に入り込むのを待ち構えていた。

朝日が高く昇り、霧や靄もなく海上からも大野浦の状況がはっきりと見通せた。
教経は宋船の帆柱に深紅の旗を掲げ、大野瀬戸の手前で待機していた戦船の船団に進出を命じた。
山鹿水軍と豊後、周防水軍の計二百艘の戦船は大野浦の海岸線より一町（１００ｍ）ほどの海上で、厳島との間を遮断するように大きく縦に展開した。山鹿水軍の戦船には五百の連弩隊が分乗していた。
又、松浦水軍の百艘の戦船は厳島に残る佐伯の兵が大野瀬戸に展開した山鹿水軍と豊後、周防水軍の背後を衝かぬよう長浜の湊を封鎖した。
教経が乗る宋船は大野瀬戸の中央に進む、高さ七間（１３ｍ）の帆柱に見張りを昇らせ、源氏方の様子を探らせ、烽火の合図をこちら

も待ち構えた。
卯の刻（午前６時）前、海上から陸へ吹く風が止まった。
「景清、風が止んだ。今だ、烽火を上げよ」
大野浦の湊に置かれた知盛の本陣では、待構えた侍大将の伊藤景清が烽火台に火を移すと、朝日の中に白い煙が立ち上った。
それを合図に大野浦を包囲した平家の各陣より、源氏が陣を構える葦原の中に一斉に火矢が射込まれ、清清しい朝空を火矢が覆い、枯れ葦の野に落ちて行く。
清宗の陣でも、烽火を見た清宗が「火矢を射ろ、火矢を射続けよ」と大声で命じた。
「ザ、ザ、ザザー」
数千以上の火矢が何度も枯れた葦原に射込また。葦原のそこここで小さな火が燃え上がり、半ば枯れた葦が白煙を上げると、枯れ葦が燃え上がる白煙が徐々に大野浦一帯に広がった。
大野浦の葦原の中の浮島に陣を構えた源氏の兵はこの火矢の攻撃に白煙に巻かれる前に陣を逃出そうとした。
「平家の勢はこの葦原を焼き払おうと火矢を射込んできた。このままでは、焼死ぬぞ」
備後の東條直昭が佐伯景弘に詰め寄った。
「一戦もせずに逃げ出すつもりか」
佐伯は強気に東條へ言ったが、周囲の浮島に配置した兵らの間から「逃げろ、早く逃げないと煙に巻かれる」「早く船で逃げ出すぞ」の声が聞こると、慌てて水軍の船を呼んだ。
「我らも一先ず海上に逃れよう」
佐伯景弘、東條直弘らの将が真っ先に葦原の中の陣より逃げ出すと、残された兵らも、弓矢や楯など邪魔になる武具を置き去りにして逃げ出した。
「煙に追われるように何艘もの小早が葦原の中より逃げ出してきます」

高さ七間（１３ｍ）の帆柱に上がった見張りが矢倉の前に立つ教経に大声で知らせた。
「山鹿や豊後、周防の者に知らせ、矢戦を命じろ」
教経が命じると帆柱に矢戦を告げる一枚の「黒い旗」が揚げられた。
宋船の矢倉から太鼓が打ち鳴らされ、山鹿水軍や豊後、周防の戦船が舷側の楯の陰で矢戦の仕度を始めた。
葦原の間から鎧兜に身を固めた源氏の将を乗せた小早を先頭に数十艘の船が姿を見せた。
最初の矢は山鹿時貞（やまがときさだ）の船に乗った謝国栄の命で連弩が放った矢だ。
その矢を合図に山鹿水軍の他の船からも連弩の矢が放たれた。
葦原の間から姿を現した源氏方の船までの一町半（１５０ｍ）は連弩にとっては射程の内。
五百基の連弩から放たれた矢が続けて源氏方の船を襲った。
連弩の矢は楯を突き破り、鎧を射抜き、源氏方の将兵は「ギャ」「ウァ」と悲鳴を上げ、船内に倒れこむ者、海中に崩れ落ちる者など続出した。
佐伯景弘、東條直弘の二人に遅れて船に乗った備前の難波利房は、佐伯、東條らの惨状を見ると海から厳島へ逃れるのを諦めた。
「海上には平家の船が待ち構えておる。湊の方へ向え」
難波利房は船を大野浦の湊へ向かわせると、後続する船も難波の船に従い葦原の中の水路を大野浦の湊に向かった。

「景高、今回も教経の水軍だけが目立っておるぞ。我らも戦らしい戦をしたいぞ」
「清宗様、我らは京を目指しております。ここはまだ安芸、焦らずともこれから何度も手柄を立てる機会は廻ってまいります」
清宗の陣では既に兵らは火矢を葦原へ射込むのをやめ、水軍の矢戦見物に廻っていた。
その為、後方への注意が疎かとなり、葦原の水路から近づく源氏方の船に気付いた者はいなかった。

突然、「敵だ、源氏の勢だ」の声が清宗の陣内で上がった時には、難波利房以下の五百ほどの兵は二町（２００ｍ）ほどまでに近づいていた。

「則宗、正清、殿の廻りを固めろ」

清宗は赤糸縅の鎧兜を着け、青鹿毛の馬に跨り難波利房の勢に向おうとした。

伊藤景高は清宗の馬の手綱を押さえ、清宗の郎党の長田則宗（おさだのりむね）、正清（まさきよ）兄弟を呼び、清宗の廻りに騎馬武者を集めた。

「徒歩の者弓兵を取れ、矢だ、矢を放て。則宗は突撃だ」

景高は難波勢の突進の勢いを止める矢を命じ、長田則宗は騎馬武者を率いて難波勢へ向かった。

難波勢は徒歩ばかりで、騎馬武者に突入されれば勝機はない。

難波利房は先頭に出ると、大太刀を抜いて平家の騎馬武者を待ちうけた。清宗の郎党長田則宗は大太刀を構える難波利房に馬上より長刀を振り下ろした。

「ガッツン」

鈍い手応えが手に残った。長田則宗が振るった長刀は馬の勢いで難波利房の大太刀を弾き、利房の兜首を斬り落とした。

難波利房が長田則宗の一撃に倒されると、兵らはその場に太刀や長刀を置いて降伏した。

戦船が並ぶ海上でも、凄まじい連弩の攻撃を見た源氏の兵は太刀を置き、船の櫂を外して降伏した。

その後も葦原の中より煙に巻かれて咳き込んだ兵が十人、二十人とまとまって現れては、平家の陣へ降伏した。

結局、二十六日未明の平家の包囲より二刻（４時間）過ぎた辰の刻半ば（午前１０時）には三千ほどの源氏の兵が降伏して戦は終わったが、源氏方の将、佐伯景弘、妹尾兼康、東條直昭らの生死は不明であった。

僅か二刻（４時間）の戦で大野浦に陣を構えた源氏方に勝利を得た

山陽道軍の総大将平知盛は、博多にある兄宗盛に戦勝を知らせるとともに、二十六日夕刻までに大野浦の湊への全軍集合を命じた。
松浦水軍の将松浦正は戦の最中、厳島にある長浜の湊に兵を満載した十艘の戦船で乗り付け、水軍鎧で戦仕度をした百名の兵を率いて厳島神社の神殿を訪れた。
「征東軍総大将中納言平知盛様の使い、肥前松浦の松浦正だ。宮司殿とお会いしたい」
松浦正は厳しい顔で、出てきた年配の神職に告げた。
「知盛様のお使いの松浦殿ですか。我が当宮の大宮司をつとめる佐伯経景じゃ。甥、景弘の無礼をお許し下され」
白髪に白髭の大宮司佐伯経景は源氏方で戦う佐伯景弘の伯父だと名乗った。
「知盛様は平家の守り神である厳島神社において、明日にも征東軍の戦勝祈願を執り行いたいと言われておる。用意をお願いしたい」
元々、厳島神社は平家の守り神として知盛の父清盛が信仰し、神殿や社領など莫大な寄進を受けていた。大宮司の佐伯経景に否応はなかった。
翌二十七日の朝、強い風が瀬戸の海を吹き抜ける中、知盛を始めとする主だった山陽道軍の将が狩衣姿に太刀を佩き、厳島神社へ現れた。
大宮司を務める佐伯経景は赤袍、紫袴の正装に身を包み、白袍に緋袴の宮司、巫女を引き連れて鳥居の所まで出迎えに出た。
知盛に続いたのは宗盛の息子の清宗、清宗の侍大将の伊藤景高、景経、知盛の侍大将伊藤景家、景清、周防の宇佐木高遠、長門の岩国金秀、薩摩の惟宗忠信、肥後の菊地隆直、豊後の緒方惟栄、水軍からは平教経、松浦水軍の松浦正、山鹿水軍の山鹿時貞、豊後水軍の臼杵雅幸、周防水軍の船所正利などだ。
大宮司佐伯経景の読み上げる祝詞の声が神殿に流れ、続いて額ずいた山陽道軍の将に土器が渡され、注がれたお神酒を全員が飲み干し、儀式は終了した。

厳島神社より知盛一行が大野浦の湊の本陣へ戻ったのは未の刻（ひつじのこく）（午後2時）を過ぎた頃。
知盛は早速本陣で次の目的地を告げた。
「京へ潜ませた者よりは、坂東からの源氏の援勢が間もなく到着すると知らせて参った。現在は、摂津、山城、大和、近江などの畿内の将兵を集めた源義経が鳥羽口、丹波口を八千の兵で固めているとのこと。我らは、坂東よりの援勢が到着する前に備後、備中、備前を抜き、美作（岡山県東北部）、播磨（兵庫県）へ進出する」
「坂東よりの源氏の兵はどの位ですか」
「五万の兵と号しおるそうだ。総大将は義経の兄の源全成だとか」
五万の兵と聞いて薩摩の惟宗忠信、肥後の菊地隆直、豊後の緒方惟栄らの間には緊張が流れた。
「源氏も五万だが、我らも総勢五万と称しておる」
知盛の一言で各将の間に漂った緊張は解れた。
「前衛は備中の妹尾兼高（せのうかねたか）に命じる。その他の者はこれまでと同じ順だ。先ずは備前の児島（倉敷市）を目指す」
妹尾兼高は兄の兼康（かねやす）とともに大野浦の陣に出陣したが、佐伯景弘の葦原の中の浮島に陣を構える策に疑念を持ち、ただ一人五十騎の武者と五百の兵を率いて大野浦の湊近くに陣を構えた。
しかし、平家の山陽道軍が大野浦へ進んだ時、その圧倒的兵力の前に戦わずに降伏した。

備前の児島は山陽道沿いにある海上に島が点在する湊で、水軍の大船団が風除けするのにも適した湊だ。各将は自陣へ戻り、出陣の用意を始めた。
大野浦の湊でも、松浦、山鹿、豊後、周防水軍の各戦船が出航の用意を始めた。
「教経殿、海は荒れ始めております。出航するならば急いだほうがよいと、舵取りの与平次が言っておりますぞ」

この辺りの海をよく知る周防水軍の船所正利の知らせで、教経は急ぎの出航を命じた。
二十八日も天候はおおいに荒れた。瀬戸の海は強風に叩きつけられる雨が海面を打ち、二間（3，6m）もの高さの大波が押寄せた。平家水軍の戦船は昼前には上蒲刈島、大崎下島、大三島、大崎上島などの湊に入り、強風と大波を避けた。
山陽道を進む平家の山陽道軍も吹きつける強風、横殴りに降る雨、ぬかるんだ道により行軍は足止めされた。
前衛の妹尾兼高は安芸の西條（広島県東広島市）へ進んだが、最後尾の緒方惟栄が率いる豊後勢は大野浦の湊にいた。
翌二十九日も荒れた天候は収まらず、平家の山陽道軍は安芸の国に留まったままだ。

悪天候のおかげで宋船が源氏方に強奪されたとの彦島の湯浅重徳からの知らせを乗せた戦船は途中の三田尻の湊で停泊したままで、騎馬で山陽道を進んだ城田太十郎（しろたたじゅうろう）が安芸の府中（広島県安芸郡）の知盛の本陣へ知らせを持参したのは二十九日の早朝だった。
城田は三頭の替え馬を引き、雨天も深夜も休む事無く走り続け、ようやく知盛の本陣へたどり着いた。
城田は知盛に湯浅よりの文を手渡すと、その場に崩れるように倒れた。
「陣屋の中で介抱してやれ」
知盛は脇に控えた郎党の神崎十太夫に命じると、湯浅からの文に目を通すと、顔色を変えた。
「悪い知らせですか」
侍大将の伊藤景清が尋ねた。
「詳細は文に書いてある。二十五日の晩遅く、彦島の福浦を偽装した三艘の荷船に乗った源氏の勢が襲い、停泊していた三艘の宋船のうち二艘を強奪し、一艘は焼き払い逃走したと知らせてきた」
知盛は湯浅からの文を伊藤景清に手渡した。

「源氏の兵は日本海側から来たか。追っ手の船を出したと書いてあるが、この数日の海の荒れようでは見つかるまい」
「襲った兵は熊野水軍の熊野湛増の手の者だが、源義経も一緒にいたとありますな」
知盛は暫く無言で考え込んでいたが、水軍の教経と謝国栄に清宗と伊藤景高を本陣へ集めるよう景清に命じた。
知盛は四人が揃った処で、二十五日の夜半に彦島から二艘宋船が源氏方に強奪された事を告げた。
教経と清宗、伊藤景高の三人は直ぐにも追跡の船を出すと言ったが、謝国栄は違った。
「宋船の行先が紀伊の田辺周辺と判っているのに何故追跡の船を出すので。必要ならば田辺を襲えばよいことです。それより、源氏の奇襲を心配した宗盛様が博多で何かを仕出かさないかの方が心配です。山陰道軍の支援に向った阿波の田口らは因幡の鳥取を過ぎたら彦島に戻る事になっておりますので、その船を博多に向わせ警護にあたらせるよう命じてください」
「盗まれた二艘の宋船より博多の方が心配か。判った、我らはこのまま備前に兵を進める。資盛へもこの事を知らせよ」

「大輪田泊《おおわだとまり》への上陸」　その１

「大輪田泊への上陸」　その１

十月二十九日、晩秋の冷たい比叡降ろしが吹き付ける中、坂東から上京した源氏の平家討伐の軍勢が瀬田の唐橋を渡り京へ入った。先陣をつとめるのは相模の梶原景時、土肥実平、和田義盛、田代信綱、三浦義連ら一万の勢。

騎乗の武者は赤糸縅、黒糸縅、黄糸縅など色取り取りの鎧兜を身に着け、腰には太刀を吊るしていた。徒歩は胴丸に腰には太刀を佩び、手には弓をもっていた。

中陣は甲斐の安田義定、北条義時、武蔵の熊谷直実、比企能高、畠山重忠の一万五千の勢。中央には頼朝より拝領した黒鹿毛の初月に跨った黒糸縅の鎧兜姿の総大将の源全成が胸を張って進んでいた。

後陣は下野の足利義兼、小山信惟、下総の千葉常胤、結城朝充、駿河の勝間田平蔵、尾張の大屋安資、美濃の泉重光など一万五千の勢。

唐橋を渡りきった処に、京の丹波、鳥羽口で警護にあたる近江の安達清経、佐々木定綱、山城の後藤新兵衛、河内の石川義賢、摂津の渡辺広綱が、夫々の郎党をとともに待ち構えていた。

「ご苦労であった」

討伐軍の軍監梶原景時は馬上より出迎えの将の顔を見回し、義経の姿が無い事に気付いた景時は機嫌の悪い声で尋ねた。

「義経殿は総大将の全成殿の出迎えに何故来ぬのだ」

「義経殿は自ら平家の動きを探りに出ております」

摂津渡辺党の渡辺広綱が答えた。

「又、勝手に動き回っておるのか。我らが十月末には京に入る事は前もって知らせてあったはず。いつ頃、戻る」

「間もなく京へ戻ると思いますが、はっきりした事は」

「我らは明朝、六条西洞院の白河院へ挨拶に向い、その後に六条館

において戦評定を行う。そなたらも、戦評定に出るようにとの全成殿の命だ」
平家討伐軍の総大将をつとめる源全成は義経と同じ常葉御前が母で、義経より七歳年上の兄だ。京の醍醐寺において出家していたが、兄の頼朝が治承四年（１１８０年）に伊豆で平家打倒の兵を挙げると、京を抜け出して兄頼朝の下へ合流した。
この全成の合流が源氏一門の頼朝の下への最初の合流で、頼朝は全成の合流を非常に喜んだ。全成はこれまでも兄頼朝に、平家との戦に出陣する事を願っていた。しかし、頼朝は全成の僧からの還俗の許しを与えなかった。だが、平家討伐軍を率いて一手の大将とつとめた範頼が討死したことで、全成に出陣の応諾を与えた。

翌三十日、源全成は黒糸縅の鎧兜に身を包み初月に跨り、院庁の置かれた六条西洞院へ向った。付従うのは梶原景時、土肥実平、和田義盛、田代信綱、三浦義連、安田義定、北条義時、熊谷直実、比企能高、畠山重忠、足利義兼、小山信惟、千葉常胤、結城朝充、勝間田平蔵、大屋安資、泉重光らの将。
皆、赤糸縅、黄糸縅、白糸縅など色取り取りの鎧兜を着け、太刀を佩き馬に跨った。
一行の中には後白河院に拝謁出来る五位以上の官位を持つ者は誰もいない。だが、院宣を受けての出陣であるので側近の大蔵卿高階泰経（おおくらきょうたかしなやすのり）、蔵人藤原光能（くらんどふじわらみつのり）、蔵人葉室光雅（くらんどはむろみつまさ）の三人を従えた後白川院は御簾の奥より一同が控える庭園に面した寝殿の前に出た。
「必ず、平家を討伐し、三種の神器をこの京へ持ち帰るよう」
後白河院の意を受けた大蔵卿高階泰経が源全成ら一同に告げた。
院の拝謁は僅かな時で終わり六条の館に戻ると、安達清経、佐々木定綱、後藤新兵衛、石川義賢、渡辺広綱とともに義経も郎党の武蔵坊弁慶、佐藤継信、鎌田盛正、伊勢義盛、鷲尾義久、亀井重清らを引連れて待っていた。
「西国筋で平家の様子を探り昨日戻って参った。瀬田には出迎えに

行けず、失礼した」
「相変わらず勝手に動き回っているようだな。だが、討伐軍の総大将は全成殿だ。本日よりは勝手な動きは謹んでもらう」
梶原景時は壇ノ浦で受けた矢傷により引き摺るようになった左足で、板の間の大広間に入った。
そこには既に二十人以上の将が板の間に置かれた円座の上に座り待っていた。一段高い間に総大将の源全成が座り、軍監の梶原景時はその直ぐ下に座った。
「これより戦評定を行う。平家は山陽道、山陰道の二道に別れ京に向っておる。我らも軍勢を二手に分け平家を討つ」
梶原が一同に向って言った時、義経がその梶原の言葉を遮った。
「我らは院宣を受け院より京の街の警護を命じられており、京を離れる訳にはいきません。安達殿や佐々木殿らも同様です」
「義経殿は討伐軍の総大将全成殿の命には、従わぬと言われるか」
梶原景時は顔を紅潮させて言った。
「鎌倉殿よりも平家討伐は命じられておる。我らは既に京の警護の為、山陰道を進む敵に対しては大江の関に陣を構え、山陽道から来る敵には鳥羽口に陣を構えておる。我らはこの山陰道を来る平家に対し、大江の関より陣を進めて当たるので、全成殿が率いてきた平家討伐軍は山陽道を進む平家勢に当たればよいではないか」
「義経殿は壇ノ浦の戦後もこの畿内にあり、西国筋を進み平家の様子を探ってきたとか。山陰道、山陽道を進む平家の勢がいかほどかご存知ですか」
畠山重忠が親しげな口調で義経に尋ねた。
「平家の山陰道軍は平資盛を総大将として一万二千の兵があり、水軍は二百艘の戦船を持っております。二十五日には石見の江津(えつ)において石見、出雲、伯耆、因幡の源氏に与力する長田、藤原、益田、厚東らの勢を撃ち破り、山陰道を進んでおります。一方、山陽道軍は征東都督(せいとうとと)に任じられた平知盛を総大将とし二万の兵、水軍は三百艘以上の戦船で安芸、備後辺りまで進出していると聞いておる」

「安芸の佐伯や備前の難波、備中の妹尾など、山陽道筋で源氏に与力する者も多い。その者らはどうしておる」
「安芸の厳島付近で陣を築き、平家の勢を押しとどめようとしたが、二十六日にあっけなく破られたと聞いた」
「知盛が率いる山陽道家の軍勢は二万というのは真か」
「二十五、六日頃、安芸の厳島付近で戦った時はその位の人数と聞いたが」
義経より平家の山陽道軍が二万と聞いた総大将の全成は上段の間から言った。
「山陽道軍は我らで引き受ける。山陰道の軍勢はそなたら任せる」
軍監の梶原景時もその全成に同意し、集まった将は六条館より各自の陣へ戻った。
義経も安達清経、佐々木定綱、後藤新兵衛、石川義賢、渡辺広綱とともに鳥羽口にある安楽寿院へ戻った。

畠山重忠、土肥実平、熊谷直実の三人は殆どの将が引上げ、静かになった六条館で軍監の梶原の下を訪れた。
「梶原殿、義経殿らの勢だけに平家の山陰道軍を任せるお積りか」
「あの席で、義経自らが言ったのだぞ」
「義経殿の軍勢だけで平家の山陰道軍を退ければ、それは義経殿の手柄。もし、義経殿らの軍勢が破れ、平家の軍勢が京に乱入すれば総大将の全成殿や軍監の梶原殿の責となりますぞ。我らが義経殿の軍勢に加われば、平家の山陰道軍とはほぼ同数、負ける事はありますまい。又、勝てば総大将の全成殿、軍監の梶原殿の手柄にもなりますぞ」
畠山ら三人が率いる勢は四千。この四千の勢が抜けても二万の平家の山陽道軍に対し、全成が率いる軍勢は三万六千と充分優位だ。梶原は畠山ら三人が義経の軍勢に加わることを認めた。
安楽寿院の本陣で安達清経、佐々木定綱、後藤新兵衛、石川義賢、渡辺広綱に対し義経が命じた。

「この鳥羽口の勢をまとめ丹波へ兵を集め、平家の山陰道軍を撃ち破る。早急に丹波へ移る仕度をいたせ」
義経の命で鳥羽口に陣を構えた石川義賢と渡辺広綱が丹波への移動の仕度を始めた時、畠山重忠、土肥実平、熊谷直実の三人が鳥羽口の陣を訪れた。
「我ら三名は、義経殿の下で平家の山陰道軍と戦う事になりました。戦の事を何も知らぬ全成殿の下より、義経殿の方が随分と面白い戦が出来そう」
「よく、あの梶原が許したな。平家の軍勢は壇ノ浦や葦屋浦の戦の時より連弩を多数装備した。一度、連弩と戦った事のある三人が加わってくれるのは助かる」
「接近戦に持ち込めば連弩は使えぬ事は分かっております。丹波の山中での戦であれば、騎馬の進退さえ上手く行えば、平家に接近戦を挑めます。義経殿もそれを承知で山陰道に廻った筈」
畠山重忠の言葉に義経は大きく肯いた。
「我らは大江の関を下り、山陰道を亀山（亀岡市）へ進み平家を待ち受ける。既に、数多くの物見を放ってあるので、平家の動きも知れよう」

十一月十日、征東都督（せいとうとと く）平知盛を総大将とする平家の山陽道軍は摂津の福原（神戸市中央区、兵庫区）にある大輪田泊から続々と上陸を開始した。
この十日以上も前、安芸の府中（広島県安芸郡）において、悪天候で京への進軍を足止めされた総大将の平知盛は本陣に水軍の総大将平教経、謝国栄を呼んだ。
「この悪天候はまだ続くと水軍の船所は言っておる。これだけの雨が降れば山陽道は泥濘と化し、雨が上がっても直ぐに進軍するのは無理だ。坂東よりの源氏の援勢が京へ向かっていると聞こえくる。我らも一刻も早く、京へ向かいたい。水軍の船で兵を運べぬか」
「半日や一日ほどの場所であれば、水軍の宋船二十艘、大船四十艘、

戦船三百艘だけで万近くの将兵を運べます。しかし、播磨や摂津辺りまで兵を運ぶのであれば、兵糧や弓矢、楯、鎧兜などの武具、馬なども運ばねばなりません。今の船数では全てを運ぶことは出来ません」

「やはり、無理か。国栄殿でもどうにもならぬか」

「今の水軍は各地から船や水手、兵を集めておりますが、集まっているのは各水軍の半数にも達しません。兵や荷駄を運ぶだけであれば、船と水手、舵取りいればよい事。阿波や讃岐、土佐、三島、因島など瀬戸内の各地より戦船だけでなく、荷船や小早の類までかき集めれば、二千艘は下らぬはず。それだけの船が集まれば、全ての兵を運べます」

早速、知盛は謝国栄に船集めを命じた。

国栄は周防水軍の船所正利よりこの辺りの海をよく知る舵取りの与平治を借り受け、悪天候の中を宋船で瀬戸内の海へ乗出した。

宋船の水手、舵取りは玄界灘や日本海の大荒れに何度も遭遇しながら宋との交易を行った事のある者ばかりだ。

与平治の指示で航路を定め、大三島から因島、塩飽島など瀬戸内の島々から四国の阿波、讃岐、土佐を廻り、各地の水軍の将に天候が落ち着き次第、安芸の下蒲刈（しもかまがり）（広島県呉市）へ船を集めるよう命じた。

知盛が兵の上陸を目指したのは、摂津は福原（神戸市中央区、兵庫区）の地。

父清盛が雪見御所や萱の御所など一族の屋敷を集め栄華を誇り、一時は京より遷都を強行した地だが平家が都落ちをした後、木曾義仲によって焼き払われ見る影もなくなった。

だが、父清盛が宋との交易船が百艘以上も停泊出来る湊として築いた大輪田泊は健在で、大軍を上陸させるには適していた。

十一月八日の朝、和田岬（神戸市中央区）を越えて大輪田泊の沖合に大きな白帆が幾つも現われた。

征東都督（せいとうとと）平知盛を総大将とする平家の山陽道軍を運ぶ平家水軍の先陣をきる大船四十艘、宋船二十艘の船団だ。
大船は前後に二本の帆柱を持つ長さ二十間（３６ｍ）、幅四間（７．２ｍ）の船で、一艘に百人以上の兵が乗込む。宋船は大船よりも一回り大きく、長さが三十間（５４ｍ）、幅は六間（１１ｍ）の船で、前後に二本の帆柱を持ち、船首には龍の飾り物が施され一艘に二百人以上の兵が乗込む。

源氏方は既に二日前の十一月六日に相模の梶原景時、和田義盛、田代信綱、三浦義連らの八千の先陣が生田川の手前まで進出した。
梶原らは前年の「一の谷の合戦」に倣い、逆茂木や楯を巡らした陣を築き、後続の進出を待っていた。
「源氏は浜辺で待ち構えている。最初の上陸は連弩隊だ」
大輪田泊に布陣した源氏を宋船の矢倉の前より眺めた水軍の総大将平教経が命じた。
宋船と大船より降ろされた艀に、知盛の侍大将伊藤景清が率いる半間（９０ｃｍ）の連弩を抱えた五百の連弩兵が乗込んだ。
「坂東よりの五万と号する源氏の軍が京に入ったと聞いたが、この大輪田泊へ進出した兵は随分と少ないな」
「教経殿、京へ入ったのは将兵のみだったとか。兵糧や武具などを運ぶ荷駄隊は悪天候により美濃の関が原辺りで足止めされ、京へ入るのが遅れたとか」
「それで、あのように兵の数が少ないか。あの程度の兵ならば、我ら水軍だけで蹴散らしてくれるわ」
教経の命で艀を下ろした宋船、大船は浜に布陣する源氏の兵に連弩の矢を射込むべく、大輪田泊の浜に一町（１００ｍ）ほどまで近づくと、一斉に連弩より矢を射放った。
「楯の後へ入れ」「逃げるな」
大輪田泊の浜に楯を並べ、弓矢を構えた兵に和田義盛の侍大将、佐々木正則（ささきまさのり）が大声で命じた。

「こちらの矢が届く前に、連弩の矢で一方的に攻撃されては、兵の士気が保てません」
「だが、平家を楽々と上陸させるわけには行かぬ。もう暫く、耐えさせろ」
だが、宋船や大船からの連弩の攻撃だけでなく、楯を舷側に並べた数十艘の艀が浜に近づき、その艀からも連弩の矢が源氏の陣へ射込まれた。
連弩の矢は楯を射割り、その背後に隠れた徒歩の胴丸を突き抜けた。
「ギャー」
鎧から血を流し、徒歩は倒れた。同じ光景が大輪田泊の浜に築いた源氏の陣一体に広がった。
楯は連弩の矢に割られ、その後では矢を受け、手足や胸や背から血を流して倒れる徒歩は数百以上に上った。
「義盛様、このままでは我が兵は壊滅します。早々にこの場を引きましょう」
侍大将の佐々木正則は蒼白な顔で和田義盛に告げた。
「正則、分かった。このままでは、葦屋浦の時よりも酷い事になる。生田川まで引く、田代へも伝えよ」
佐々木は低い姿勢で砂浜を這うように、和田義盛と陣を並べた田代信綱の陣へ駆けつけ義盛の言葉を告げた。
田代の陣へ降り注ぐ連弩の矢数は、義盛の陣よりも多く、徒歩の犠牲は既に千近くに及んでいた。
「我らの陣はこのままでは壊滅する。先に陣を引くと義盛殿へ告げてくれ」
田代信綱は無念そうな顔で佐々木に告げ、早くも陣を引き始めた。
「連弩隊の攻撃で浜が空いた。続けて、先陣の清宗殿の隊を上陸させろ」
教経の命で、大船より清宗の侍大将伊藤景高、景経が騎馬千、徒歩二千の兵を率いて艀に乗り移り、大輪田泊へ向った。

先陣の清宗の隊は侍大将伊藤景清の連弩隊と共に湊川まで進み、後続する平家の軍勢の上陸を助ける事にあった。
先に上陸した景清の連弩隊は波打ち際に艀を並べて楯とし、連弩を構え源氏勢に備えていた。
「徒歩の者は弓矢と楯を持ち、前に進め」
伊藤景高は五百の徒歩を率いて五町（５００ｍ）ほど先にある湊川の河岸まで進み、楯を並べた。その後方より景清の連弩隊が続いた。
「源氏の兵が押寄せたなら、矢で応酬する」
伊藤景高は手に持った折れ弓で、徒歩を指図して陣を築いた。
平家の山陽道軍が大輪田泊へ上陸を開始してから二刻（４時間）後、全ての兵を上陸させた大船四十艘、宋船二十艘の船団は大輪田泊から生田川の沖合いまでを遊弋し、生田川に陣を構える源氏の軍勢を牽制し、源氏方の熊野水軍や渡辺水軍の攻撃に備えた。

「大輪田泊《おおわだとまり》への上陸」　その２

「大輪田泊（おおわだとまり）への上陸」　その２

翌九日早朝より、阿波や讃岐、土佐、三島、因島など瀬戸内の各地より謝国栄がかき集めた船が続々と大輪田泊へ入航した。

長さ十二（２１ｍ）～十間（１８ｍ）、幅二間半（４．５ｍ）～三間（５．４ｍ）の戦船から長さ八間（１０ｍ）、幅二間（３．６ｍ）の小早まで大きさはばらばらだが、千艘近くも集まると、和田岬まで入航待ちの船で溢れた。だが、船はこれだけに止まらず、瀬戸内の海を大輪田泊目指し進んでいる船も数多く残っている。

平家の山陽道軍は本格的に上陸を開始した。

一万近い兵や荷駄を艀に移して上陸するには時が掛かった。総大将の知盛が侍大将の伊藤景家が率いる三百基の大連弩、五百の徒歩五百、五百の騎馬に護られ、大輪田泊の浜に上陸したのは昼過ぎだ。知盛は早速に湊川の清宗の陣の後方に本陣を築いた。

その他、長門の岩国金秀の騎馬五百と徒歩二千、惟宗忠信が率いる大隈、薩摩の騎馬千と徒歩三千が上陸して陣を構えた。

菊地隆直が率いる肥後勢の騎馬二千と徒歩三千、緒方惟栄の率いる豊後勢の騎馬二千と徒歩三千は後続の船で大輪田泊の湊へ向かう途中にあり、明日に上陸する手筈だ。

平家上陸の様子を見た生田川の源氏の陣では、軍監の梶原景時が和田義盛、田代信綱、三浦義連を集めた。

「今宵、夜襲を掛ける。夜襲なら連弩もそれほど脅威とはならぬはず。素早く平家の陣へ押寄せ、火矢を射掛ける。海上からは摂津の渡辺水軍も夜襲に加わる手筈だ」

「梶原殿、敵も夜襲は警戒していよう。それほど上手くいくとは思わぬ。明日になれば全成殿が残りの軍勢を率いてこの陣へやって来るとの知らせがあったばかり。全軍揃って押し出せばよいではない

か」
「総大将の全成殿をただ待つだけでは、我らが先陣した意味はない。田代殿は昨日の戦で多くの兵を失ったので、夜襲に加わる事はない。我らに任せておけ」
軍監の梶原は和田義盛、三浦義連に夜襲を命じ、その仕度を始めた。生田川の源氏の陣から湊川の平家の陣までは僅かに三十町（３００ｍ）ほど。お互いの動きは直ぐに相手にも伝わる。
夕日が落ち、日が暮れると気温は一気に下がる。大輪田泊の浜から湊川の平家の陣に掛けては何十箇所も篝火が焚かれ、長刀や大太刀で武装した兵が源氏の夜襲を警戒していた。

満月に近い月はその青白い光で大輪田泊の浜と海上を照らし出す。生田川の源氏の陣では梶原景時、三浦義連の勢が各二千、和田義盛の勢が千の計五千が徒歩となり、鎧兜に太刀を腰に佩き、大太刀、長刀、弓矢を手にしていた。
摂津渡辺津では、集結した渡辺水軍の戦船五十艘と小早百艘に熊野水軍より加わった二艘の宋船と戦船五十艘、小早百艘が夕刻前に渡辺津を出航、大輪田泊を目指した。
渡辺水軍、熊野水軍共に今宵の夜襲には稼動できる全ての戦船と小早をかき集め、渡辺守嗣（わたなべもりつぐ）と熊野十郎太（くまのじゅうろうた）が率いた。
二人は大輪田泊の沖合に停泊する平家水軍の宋船、大船や戦船からの連弩攻撃を避け、攻撃を行うには夜襲しかないと考えた。そんな時、梶原景時より使いをもらい、今宵の夜襲を決意した。
渡辺守嗣、熊野十郎太の二人とも夜襲の主力は小早になると考えた。夜間の海上で素早く動く小早の動きを捉える事は困難だ。
小早の船中には火種を用意し、接近しての火矢攻撃を行う。宋船には平家の宋船に接舷して焼討ちを掛ける熊野水軍の兵が一艘当たり百五十名も乗船していた。
「夜襲があるかも知れぬ。周囲を警戒せよ」
教経より夜襲の警戒を命じられた松浦党の松浦毅は、浜に陣を構え

る平家の勢に生田川に陣を置く源氏の勢が夜襲を掛ける事だと受けた。
昼の荷降ろしや警戒で水手や兵の半数は船内で休息に入り、夜間の甲板で警戒に当たる兵も浜の方へばかり注意を向けた。
やがて、青白い月明り受け攝津方面より近づく二艘の宋船の姿が大輪田泊の沖合に薄黒い影として浮び上がった。その薄暗い二つの影は大輪田泊の浜に焚かれた篝火を目印に、静かに平家水軍の宋船に近づいてきた。
「摂津方面より宋船が二艘近づいてきます」
艫で見張りに立った松浦党の兵が大声で叫んだ。
その声で松浦党の深浦治佐衛門は安芸の大三島で聞かされた、彦島より強奪された二艘の宋船の事を思い出した。
「敵襲だ。あの船は源氏に奪われた船だ。ぶつかるぞ。中の兵にも知らせろ」
治佐衛門の発した警告とほぼ同時に沖合より近づいた宋船が治佐衛門の宋船に左舷を接してきた。
「ガッツン」
舷側と舷側が激しく擦れ合った衝撃で両船とも大きく揺れた。
船上にいた松浦党の松浦治佐衛門とその兵は、矢倉や船柵、帆柱などに捕まり倒れるのを防いだ。しかし、船内にいた兵や水手はその衝撃で頭や体を船内の羽目板に打ち付けて、気を失い、傷付いた者もいた。
衝撃が収まる間も無く、源氏方の宋船より鈎爪の付いた金具が平家の宋船に投込まれ、両船が繋がれた。
「敵が乗込んで来る。太刀、長刀を取り、迎え撃て」
治佐衛門は自ら腰の大太刀を抜き、舷側へ向かった。
「バチ、バチ」
敵の宋船の中で炎がはぜ、燃えた松明が何本も宋船の中へ投込まれた。
「火を消せ、火を消すのだ」

治佐衛門が大声で叫ぶと、船内より上がってきた水手や兵が、松明を海中へ投げ返したり、火が燃え移った甲板に桶で海水汲み上げて火を消そうと動きまわった。
源氏の兵は平家の兵が手薄になった処を狙い、乗移ってきた。
宋船の甲板上では平家、源氏の兵がお互いに相手を倒そうと太刀や長刀、櫂を振るった。

その宋船の攻撃が合図となり、大輪田泊の沖合に赤く燃える炎が点々と広がった。
摂津渡辺水軍と熊野水軍の小早、戦船総勢三百艘に乗る三千の兵が一斉に火矢を構えた。
「炎を目印に矢は放て」
源氏の宋船に接舷された二艘の宋船を除いた十八艘の宋船と四十艘の大船は教経の命で舷側に備えた連弩を仕度した。
宋船は片舷に二十基、大船は片舷に十五基の連弩を備えている。一斉に連弩より放たれた九百以上の矢は、その多くが狙いを外れ、沖合に浮かぶ炎の数はほとんど減らない。
「昼よりも、上目を狙え。上目を狙うのだ」
矢倉の前から謝国栄が連弩の兵に命じた。
国栄の命で狙いを上げた連弩が沖合に浮かぶ炎を十箇所ほども潰すと、「上目に狙いを付けろ」の声が他の宋船や大船に広がり、沖合に浮かぶ炎の数が急速に減少した。

「今だ、平家の陣の注意も海を向いている。静かに進め」
梶原景時の命で生田川の陣で待機した五千の兵が一斉に川を渡り、平家の陣を目指した。
いくら音を立てぬよう静かに動いても、五千の軍勢が動けばその気配は直ぐに伝わる。
先陣に位置する平清宗の陣では侍大将の伊藤景高が楯の背後で弓矢を構えた二千の徒歩を二段に組ませ、源氏の兵が近づくのを待った。

清宗の陣の左では長門の岩国金秀が弓矢を構えた二千の徒歩が、右には惟宗忠信が大隈、薩摩の三千の弓矢を構えた徒歩を三段に並べて、陣を構えていた。
その清宗の後方では、知盛に直属する五百の連弩隊と三百基の大連弩が矢を番え攻撃の仕度を完了していた。
「ザック、ザック」
浜を進む源氏の兵の足音が次第に近づいてきた。
「ザッ、ザー、ザッー」
弓の弦の音、矢羽の音が響くと、青白い月の輝きを遮るように、数千本の矢が平家の先
陣をつとめる伊藤景高、岩国金秀、惟宗忠信の陣に上空から降り注いだ。
「カッツン、カッツン」
楯に刺さる矢の音が響く。源氏の兵も矢頃に入った事は間違いない。
「急ぎ反撃だ。我らも射返すぞ」
伊藤景高の命で平家方も上空に向けて矢を射ると、楯の陰に身を潜めた。
その間に知盛の侍大将伊藤景清に率いられた五百の連弩隊と三百基の大連弩が先陣の直後まで進め陣を進めた。
「先陣は身を伏せろ。我らが連射する」
伊藤景清の声が響くと、暗闇の向こう側に潜む源氏の兵に連弩の矢が放たれた。
「ガッツン」「ギャー」
連弩の矢が楯を射割る音が鳴り、連弩の矢に倒れる源氏の兵の悲鳴が上がった。
だが、源氏の兵も一方的に連弩に射られているだけではなかった。
和田義盛が率いる兵は岩国金秀の陣を迂回して、大連弩の車列に矢を射込み、大連弩の台車の上にあった射手や馬手が源氏の兵の矢を受け何人も倒れた。
「敵が脇に廻ったぞ。右手に兵を廻せ」

伊藤景清の命で大連弩の台車の警護に付く五百の徒歩兵が楯と一間半（２．７ｍ）の三叉槍（さんさそう）を持って駆け出した。
大連弩から一町（１００ｍ）ほど離れた処に、和田義盛は千の徒歩を率いて進出し、二段に折敷くように楯の陣を構えていた。
先頭を駆けた景清の郎党の坂弥左衛門（ばんやざえもん）は、源氏の陣より飛出してきた兵が大太刀を構えるのを見て、大きく三叉槍を振り下ろした。
坂の三叉槍は相手の構えた大太刀を叩き落とし、兜を打ち据えた。
後続の者は三叉槍の穂先を並べ、源氏の楯の陣へ突き掛かった。
お互い暗闇の中の戦い、目の前の敵を叩き伏せる事が精一杯だが、長柄の三叉槍を振回す平家の兵の方が数は少ないが、次第に優勢となり源氏の和田勢の隊列を食い破るように進んだ。
「敵が後ろへ廻るぞ。引け、引上げろ」
和田義盛が陣を引くと、既に崩れ掛けていた梶原勢、三浦勢も一斉に陣を引いた。
陸の夜戦の決着が付いた頃には、海上の戦も既に終わっていた。

十日の朝を迎え、朝の陽光が大輪田泊の浜を白く輝かせた。だが、浜には割れた楯や浜に刺さったままの矢、砂をどす黒く染めた血の跡、放置されたままの兵の死体、焼け焦げて浜に打ち上げられた船の残骸など、昨晩の夜襲の名残りが其処此処に残されていた。
大輪田泊の海上には、源氏方の宋船の焼討ちを受けた一艘の宋船が源氏の宋船と繋がったままの姿でその残骸をさらし、源氏方が強奪したもう一艘の宋船や平家水軍の大船三艘の焼けた残骸、ばらばらとなった船板や舵、柱などの残骸や平家か源氏いずれとも分からぬ兵の屍骸が海上を漂っていた。
山陽道軍の総大将平知盛は侍大将伊藤景清ら十人の郎党を引連れ、狩衣の身軽な姿で大輪田泊に現れた。
沖合では、平教経が率いる平家水軍の宋船、大船、戦船が白帆に朝日の陽光を受けながら、源氏方の水軍の接近を警戒する様に遊弋している。

そんな中、本日上陸を行う菊地隆直が率いる騎馬二千と徒歩三千の肥後勢、緒方惟栄が率いる騎馬二千と徒歩三千の豊後勢を乗せた戦船、小早、荷船など千艘以上の船が大輪田泊へ入ってきた。

「知盛様、今日には我が平家の勢が揃います。明日には我が方より源氏の陣へ迫り、これを撃ち破り京へ向かいましょうぞ」

知盛が景清の威勢のよい言葉を笑いながら聞いていると、湊川の方をより慌てて駆けてくる四騎の騎馬武者がいた。先頭に先陣を任せた平清宗の侍大将の伊藤景高の姿を見た知盛は、その場から直ぐに本陣へ戻り到着を待った。

本陣に待つ知盛の下へ、伊藤景高を先頭に景高の郎党二人に抱えられた傷付いた一人の武者が進み出た。

「それがしは、山陰道軍の総大将近衛中将平資盛様の侍大将平盛澄の郎党で大江盛次と申す者。資盛様の文を持参して参りました」

大江と名乗った武者の顔は泥に塗れ、髪は残ばら、腕や脚には矢傷、刀傷があり、傷を縛った衣は血で赤黒く汚れていた。

大江は懐の奥より文を取り出し、知盛へ手渡した。

「資盛の山陰道の軍勢に何があった」

大江は山陰道軍が戦った丹波亀山（亀岡市）での戦の状況を語った。山陰道軍が石見の江津（島根県江津市）において、石見、出雲、因幡、伯耆の源氏方に与力する因幡の長田、出雲の藤原、石見の益田、厚東らの勢を撃破った事は既にお知らせした通り。

江津での戦に勝利した資盛様は京を目指し、因幡の鳥取（鳥取市）から但馬に入ると村岡（兵庫県香美町）で山中に入り、丹波の福知山（福知山市）を経て亀山（亀岡市）に向かいました。

途中、悪天候により何日も足止めされ、山陰道軍が亀山の地へ入ったのは十一月四日の事でした。亀山へ入った山陰道軍は、出雲の藤原能盛（ふじわらのりもり）が一族の健部荘の藤原能重（ふじわらのりしげ）の勢と水軍より転じた阿波勢や土佐、讃岐勢らを合わせ総勢一万五千となり、赤間関（あかまがせき）（下関市）を出立した時より増えておりました。

ですが、亀山の地においては源氏の将の義経が畿内八千の源氏勢を率い、山陰道を望む小高い丘を中心に木柵を引廻した陣を築き、待ち構えておりました。
義経が築いた木柵は、一辺が二町（２００ｍ）から三町（３００ｍ）の四角形で、小高い丘を囲んでいました。
資盛様は京へ進む上で障害となるこの木柵の攻略を侍大将の平盛澄（たいらのもりずみ）様に命じました。
盛澄様は一万の勢でこの木柵を包囲し、火矢による攻撃を行いましたが木柵は生木の為に攻略は難航し、門を打ち破ろうと丸太を抱えた兵を強引に突入させました。
しかし、源氏方に柵の上に矢兵を並べ、丸太を抱えた兵を狙い射し、門を開いて騎馬武者を突出させ、散々に撃破られました。
翌五日、盛澄様は前日と同様に楯を構えた徒歩に柵を包囲させ、矢戦を開始しました。
ですが、前日とは異なり、木柵の門前には阿波の田口様が連れてきた三百の連弩兵と侍大将源李定が率いる千の騎馬武者を待機させました。
矢戦の最中に、昨日と同様に門を打破る丸太を抱えた兵を突入させ、源氏が門を開いて騎馬武者で丸太を抱えた兵を打払おうする所を連弩で源氏の騎馬武者を射倒し、逆に平家の騎馬武者を柵内に突入させようとしたのです。
この策は途中まで、上手くいきました。
十数組もの丸太を抱えた兵を突入させた時、木柵の門が開き、五百騎ほどの源氏の騎馬武者が突撃してきました。
田口殿の連弩兵が前に出て一斉に矢を放ち、数多くの源氏の騎馬武者を射倒しました。その気を逃さず、黒糸縅の鎧兜を着け、鹿毛の馬に跨り、長刀をかざした侍大将の源李定（みなもとのりさだ）を先頭に千騎の平家の騎馬武者が木柵の門へ突撃しました。
平家の誰もが戦に勝ったと思ったその時、後方に構えた資盛様の本陣より「敵襲だ。後方より敵が・・・」の悲鳴の様な声が響きまし

た。
本来であれば資盛様の本陣は侍大将の源李定が千の騎馬武者と二千の徒歩で護りを固めている筈でした。しかし、この時は源李定が騎馬武者を率いて木柵の攻撃に加わっていた為、二千の徒歩が護りについているだけでした。
この時、資盛様の本陣を衝いたのは、畠山重忠（はたけやましげただ）、土肥実平（どいさねひら）、熊谷直実（くまがいなおざね）が率いる四千の坂東勢でした。
最初に崩れたのは資盛の本陣でした。源氏の坂東勢、騎馬武者、徒歩合わせて四千に背後より攻込まれると二千の徒歩による護りが一挙に崩壊しました。
この本陣の崩壊が木柵攻めの兵に動揺を誘うと、木柵内の源氏勢が門を開き一気に押寄せてきました。
近江の安達、佐々木勢、山城の後藤勢、河内の石川勢、摂津の渡辺勢など勢いは激しく、長刀を持った騎馬武者を先頭に平家の徒歩の中へ雪崩れ込んできました。
平盛澄様や源李定様がいくら兵を叱咤しても一旦浮き足立った兵を抑えることは出来ず、平家の兵は福知山（京都府福知山市）の方面へ退却した。
源氏の騎馬武者の追撃は激しく、数千以上の兵が矢、刀を受け路傍に血を流して倒れ、手足に傷を負った兵は弓、刀を杖として山中に逃込み、無事な者だけがどうにか福知山へ逃げ戻った。
盛澄様も腕に受けた傷口を縛る布に血を滲ませながら福知山まで戻り、由良川の畔に平家の旗を立て、敗残兵の集結を図りました。
やがて、筑後の山鹿勢、日向の宮崎勢なども合わせ五千ほどの兵がその旗の下に集まりました。肩に傷を負った資盛様もどうにか福知山へ戻りましたが、弟の有盛様は亀山の本陣で襲撃を受けた際に、源氏の熊谷直実に討取られました。
知盛の本陣には清宗とその侍大将伊藤景高、景経、知盛の侍大将の伊藤景家、景清、長門の岩国金秀（いわくにかねひで）、薩摩の惟宗忠信（これとうただのぶ）、肥後の菊地隆（きくちたかなお）

直、豊後の緒方惟栄(おがたこれえい)、水軍から平教経(たいらのりつね)、謝国栄(しゃくにえい)、松浦水軍の松浦正(まつうらただし)、山鹿水軍の山鹿時貞(やまがときさだ)、豊後水軍の臼杵雅幸(うすきまさゆき)、周防水軍の船所正利(ふなどころまさとし)が集まった。

既に、資盛が率いる山陰道軍が義経の軍勢に敗退した事は諸将へも告げていた。

「明日、十一日には生田川に陣を構える源氏を撃破り、京へ軍を進める。資盛にも再度京を目指すよう命じてある」

知盛は集まった諸将を前に力強く宣言した。

「坂東より下った源全成を総大将とする四万の軍勢が生田川の陣へ入ったと物見が知らせてきた。だが、資盛の軍を撃破った義経の軍勢は全成を総大将とする勢とは合流せず、後方に留まっておる。我らは全力で正面に位置する全成の軍勢を撃破る」

そこで、知盛は明日の陣立てを諸将に示した。

先陣の中央には清宗とその侍大将伊藤景高、景経率いる騎馬千、徒歩二千の兵、及び知盛の侍大将伊藤景家が率いる大連弩三百基と護衛の徒歩五百が陣を構える。

その左翼は菊地隆直の肥後勢が騎馬二千、徒歩三千で陣を構え、右翼は緒方惟栄の豊後勢が騎馬二千と徒歩三千が陣を構える。この先陣には山鹿水軍の兵が大船より外した連弩を持った連弩兵として、右翼と左翼に夫々五百加わる。

第二陣は左翼に長門の岩国金秀が騎馬五百と徒歩二千で、右翼には薩摩の惟宗忠信が騎馬千と徒歩三千で陣を構える。

知盛の本陣はその後ろに置かれた。侍大将伊藤景清の率いる五百の連弩隊と五百の騎馬を中心に、平教経が率いる松浦、山鹿、豊後、周防ら三千の水軍の兵が加わり、総勢は二万五千となる。

知盛の明日の戦に対する心積もりでは、この大輪田泊での源氏との戦は短期に終わらせたかった。これは、全成の後方に控える義経の軍勢が同様に動くか未だに掴めず、前年の一の谷の戦の様な奇襲を避ける意味もある。

清宗が率いる先陣には圧倒的な打撃力を示す大連弩と連弩隊を与え

た。この連弩の打撃力で源氏の押寄せてくる徒歩に一撃を与え、騎馬武者で源氏の徒歩を圧倒すれば源氏の騎馬武者は必ず平家の騎馬武者との一騎打ちを望んで押寄せてくる。
其処を、騎馬武者の後方へ下がった連弩が再び前に進出し、源氏の騎馬武者を射倒す。
後は、松浦水軍の百艘の戦船に水軍の兵を分乗させ、生田川の源氏の陣の後方へ迂回上陸し、後方より源氏の本陣を奇襲する。
この策が上手くいくかどうかは騎馬武者と連弩の進退をいかに連携させるかにあった。

「大輪田泊《おおわだとまり》への上陸」　その３

「大輪田泊への上陸」　その３

生田川の源氏の陣にも、総大将源全成が率いる源氏の平家討伐軍二万八千が京より到着した。

先陣として、生田川に陣を張る梶原景時、和田義盛、田代信綱、三浦義連の勢は九日夜に行った夜襲で大きな損害を受け、八千が五千にまで減少していた。

全成が率いてきたのは、甲斐の安田義定、相模の北条義時、武蔵の比企能高、下野の足利義兼、小山信惟、下総の千葉常胤、結城朝充、駿河の勝間田平蔵、尾張の大屋安資、美濃の泉重光ら二万八千だ。

源氏の陣構えは、先陣は駿河の勝間田平蔵、尾張の大屋安資、美濃の泉重光の三人が騎馬三千、徒歩五千で陣を構え、中陣は甲斐の安田義定、武蔵の比企能高、下総の千葉常胤、結城朝充が騎馬五千、徒歩八千で陣を構えた。

本陣は総大将の源全成を中心に梶原景時、和田義盛、田代信綱、三浦義連、北条義時ら相模の勢と下野の足利義兼、小山信惟が騎馬五千、徒歩七千で陣を構えた。

平家との戦ではいかに犠牲を払っても接近戦に持ち込み、連弩の威力を封じなければ源氏に勝機はない。

坂東勢は葦屋浦の戦で連弩の威力を身をもって知っており、前へ出る迫力に欠ける。

その点、範頼の平家討伐軍に従軍せず、連弩の威力を未体験の駿河、尾張、美濃の東海勢ならばと、軍監の梶原は勝間田、大屋、泉に先陣を命じた。

平家、源氏を合わせ六万の軍勢が生田川、湊川を挟む狭い地域に集結、両軍の陣の間は僅か二十町（２０００ｍ）ほどだ。

十一月十一日、まだ夜明け前の星明りが青白く照らす大輪田泊の浜は出陣の仕度をする兵らの音に満ち、平家、源氏の陣では旗が風を浮けて翻り、幔幕を煽っていた。
朝日が昇る頃、冬枯れで浅くなった生田川の流れを渡り、源氏の先陣、駿河、尾張、美濃の徒歩が楯を構え、弓矢を持ち湊川の平家の陣へ迫った。
駿河、尾張、美濃の兵は壇ノ浦や葦屋浦の戦には従軍しなかったので、連弩の脅威を周囲の者より聞かされても、実感はしなかった。
平家の先陣は湊川を渡り、十町（１０００ｍ）に亘って広がって源氏の勢を待ち受けていた。中央に位置する三百基の大連弩を指揮する侍大将伊藤景家は源氏勢が三町（３００ｍ）に近づくのを待っていた。
「大連弩は五町（５００ｍ）先まで飛びますが、楯や鎧を射抜く事が出来るのは三町（３００ｍ）からです」
謝国栄から聞かされた大連弩の射程を生かす為、景家は源氏の勢が近づくのを辛抱強く待った。
「ドタッ、ドタッ」
源氏の兵が駆ける足音が大輪田泊一帯に響き渡った。
「今だ、撃て」
景家の命で三百基の大連弩より一斉に矢が放たれた。二射、三射と続けて大連弩より矢が射られた。
「ギャ」「ウァー」
源氏勢の中央を進む尾張の大屋安資の二千の徒歩の間から悲鳴が上がった。
大連弩の矢で楯を割られ、鎧を射抜かれ、血を流して倒れた徒歩は数百に上った。
大屋勢の先頭を進む徒歩は倒れたが、後続の者は訳も分からず前に進んだ処を、大連弩の矢に射られ惨状は拡大した。
目の前の惨状に大屋勢の足は止まり、矢を避けようと楯の陰に座り込んだ。

源氏の両翼を進んだ駿河の勝間田勢二千と美濃の泉勢千が平家の陣に二町（２００ｍ）と近づいた時、平家の両翼に配備された山鹿水軍の連弩兵が矢を放った。
中央の大屋勢を襲ったと同じ惨状が勝間田勢、泉勢の上に再現し、楯は連弩の矢に楯を割られ、鎧を射抜かれ血を流して徒歩は伏倒れた。

「今こそ押し出せ。敵の徒歩を押しつぶすぞ」
清宗の陣より侍大将の伊藤景経が黒糸縅の鎧兜を着け、黒鹿毛の馬に跨り大太刀を振上げ、騎馬武者の先頭で源氏の徒歩へ馬を駆けた。
景経に続いた平家の騎馬武者は伊賀の平田家継（ひらたいえつぐ）、伊賀家長（いがいえなが）、高橋長綱（たかはしながつな）、越中の館貞保（たてさだやす）、甲斐の秋山光朝（あきやまみつあさ）などの千騎だ。
皆、鎧兜で騎乗し、大太刀、長刀など得意の武器を構え、砂塵を上げて馬を駆けた。
「敵の騎馬だ。騎馬が出てきた。矢を番えろ」
源氏の先陣を進む大屋安資は悲鳴のような声を上げ兵に命じた。
大屋が率いた二千の徒歩のうち六百近くは連弩の矢に倒れ、残りの兵も楯の陰で逃げ腰となっていた。
「ド、ドドッ」
平家の騎馬武者の駆る馬蹄の音が近づく。
中央の清宗の陣からだけではなく、その両翼に配された肥後の菊池勢、豊後の緒方勢よりも合せて四千の騎馬武者が大輪田泊の浜の中央に孤立した源氏の徒歩を包囲するように迫った。
大屋、勝間田、泉の徒歩は楯、弓矢を捨て、平家の騎馬武者に背を向け逃出したが、早くも平家の騎馬武者はその背後に取り付き、二千近くの兵が平家の騎馬武者の中に飲み込まれそうになった。
「徒歩の者を救え、騎馬を出すのだ」
源氏の中陣で戦況を見つめていた甲斐の安田義定（やすだよしさだ）が中心となり、先陣の両翼からも駿河の勝間田長年（かつまたながとし）、美濃の泉安重（いずみやすしげ）が手勢の騎馬武者を率いて出陣した。

平家の五千の騎馬武者と源氏の三千の騎馬武者が余り広くない大輪田泊の浜の中央で激突した。
大太刀、長刀を撃ち合せ、馬と馬がぶつかり、お互いの首を取ろうと組合い、罵声、悲鳴、血飛沫が飛び交った。
始めは互角だった平家と源氏の勢いも、次第に人数が多い平家方が押し始め、戦の流れが徐々に平家へ傾いた。
馬を掛け違わせ、数度も平家の騎馬武者と戦った安田義定の大太刀は何箇所も刃が欠け、馬の力も尽きようとしていた。

「全成様、ここで後詰めを出さぬと安田殿らは討死ですぞ」
本陣の床几に黒糸縅の鎧を着けて座る討伐軍の総大将の源全成に和田義盛が迫った。だが、全成は自分で答えず脇に座る軍監の梶原景時の方を見た。
「梶原殿、これだけの混戦となれば平家も連弩は使えまい。ここは全軍に出陣の命を」
北条義時が梶原景時に迫った。本陣に揃った和田義盛、田代信綱、三浦義連、足利義兼、小山信惟らの将が一斉に梶原を見た。
「和田殿には本陣の全成様の警護に残ってもう。その他の者は全て押出す」
梶原の決断で、本陣の田代信綱、三浦義連、足利義兼、小山信惟及び中軍の比企能高、千葉常胤、結城朝充ら騎馬武者は馬に跨り、徒歩は楯を持ち生田川を渡った。
既に、源氏の先陣をつとめた大屋、勝間田、泉、安田らの勢は平家の騎馬武者に追われ、生田川から五町（５００ｍ）のところまで後退していた。
「後詰めを致す。後詰めぞ」
源氏の田代信綱、三浦義連、足利義兼、小山信惟ら七千以上の騎馬武者が安田勢らの後詰めに現れた。
彼らの勢いは一気に平家の騎馬武者を押しつぶそうとする勢いだ。
平家の伊藤景経らの攻撃は新たに加わった田代、三浦、足利ら源氏

の騎馬武者により、大きな壁にぶち当たったように止まった。
「一旦、引け、引くぞ」
伊藤景経は源氏の騎馬武者を上手く引き出せたので、後退を命じ、それを見た菊池勢、緒方勢も同時に軍勢を引いた。
「平家の勢が引くぞ、そのまま付け入れ」
源氏の騎馬武者の先頭に立った三浦義連が馬を煽るように前に進むと、三浦勢に釣られ、足利勢、小山勢、比企勢、千葉勢などが一斉に前掛かりとなって馬を進めた。
知盛の侍大将伊藤景家は三百基の大連弩と山鹿水軍の千の連弩兵を率い、伊藤景経の騎馬武者と入れ替るように先陣へ出た。
「源氏の騎馬武者を一騎たりとも生かして戻すな」
景家の命で一斉に連弩より矢が放たれた。
大輪田泊の浜から一町（１００ｍ）離れた沖合には謝国栄が平家水軍の宋船十八艘、大船四十艘を浮かべ、宋船は左舷に残した二十基、大船も左舷に残した十五基の連弩から源氏の騎馬武者へ矢を放った。
「ザ、ザザー」
浜に突き刺さる連弩の矢が、連弩の威力を良く知る源氏の田代、三浦、足利、小山らの騎馬武者の勢いを止めた。

「これより、敵陣へ向う。静かに、音を立てずに近づけろ」
十一日の夜明け前、青白い星明りの下、大輪田泊の沖合十町（１０００ｍ）に遊弋していた松浦水軍の百艘の戦船は平家水軍の総大将平教経の命で、舳を生田川の岸に構えた源氏の陣の後方へ向けた。
これまで教経は水軍の総大将として船上より矢戦の指揮を取っていた。だが、この坂東より押寄せた源氏の主力との戦では、源氏の本陣を奇襲する兵を自ら率い、長刀を振るって源氏の武者を倒したいと総大将知盛へ直訴した。
教経は水軍の指揮は謝国栄に任せ、軽い水軍鎧を着け、長さ一間（１．８ｍ）の長刀を持って先頭を行く戦船の舳に立った。
「助十（すけじゅう）、源氏の陣や浜に異常はないか」

教経の脇には、星明りの中でも十町（１０００ｍ）は見通すという夜目の利く舵取りの助十が座り、大輪田泊の浜を凝視していた。
教経の乗る戦船には連弩隊を率いる侍大将伊藤景清が同乗し、後続の戦船には連弩隊の兵や松浦水軍の松浦誠、佐志良、山鹿水軍の原田敏孝、山鹿忠良、豊後水軍の緒方信方、周防水軍の船所和孝らの水軍の兵合わせて二千五百が乗込み、上陸の時を待っていた。
生田川の源氏の陣をより二十町（２０００ｍ）は離れた浜に平家の戦船が着いた。
「ザ、ザ、ザー」
満ち潮に乗り浜へ乗り上げた戦船から最初に降りたのは教経だ。伊藤景清や松浦誠、佐志良、原田敏孝らの兵、連弩兵も続いて上陸した。
音を立てぬように砂浜を上がり、松林の中に入ると夜明けまで待機に入った。
この教経が率いる奇襲隊は源氏との戦が始まり、平家の陣へ源氏の騎馬武者を引き付け、本陣が手薄になった処を見計らい、襲撃する手筈だ。
夜が明けて矢戦や騎馬武者が駆け合う音や喚声が響いた。
教経が率いる奇襲隊が潜む場所よりは戦況は見通せない。知盛の本陣より上がる合図の烽火を待つだけだ。
既に戦が始まり半刻（１時間）は経過し、教経がじりじりとした気持ちになった頃、ようやく知盛の本陣より合図の烽火が上がった。
「これより、源氏の本陣を目指すが、近づくまでは声も立てるな」
教経は小声で周囲の兵に命じた。
松林を抜けると、生田川の源氏の本陣までは十町（１０００ｍ）ほどだが、間に姿を隠す場所などはない。
兵は皆小走りで源氏の本陣へ向う。幔幕が張られ、本陣の内部の様子は見えないが、後方から平家の勢が迫って来る事など考えてもいないようだ。
二町（２００ｍ）ほどで源氏の本陣という所で、連弩兵が前に出て

一斉に幔幕の中に矢を射込んだ。
二射、三射と射込んだ処で、大太刀、長刀を持った兵が喚声を上げて、走り始めた。

「敵だ、敵だ。平家の兵が後方より攻めてきた」
連弩の攻撃を受けた源氏の本陣では、源氏の総大将源全成の周囲をかためていた朝比奈頼昌（あさひなよりまさ）とその手勢数十人が矢を受けてその場に倒れた。
一瞬のことで、何事が起きたのか訳が分からなかったが、和田義盛の郎党横山重直の声で事態を悟った。
「楯を後方へ廻せ」
「総大将の馬を引け」
和田義盛は手勢を後方に向け、迎え撃とうとした。だが、その体勢を整える間も無く、幔幕を切り裂き平家の兵が本陣へ雪崩れ込んで来た。
総大将の源全成を馬で逃出させる余裕もない。和田義盛も大太刀を抜き、平家の兵の長刀を防いだ。
本陣へ雪崩れ込んだ平家の兵は二千ほど、義盛の手勢は千二百だ。人数は圧倒的に平家の兵の方が多い。
大太刀、長刀を振るい相手を倒そうと平家の兵も源氏の兵も必死だ。腕、脚を斬られその場に倒れ、悲鳴を漏らし、血を流す兵。鎧を断ち斬られ、胸や腹、背から大量の血を流して息絶える兵が続出した。
「我は、相模は三浦の荘の和田義盛だ。我と思わん者はかかって参れ」
腕の傷より血を滴らせ、荒い息をついた和田義盛は此れが最後と覚悟を決め、名のある平家の将との一騎打ちを求め、名乗りを上げた。
「和田義盛殿か。我は中納言平教盛が一子能登守平教経。お相手いたす」
教経は名乗りを上げ、右手に持った長刀を両手で持ち直すと義盛の前に進み出た。

「能登守殿か、好き相手に巡りあえた」
義盛も頭上に構えた大太刀を教経の水軍鎧を断ち斬るように力を込めて振り下ろした。
教経は義盛の大太刀を長刀で受け止め、返す長刀で義盛の鎧を断ち斬った。
義盛が教経の長刀の前に倒れると、残った和田勢は一斉に本陣より逃出した。
総大将の源全成もその和田勢に紛れ本陣を逃出した。
「源氏の兵を追撃せよ。追い掛けて討取り、手柄としろ」
教経の激に、松浦誠、佐志良、原田敏孝、山鹿忠良、緒方信方、船所和孝らの諸将は兵を励まし、喊声を上げ追撃に移った。
知盛の侍大将伊藤景清に率いられる五百の連弩兵は本陣を駆け抜け、生田川を渡り平家の勢と激闘を行っている源氏勢の後方に迫った。

大輪田泊の浜一帯では平家の総大将平知盛が自ら五百の騎馬を率い、平清宗とその侍大将伊藤景高、景経、知盛の侍大将伊藤景家と菊地隆直、緒方惟栄、岩国金秀、惟宗忠信らが六千の騎馬武者と一万四千の徒歩とともに、源氏の勝間田平蔵、大屋安資、泉重光、安田義定、比企能高、千葉常胤、結城朝充、梶原景時、田代信綱、三浦義連、北条義時、足利義兼、小山信惟らの一万の騎馬武者に一万五千の徒歩と激しい戦を繰り広げていた。
混戦となれば、平家自慢の大連弩は威力を発揮する事は出来ないが、半間（９０ｃｍ）の連弩を持つ連弩兵は戦場の外側を動き、源氏の騎馬武者を狙って射倒した。
誰もが、目の前の敵を倒そうと長刀、大太刀、棒を振るい、相手を組伏せて首を取ろうと力を振り絞っていた。
伊藤景清が率いる五百の連弩兵は一斉に源氏の騎馬武者や徒歩の背に矢を射込んだ。
一度に四百ほどの源氏の兵が血を流し、呻き声を上げて倒れた。
しかし、戦場の喧騒の中で最初の二撃まで後方より襲撃を受けた事

に源氏の勢は気付かなかった。
気付いたのは大連弩の攻撃で損害を受け、後方へ下がった駿河の勝間田の兵だ。
「敵が後ろへ廻ったぞ。後ろに平家の連弩兵がいる」
兵の騒ぎで勝間田平蔵が本陣の方を見た。本陣の幔幕は引き倒され、逃出した源氏の兵に襲い掛かる平家の兵の姿が目に入った。
「本陣が崩れた。本陣が平家に襲われた」
呆然として勝間田が呟いた言葉は、瞬く間に源氏の兵の間に広がった。今まで平家を圧倒する勢いで長刀や大太刀、棒を振るっていた兵からその勢いが失せ、壊走が始まった。

「京洛《きょうらく》の攻防」　その１

「京洛の攻防」　その１

十一月九日、平資盛が率いる山陰道軍を丹波の亀山（亀岡市）の地において破った源義経は近江の安達清経、佐々木定綱、山城の後藤新兵衛、河内の石川義賢、摂津の渡辺広綱、相模の土肥実平、武蔵の熊谷直実、畠山重忠ら一万を率いて京へ戻った。

平家討伐軍の総大将源全成は二万八千の勢を率い、軍監の梶原景時や和田義盛らが先遣隊として陣を構える攝津の大輪田泊（神戸市中央区、兵庫区）にある生田川へ出陣し、京の警護に残ったのは僅か千の兵に過ぎなかった。

前日の八日に摂津大輪田泊へ平家の山陽道軍が上陸、それを阻止しようとした源氏が敗れたとの噂が京の街に流れ、京の市中には不穏な空気が漂っていた。

義経はそんな中の京へ戻り、院庁の六条西洞院で後白河院側近の大蔵卿高階泰経を通じ、丹波の亀山において平家山陰道軍を撃退したとの戦勝を伝えた。

摂津に平家の山陽道軍が上陸し京に残るのは僅かな源氏の兵ばかりと、心細い思の後白河院は義経の軍勢が戻った事をひじょうに喜び、高階泰経より「京の警護」を再び命じた。

義経は院の「京警護」の命を畏まって受けたが、それは義経にとっても好都合だった。

義経は今でも自分がこの度の平家討伐軍の総大将になるべきだと思っていて、兄全成の下で戦をする気はなかった。

しかも、軍監が自分の手柄の事しか頭にない梶原景時では、連弩を持つ平家に無謀に挑んで大きな損害を被る恐れがあった。

「平家の軍勢を待ち受けるに鳥羽口よりも良い場所はあるか」

義経は山城の後藤新兵衛、河内の石川義賢、摂津の渡辺広綱ら付近

の地形に詳しい諸将を集めた。
鳥羽口は先に義経が京警護の陣を構えた場所で、鴨川と桂川が合流する場所にあり、鳥羽離宮も近く摂津と結ぶ西国街道が通る要所だが京の街に近すぎた。
強大な破壊力の連弩を持つ平家の軍勢に防御の陣を破られれば、そのまま平家勢の京市中への乱入を許す事となり、迎え撃つに相応しい場所ではなかった。
「摂津と山城の境、山崎（京都府乙訓郡大山崎町）の地はどうでしょう。西山の山々と岩清水八幡宮の男山との間の地峡で、桂川、宇治川、木津川が合流して淀川となる地です。摂津より京を目指すには必ず通り抜けなければならぬ地で、雑木林や小さな丘が田畑や原野の間に点在し、騎馬を動かすのにも適し、大軍を迎え撃つに適した地といえます」
後藤新兵衛の話に義経も岩清水八幡のある辺りかと肯いた。
山崎の地へ進出した義経は天王山（京都府乙訓郡大山崎町）の麓に陣を構え、本陣は天王山にある宝積寺（ほうしゃくじ）へ置いた。
天王山の陣には十町（１０００ｍ）先より相手の進路を絞る様に逆茂木を植え、楯を並べた。
更に、土肥実平（どいさねひら）、熊谷直実（くまがいなおざね）、畠山重忠（はたけやましげただ）の坂東勢四千を近くの丘陵の陰に潜ませ、天王山の陣を攻める敵を横撃する伏兵とした。
義経の郎党、鷲尾義久（わしおよしひさ）、亀井重清（かめいしげきよ）の二名は平家山陰道軍の動きを見張っていたが、二人より平家は福知山（京都府福知山市）の由良川（ゆらがわ）の畔で敗残兵を集結し、凡そ五千の兵が集まったと知らせてきた。
義経は二人には引き続き山陰道軍を見張り、再び京を目指すのか、篠山（篠山市）から摂津に出て山陽道軍と合体するのかを見極めるよう命じた。
一方、摂津大輪田泊へ上陸した平家の山陽道軍へも動きを探るべく、郎党の佐藤継信（さとうつぎのぶ）、鎌田盛正（かまたもりまさ）の二人を出した。
その佐藤継信、鎌田盛正の二人からの最初の知らせは、十日の夕刻

にもたらされた。
九日の夜半に行われた夜戦で、源氏は大敗を喫して摂津渡辺党の水軍は壊滅し、義経が熊野湛増らと平家より強奪した二艘の宋船も失われたと知らせた。
次いで十一日の夕方には、早朝より行われた大輪田泊の浜での戦で源氏方は崩壊し、平家勢の追撃により多数の将兵が負傷、戦死した事を知らせた。
この知らせを受けた義経は安達清経、佐々木定綱、後藤新兵衛、石川義賢、渡辺広綱、土肥実平、熊谷直実、畠山重忠らの諸将を天王山の本陣へ集めた。
「摂津大輪田泊への物見より、全成殿が率いる平家追討軍が十一日の合戦で大敗を喫したとの知らせが入った。逃げ戻る、敗れた兵を都に入れるな。この陣へ留めおくのだ。又京へ向う旅人も留め置くのだ」
「義経殿、我らも摂津に向け出陣すべきでは」
「こうなれば、我らが京の地を護る最後の兵だ。先ず、平家の規模を掴んでからだ」
「鎌倉への知らせは・・・」
「間もなく、大輪田泊の戦の詳細が判明しよう。それからだ」
義経は佐々木定綱（ささきさだつな）、土肥実平（どひさねひら）二人の出陣論を抑え、この地で平家を迎え撃つ仕度を命じた。
兵は弓に弦を張り、矢を並べ、鎧の紐を締め、緊張が一気に高まった。

「義経の軍勢は篠山を廻って摂津へ来るのではなく、摂津と山城の境の地に陣を構えたと知らせがあった。我らはこのまま源氏勢を追撃し、義経の軍勢をも撃破り、京を回復するのだ。教経は大船にて水軍の兵を率い、摂津の渡辺津（大阪市中央区）へ先行せよ」
大輪田泊の戦において平家山陽道軍の負傷、討死兵は五千ほどで、騎馬六千、徒歩一万四千、三百基の大連弩、千五百の連弩兵は健在

だ。
平家水軍の総大将平教経は生田川の源氏の本陣を二千五百の水軍の兵を率いて急襲、撃破し、逃げる源氏の兵を追撃して散々に討取り、大輪田泊の本陣へ戻った所だ。
平家水軍は謝国栄の指揮の下で源氏の騎馬武者、徒歩へ連弩の攻撃を終わり、大輪田泊へ碇を下ろしていた。
「我らは知盛様より先陣を命じられた。このまま渡辺津（大阪市中央区）へ向かうぞ」
教経は源氏の本陣を急襲した松浦水軍の松浦誠、佐志良、山鹿水軍の原田敏孝、山鹿忠良、豊後水軍の緒方信方、周防水軍の船所和孝ら二千五百の兵をそのまま率いて、四十艘の大船に乗込んで渡辺津へ向け出航した。

摂津の渡辺津は渡辺水軍の本拠地だが、瀬戸内の海にその威勢を誇った渡辺水軍も壇ノ浦の合戦で大きな損害をこうむり、更に九日に行われた大輪田泊沖の夜戦において残された戦船、小早や水軍の兵の殆どを失っていた。
先に陸に上がっていた渡辺水軍の兵は既に渡辺広綱とともに義経の下へ出陣しており、渡辺津の屋敷に残ったのは渡辺守嗣と僅かな老兵のみだった。
渡辺津よりは船で淀川を遡るか、西国街道で京に戻れるので、大輪田泊の戦で壊走した多くの源氏の兵は渡辺津を目指して山陽道を落ちた。
鎧の矢はそのままに、楯、長刀、弓矢を捨て、手足や体に負った傷より血を流した兵や武者が次々に渡辺津へ集まった。
生き残った主な将は、駿河の勝間田平蔵、美濃の泉重光、武蔵の比企能高、下総の千葉常胤、結城朝充、相模の梶原景時、北条義時、下野の足利義兼、小山信惟らだ。
総大将の源全成、尾張の大屋安資、相模の和田義盛、田代信綱、三浦義連、甲斐の安田義定らは討死したものと思われた。

京から大輪田泊へ向った源全成の率いる平家討伐軍は騎馬武者一万三千と徒歩二万の総勢三万三千を擁していたが、渡辺津へ逃げ戻ったのは騎馬武者七千と徒歩一万千の一万八千に減少していた。

義経の郎党、佐藤継信、鎌田盛正の二人は渡辺津へ戻った将を探し、坐摩神社（いかすりじんじゃ）（大阪市中央区）の境内へ入った。

境内では周囲を二十人の郎党に警護され休息していた北条義時に出遭うと、義経の郎党と名乗り義時の床几の前に出た。

「そなたらは義経殿の郎党か。今、義経殿は何処におる。手元の軍勢はどれほどだ」

北条義時は佐藤継信と鎌田盛正の二人を矢継ぎ早に問い質した。

「丹波亀山の地で平家の山陰道軍を撃破した後、摂津と山城の境にある山崎の地に進出し、一万の兵で陣を構えております」

「既に我らが大輪田泊で敗れた事は知っておるな。もう半日もすれば、平家は勢を揃えてこの渡辺津へ攻込んで来る。その前に我らは山崎の地へ戻り、義経殿の軍勢と合体して平家の軍勢を食い止め手立てを立てねば。さもなくば、京の地が危うくなる。そなたらのうち一人は義経殿の下へ至急に戻り、この事を伝えよ」

「この地で平家を迎え撃つ事は・・・・」

「この源氏勢の有様をよく見よ。京を出る時は三万以上もあった軍勢が今はその半近くに減り、楯や弓矢、太刀なども投げ捨ててきた。しかも、総大将の全成殿は平家に討たれ、指揮を執る者が居らぬ。この軍勢では到底戦えぬわ」

義時は吐き捨てるように言い放った。

「ですが、中には煩い方もおられましょうが」

「軍監の梶原殿辺りは色々と言うかも知れぬが、必ず説き伏せる。さもなくば、鎌倉殿に命じられた事を果たさずに坂東へ逃げ戻るしかなくなるのだ」

北条義時は佐藤継信、鎌田盛正の二人に告げると、軍監の梶原景時の下へ向かった。

梶原景時は同じ坐摩神社（いかすりじんじゃ）の社殿におり、比企能高、千葉常胤と渡辺党の渡辺守嗣の三人が梶原の近くにいた。
「義時殿、よい所へ来られた。今、迎えを出そうと思っていた処だ。こちらへ」
梶原は義時を見ると、空いている円座（えんざ）を示した。
「何事ですかな。それがしも梶原殿に話があって参りましたが、まずは梶原殿より」
「この渡辺津にも、間もなく平家の軍勢が押寄せてまいる。そこで、この神社と裏の渡辺屋敷に兵を込め、平家の追撃を押し留めようと思う。義時殿には渡辺屋敷へ入り駿河の勝間田、美濃の泉、下野の足利、小山殿らと護りを固めてくれ」
「梶原殿はここで平家の勢を迎え撃とうと言われるのか」
「大輪田泊で敗れたとは言え、まだ二万近くの兵は残っておる。むざむざ逃げ戻る訳にはゆくまい」
「兵数はあっても、楯や弓矢など武具を投げ捨て、体一つで逃げ戻った者がほとんど。どのように、平家の攻撃を防げと言われる」
「それ故、渡辺殿に来てもらった。屋敷の蔵より楯、弓矢など武具を拠出してもらう」
「渡辺殿、屋敷の蔵に残っておる弓矢、楯などはいかほどか」
「九日の夜戦で多くを失ったので、三、四百ほどかと」
「そのような数では到底足りません。ここは一旦退くべきかと」
「北条殿、そなたは何処まで退く積もりだ。京か、美濃か、それとも鎌倉までか」
「義経殿が一万の兵で攝津と山城の境、山崎の地に陣を構えておる。我らも山崎まで戻り、義経殿の兵と合せ平家を迎え撃つ。いかがですかな、梶原殿」
義経の名が出た時、梶原は苦虫を噛み潰したような顔をした。しかし、その場に集まった比企能高や千葉常胤、渡辺守嗣らはほっとしたような顔をした。
「義経殿に、その策は」

「既に、物見に来た義経殿の郎党に伝えてある。我が北条勢はこれよりこの地を退き、義経殿の勢に合流する」
「そのような身勝手は軍監として許さぬぞ」
「ここで平家の勢を待ち受けても、弓矢がなくば戦えませんぞ。梶原殿」
北条義時ら四人は梶原に義経の軍勢と合流する事を迫り、梶原も最後には義経の軍勢と合流する事を承諾した。

十一月十二日の朝、山崎の天王山（京都府乙訓郡大山崎町）にある宝積寺（ほうしゃくじ）へ源氏の諸将が続々と集まってきた。
畿内勢の安達清経、佐々木定綱、後藤新兵衛、石川義賢、渡辺広綱に坂東勢の土肥実平、熊谷直実、畠山重忠、更には大輪田泊の戦で敗れた勝間田平蔵、泉重光、比企能高、千葉常胤、結城朝充、梶原景時、北条義時、足利義兼、小山信惟らだ。
「平家の勢は今日にもこの地へ押寄せてくる。その陣立を行う」
義経の言葉に梶原景時が立上がった。
「平家討伐軍の軍監は我である。陣立ては我の指示に従ってもらう」
「梶原殿、ここは義経殿の命に従うべきでは」
同じ坂東勢の千葉常胤、結城朝充、北条義時の三人が梶原を押し留め、事なきを得た。
「義経殿、どのような陣立てかお聞かせくだされ」
「この天王山の陣には安達清経、佐々木定綱、後藤新兵衛、石川義賢、渡辺広綱の畿内勢六千。岩清水八幡宮のある男山の麓に陣を築き、駿河の勝間田平蔵、美濃の泉重光ら三千の東海勢に入ってもらう。土肥実平、熊谷直実、畠山重忠殿ら三人は今まで通り四千の勢で天王山近くの丘の陰に潜む。梶原景時、北条義時、比企能高、千葉常胤、結城朝充殿ら一万の勢は円命寺川（えんめいじかわ）の土手沿いに布陣する。足利義兼と小山信惟殿の下野勢五千は淀川沿いに布陣下され」
義経は宝積寺（ほうしゃくじ）の本堂前の地面に手に持った折れ弓で天王山と円命寺川、淀川沿いの陣を半月の様に書いた。

「平家勢はこの円命寺川の陣を押し破り、京へ進もうとする。梶原殿や北条殿らが円命寺川の陣で平家の攻撃を受け止めている間に、天王山の安達殿や佐々木殿ら及び淀川沿いの陣の足利殿、小山殿は向って来る平家勢を押し返し、円命寺川の陣を攻める平家の後方へ廻る形を取って下され。更に、土肥殿ら及び男山の勝間田殿らが平家の勢の横腹を衝く。平家の連弩攻撃に際しては雑木林や丘などの陰などで避け、接近戦に持込めば我ら源氏の勝利は間違いない。我は土肥殿らとともにある」

「渡辺津の逃げ戻った源氏勢は、山崎の義経の勢と合流したか」

大輪田泊の本陣から渡辺津へ平家山陽道軍が進出したのは十一日の夕刻過ぎだ。

総大将の平知盛は、先遣隊の平教経より渡辺津の様子を告げられた。

渡辺津の渡辺屋敷やその隣の坐摩神社（いかすりじんじゃ）の境内には旗や半ば折れた大太刀や刃の欠けた長刀、弓矢が置き去りにされ、源氏勢の慌しい様子が伺えた。

先遣隊として渡辺津へ進出した平教経が町中を一通り見廻ると、傷付き歩けぬ源氏の兵や亡くなった兵が空き屋敷や町屋の中に横たわっているのを見出しただけだ。

山陽道をやって来たのは、宗盛の息子清宗とその侍大将伊藤景高、景経率いる騎馬八百、徒歩千五百が先陣。

第二陣は知盛の本陣で、侍大将伊藤景家が率いる大連弩三百基と護衛の徒歩五百、侍大将伊藤景清の率いる五百の連弩隊と五百の騎馬だ。

第三陣は菊地隆直の肥後勢が騎馬千七百、徒歩二千五百、緒方惟栄の豊後勢が騎馬千八百と徒歩二千七百、山鹿水軍の山鹿時貞（やまがときさだ）が率いる千の連弩兵、長門の岩国金秀が騎馬四百と徒歩千八百、薩摩の惟宗忠信が騎馬八百と徒歩二千八百だ。

知盛は到着した山陽道軍の主だった将を坐摩神社（いかすりじんじゃ）の社殿に集めた。

清宗と侍大将伊藤景高、景経、知盛の侍大将伊藤景家、景清、平教

経、謝国栄、肥前松浦の松浦毅、松浦直、波多保、神埼重光、筑後の山鹿秀遠、山鹿時貞、麻生家村、豊後の緒方惟栄、板井種遠、臼杵惟隆、肥後の菊地隆直、南郷惟安、川尻康高、相良延由、阿蘇忠宗、薩摩の惟宗忠信、大原信高、周防の船所正利、長門の岩国金秀ら三十名だ。

最初に平教経が山崎の源氏の陣の様子を知らせると、知盛が各将に告げた。

「明日、源氏の軍勢が陣を構える山崎の地へ進む。源氏の待ち受ける山崎の地は西国街道や鳥羽街道、淀川が通る交通の要で、摂津から京を目指す上で必ず通らなければならぬ地。天王山の麓から男山の間は十町（１０００ｍ）もない狭隘の地だ。源氏は今教経が告げた様に天王山、円命寺川、淀川沿い、男山と要害の地に陣を構え、京への行く手を阻んでおる。又、淀川の川中にも木杭を打ち込んで綱を張り、船での迂回を阻んでいる。明日の戦は困難となるが、是非にも源氏の軍勢を撃破って京を奪還する」

「知盛様、この戦は源氏を撃破る事と京を回復する事のどちらに重きを置かれます」

謝国栄は知盛に問い掛けた。

他の将は謝国栄の問い掛けの違いが分からなかったが、知盛は国栄の問いの意味を察知した。

「まずは京を回復する事だ」

「京の回復が第一であれば、山崎の地で源氏への陣を構えて動かずおれば、山陰道軍により京を回復する事が出来ます」

「だが、義経が山陰道軍の動きを掴み、山崎の陣より兵を京へ向ければ」

「そうなれば、山崎の陣は手薄となり、楽に攻略が行えます」

摂津渡辺津から天王山のある山崎の地まで騎馬で三刻（６時間）ほどだ。

十一月十二日早朝、総勢二万二千の平家山陽道軍は山崎の地へ出陣

した。
その出陣に先立ち総大将の平知盛は水軍の兵を率いて加わった平教経を呼んだ。
「義経なら必ず何処かに伏勢を隠しておる。新たな物見で隠し陣の場所を探れぬか」
「我が水軍の者は松浦や山鹿など西国の者で、皆、京は今回が初めて。平家本軍より京の地を知る者を出した方がよく判るのでは」
知盛は直ちに侍大将伊藤景清を呼んで山崎の源氏の陣の物見を命じた。謝国栄も知盛に願い伊藤景清の物見の部隊へ加わった。
平家の侍大将伊藤景清は百騎の騎馬武者を率い、謝国栄と一緒に山崎の地へ向かった。
摂津と京を結ぶ西国街道や淀川は京へ荷を運ぶ荷船、荷を積んだ牛車、行商人、近在の農民や商人などが頻繁に行き交っている。
だが昨日、今日は平家と源氏の戦が間近いとの噂が流れ、西国街道を通る者は平家の兵以外にはいなかった。
京へ向う途中の江口や神崎など妓楼が集まる里には人影が見られたが、その他の集落には人影はなく、無人の野に冬枯れの田畑や雑木林などの原野がただ広がるだけだ。
守口、枚方を越え芥川（高槻市）に近づくと、左手に西山山系の山々が迫ってきた。
「なるほど、序々に山が迫り、原野が狭くなってくる。源氏が得意とする騎馬を駆け合わせる戦には向くておるが、大連弩を運用するには向いてません」
謝国栄は窪地や石などの障害物が多い地面を指した。
伊藤景清の物見隊は軽快に馬を駆け、昼前には天王山や淀川沿いの源氏の陣が見通せる僅かな丘に上がった。
丘から見渡すと、天王山から淀川、男山に掛け半円を描き京への進路を塞ぐ形で源氏は陣を構えていた。
源氏の白旗は風になびき、幔幕や逆茂木、楯を並べた陣が見て取れる。

国栄は懐から筆と紙を取り出すと、目の前に広がる源氏の陣の様子を書き写し始めた。
「うーむ、中々の布陣。何処に突破口があるのか」
伊藤景清は源氏の陣構えを見て呻き声を上げた。
「正面の円命寺川（えんめいじかわ）の陣を突破しない事には京への道は開きません。しかし、正面、天王山、淀川沿いの三面を同時に相手としなければ、いずれかより挟撃されます。あの辺りの天王山の麓から円命寺川の陣に掛けてある小さな丘は伏勢を隠すのにちょうどよい場所です」
謝国栄が伊藤景清に三箇所ほどの丘を指し示した。次ぎに、物見隊は淀川の様子を見るべく丘を下りた。
この物見隊に気付いた淀川沿いに置かれた源氏の陣より、百騎ほどの騎馬武者が向かって来た。だが、伊藤景清はこの源氏の騎馬武者らを相手とせず、摂津方面に引上げた。
山崎の地へ向かう平家山陽道軍の本隊に出会ったのは、摂津の守口（守口市）辺り。
先陣の中央を進む総大将平知盛の馬に伊藤景清と謝国栄の二人が馬を並び掛けた。
「源氏の陣はどうであった」
知盛は単刀直入に聞いた。
「天王山から淀川沿い引かれた源氏の陣は、京への道を覆い隠す様にございます。正面からの突破を図れば、間違いなく左右に置かれた天王山と淀川沿いの陣からの攻撃を受けます。天王山、淀川沿いに押さえの陣を置き、正面突破を図るしかありますまい」
「国栄、景清の策をどう思う」
「景清殿の策は順当かと。山崎の地は田畑や原野などの地が続き、今までの戦の様に大連弩で騎馬武者を制圧するのは困難と思われます」
更に、国栄は懐から取り出した絵図を知盛へ手渡し、告げた。
「×印は伏勢を忍ばせておくのに格好の場所と思われる処です」

同じ十二日、丹波の福知山（京都府福知山市）において平資盛率いる山陰道軍は再び、京の街の回復を目指して動き出した。
資盛の侍大将平盛澄の郎党で大江盛次が大輪田泊にある山陽道軍の知盛の下へ使いして戻ってきた。
山陽道軍が大輪田泊に上陸し、摂津から京を目指している事を大江より聞いた資盛は直ちに京へ進むことを決意した。
義経の率いる畿内、坂東の勢に丹波の亀山（京都府亀岡市）で散々に撃破られ、総大将資盛自身も手傷を負い、弟の有盛は熊谷直実に討取られた。
手傷を負い動けない兵、屍を山陰道に晒したままの兵、丹波の山中に逃散した兵などで一時は一万五千はあった山陰道軍は六千ほどに減少したが、兵の士気は衰えてはなかった。
福知山（京都府福知山市）に揃った山陰道軍は侍大将の平盛澄の下に平家本軍の騎馬、徒歩合わせて千。長門の紀光則は騎馬、徒歩合わせて三百。筑後勢は山鹿秀遠の下に騎馬千、徒歩千五百。日向勢は宮崎惟直の下に騎馬五百、徒歩千。水軍より転じた阿波、土佐、讃岐の兵は田口重直の下に連弩兵二百を含む七百の徒歩だ。
資盛は京方面に出した物見より、義経の率いる勢は攝津と山城の境の山崎へ進出して、知盛の山陽道軍を待構えており、京に残る源氏の兵はごく僅かとの知らせを受けていた。
「盛澄、騎馬武者二千を率い迅速に京へ入れ。院御所の六条西洞院を押さえ、後白河院の身柄を確保するのだ」
院の身柄を確保するには、後白河院の側近に気付かれぬよう、夜明け前に院御所の包囲を行わなければならない。だが、資盛が率いる山陰道軍の中で京の街をよく知るのは平家本軍の兵のみで九州、西国の将、兵は京へ入るのは皆今回が始めてで、内裏が何処にあり、院の御所が何処にあるのかを知る者はいない。
盛澄は平家本軍の騎馬武者三百の中より伊勢藤吾、城三郎介、渡利紀平太、馬場吾朗治など騎馬武者五十騎を山鹿秀遠や宮崎惟直らに付け、筑紫勢、日向勢の京での案内役とした。

福知山より丹波口までの山陰道に源氏の勢が居ない事は物見で判明している。徒歩を伴わぬ行軍であれば、福知山から丹波口まではほぼ半日の行程で行ける。
十二日の夜半過ぎ、盛澄は自ら先団に立ち深夜の人馬の通行が途絶えた山陰道を進んだ。
先導する騎馬武者は松明の灯り持ち、その明りを頼りに平家の騎馬武者は粛々と夜の山陰道を進んだ。
丹波の亀山（京都府亀岡市）から老ノ坂の大江の関を抜け、桂川を渡り五条の丹波口に立ったのが七つ（午前４時）前。
此処からならば六条西洞院まで騎馬で四半刻（３０分）もかからない。
十一月の寒い時期に、起き出している者は殆どいない。だが、二千もの騎馬武者が進めば馬蹄の音が六条大路に「どし、ドシ」と響く。慌てて飛び起きて門の隙間や戸の隙間より鎧兜で武装いた騎馬武者を見た京の人々は、再び門や戸を堅く閉ざした。
十三日の七つ（午前４時）過ぎには、平盛澄率いる平家の騎馬武者が院御所の六条西洞院を取り囲んだ。

六条西洞院が平家の騎馬武者に取り囲まれるほんの僅か前。
外に響く馬蹄の音に慌てて飛び起きた蔵人葉室光雅（くらんどはむろみつまさ）は脇門より六条大路に飛び出した。
「何者だ。何者がやって来たのだ」
葉室光雅は少しの間六条大路を走り、馬蹄の聞こえる方を見ると顔色を変えて戻った。
「お起きください。平家の武者どもが間もなくやってまいります」
葉室の言葉に既に仮衣に身支度を整えた後白河院が寝間より出てきた。
「慌てるでない。裏手から関白の九条の屋敷へ向う」
「大蔵卿殿らへの知らせは」
「我がこの屋敷にいなとわかれば、九条の屋敷へ来る事になってお

る」
後白河院が寝間から裏手の北対へ歩いている途中に、正門の前に集まった平家の武者が門扉を打ち、大声で開門を叫ぶ声が聞こえた。
「光雅、藤原光能に平家の相手をさせて時を作れ。その方は我の供をせよ」
後白河院は慌しく六条西洞院を裏手に抜け、町尻小路から七条大路へ向った。
六条西洞院に残った蔵人藤原光能は震え声を押し殺して門前の武者を叱責した。
「ここは、後白河法皇の御所である。開門を迫るとは無礼である。直ぐに下がれ」
「院の御所とは承知の上。開門せねば、この門を打破り押し入るぞ」
武者の声と同時に門扉を大槌が打ち、「メキメキ」と音を上げた。
「止めろ、止めろ。今、開門する」
藤原光能は悲鳴のような声を上げ、雑色に開門を命じた。
騎馬のまま先頭で門を入った黒糸縅の鎧の武者が名乗りを上げた。
「我は、近衛中将平資盛が郎党で左衛門尉平盛澄と申す。資盛様の命により後白河院にお目に掛かりたい。ご案内下され」
「院におけれては昨日より他出中で、この御所には居られません。お引取り下され」
盛澄の迫力に押されながらも、光能は院の不在を告げた。だが、盛澄はその言葉を信じてはいない。
「院がご不在かどうか、中を探させてもらう。そなたにも一緒に来てもら」
盛澄は蔵人の藤原光能を引きずるようにして、五十人ほどの武者とともに屋敷の中へ入った。侍所から東対から寝殿、細殿など各部屋の几帳を捲り、衝立を押し倒して中を改めたが、後白河院の姿は何処にも見えなかった。
「院は何処へ逃げたのだ。正直に答えろ」
盛澄は藤原光能に太刀を突きつけて問い質したが、光能は震えなが

らも「行き先は知らぬ」と言張った。
盛澄は平家本軍の伊勢藤吾、城三郎介の二人に五百騎を与え、六条西洞院付近の探索と包囲を命じ、自身は里内裏が置かれた二条の閑院第へ残りの勢を率いて向かった。
閑院第は元左大臣藤原冬嗣の屋敷、荒廃した本内裏の代わりに使われており、後鳥羽天皇の即位も閑院第で行われた。
盛澄の率いる騎馬武者は馬を駆け、西洞院通りを六条から二条まで上がると白い塗塀に囲まれた閑院第を包囲した。
「我は、近衛中将平資盛が郎党左衛門尉平盛澄だ。抵抗すれば、力ずくで押し通る。そこを退け」
盛澄は閑院第の門前で制止する近衛府の武者を押し退け、屋敷の中へ押し通った。閑院第は突然押し入ってきた平家の騎馬武者に女官や雑色が驚き逃げ惑い、混乱を極めた。
「誰か居らぬか。我は、近衛中将平資盛が郎党左衛門尉平盛澄だ。資盛様の命で尊成親王（後鳥羽天皇）を迎えに参った」
平家では安徳天皇の在位が続き、三種の神器もなく後白河院の院宣のみで即位した後鳥羽天皇を認めてない。この時、後鳥羽天皇も僅か五歳で、母の七条院殖子に抱かれ震えていた。

「京洛《きょうらく》の攻防」　その2

「京洛（きょうらく）の攻防」　その2

同じ十一月十三日の山崎の地。朝日を背に受け、粛々と進む平家の山陽道軍は待ち構える源氏の陣へと迫った。
第一陣は宗盛の息子清宗の侍大将伊藤景高、景経が率いる平家本軍の騎馬八百、徒歩千五百、謝国栄の大連弩三百基、知盛の侍大将伊藤景家率いる徒歩五百と連弩隊五百、平教経が率いる二千五百の水軍の兵、緒方惟栄の豊後勢が騎馬千八百と徒歩二千七百が加わり一万以上の兵力だ。
第二陣は肥後の菊地隆直が率いる騎馬千七百、徒歩二千五百に山鹿水軍の連弩隊五百が加わり、第三陣は薩摩の惟宗忠信が騎馬八百と徒歩二千八百に同じく山鹿水軍に連弩隊五百が加わっていた。
最後の本陣には総大将平知盛の警護に付く侍大将伊藤景清の騎馬五百と予備となる長門の岩国金秀の騎馬四百と徒歩千八百だけだ。
清宗に命じられたのは円命寺川（えんめいじかわ）の源氏の陣を突破し、京への道を切り開く事だ。
第一陣の清宗の隊の中でもその先頭に立つのは能登守平教経が率いる水軍の兵、豊後勢の徒歩の五千だ。
彼らは楯、弓矢を構え、源氏の円命寺川の陣へ向った。
教経の部隊の直後には謝国栄の大連弩三百基と侍大将伊藤景家が率いる徒歩五百と連弩隊五百が続き、清宗は侍大将伊藤景高、豊後の緒方惟栄らと後方の騎馬武者の中にあった。
当初、総大将の知盛は国栄より山崎の地が大連弩の進退を行うに不都合な場所だと聞かされた時、大連弩抜きで戦う事を考えた。
しかし、源氏の騎馬武者を倒すには大連弩が不可欠だとの思いに達し、国栄に大連弩の出陣を図った。
国栄はこの戦で大連弩を失っても、射手や馬手、給手の者さえ残れ

ば、何時でも再建出来るので、この戦で大連弩をすり潰しても構わぬと、自ら大連弩の指揮を買って出た。
第二陣の肥後勢、第三陣の薩摩勢は先陣の清宗の勢が円命寺川の源氏の陣を抜く間、天王山と淀川沿いに陣を敷く源氏勢を押さえ込むのが役目だ。
知盛の本陣は第一陣の清宗隊の後方、山崎の集落近くの小さな丘に置かれ、全体の戦況を見ながら源氏の伏勢に備えた。
知盛の本陣で打ち鳴らす攻め太鼓の音が山崎の地に展開する平家勢の上に鳴り響くと、平教経は大声で兵を叱咤した。
「駆けろ。楯を構えて駆けろ」
教経は自ら長刀を小脇に抱えて、兵の先頭で円命寺川の源氏の陣へ駆けた。
冬の乾いた原野を平家の兵は土煙を上げて駆け、教経の後に続いた。
大連弩三百基と護衛の徒歩五百、連弩隊五百はその徒歩の立てる土煙に紛れて進んだ。
平家の兵が進む様子を円命寺川の土手上から眺めた梶原景時が大声で叫んだ。
「平家勢の先陣は徒歩のみだ。連弩は見えぬ、蹴散らすぞ。」
円命寺川の陣に構えた源氏の比企能高、千葉常胤、結城朝充の勢が先鋒として、梶原の声応えて出陣した。
「接近すれば、連弩は使えぬ。騎馬を駆けさせよ」
「今までの雪辱を果たす時がきた。平家の兵を叩き潰すのだ」
比企能高、千葉常胤、結城朝充らは鎧兜に大太刀、長刀、弓矢の騎馬、徒歩の六千を率い、浅い円命寺川を越えて平家の先陣目掛けて駆け出した。
平教経は本陣より五町（５００ｍ）ほど進んだ処で、楯を並べ、弓矢を構えるよう命じた。
源氏の先陣、土煙を上げて駆ける騎馬とはまだ五町（５００ｍ）はあるが、余り手元まで源氏の騎馬に入られたくはない。

「矢を放て。続けて放て」
平家の兵は一斉に大地に跪き弓を引き絞り、矢を放った。
朝の空が数千本の矢で覆われ一瞬薄暗くなり、大地に矢が突き刺さった。
だが、源氏の騎馬武者にはまだ届かない。一町（１００ｍ）ほど手前に矢は落ちた。
だが、続く第二射は上空より源氏の騎馬武者の上に落ちた。
上空より降り注ぐ矢を避ける為、源氏の騎馬武者は馬上に伏せ、兜の錣（しころ）を傾け馬を駆り、徒歩を後方に置き去りにして突進してきた。
矢張り、徒歩の矢だけでは源氏の騎馬武者の突進は止められない。
教経が合図を送ると、謝国栄の率いる大連弩三百基が源氏の騎馬武者目掛け矢を放った。
大連弩の第一射で百騎近くの源氏の騎馬武者が山崎の大地に血を流して倒れ伏した。続けて第二射、第三射と大連弩の矢が射込まれる度、源氏の騎馬武者は山崎の地に倒れた。
大連弩の直ぐ脇には連弩を構えた兵が立ち、大連弩の矢を掻い潜り接近する源氏の武者を警戒した。
源氏の騎馬武者は大連弩の攻撃に無理な突進をやめ、原野の途中にある雑木林や僅かな丘陰などに隠れた。
「後ろから騎馬武者が出る。注意しろ」
教経は手に持った長刀を振り、徒歩の兵や連弩の兵に大声を掛けた。
戦の喧騒が辺りに満ち、教経の声も全ての兵には届かないが、背後から迫る騎馬の馬蹄の音に慌てて徒歩は場所を開けた。
清宗の侍大将伊藤景高、豊後の緒方惟栄が率いる二千六百の騎馬武者が、源氏の騎馬武者に対抗する為、前に進出した。
平田家継（ひらたいえつぐ）、伊賀家長（いがいえなが）、高橋長綱（たかはしながつな）、館貞保（たてさだやす）、秋山光朝（あきやまみつあさ）ら平家の武者は馬上で弓を構え、馬を駆けた。
源氏の比企、千葉、結城の騎馬武者も馬上で弓を構え、半町（５０ｍ）ほどの距離でお互いに矢を交わし、接近して大太刀、長刀で撃ち合い、組伏せて相手の首を掻こうと地面を転がりながら組合った。

天王山の源氏の陣へ向った肥後の菊地隆直が率いる騎馬千七百、徒歩二千五百、山鹿水軍の連弩隊五百と淀川沿いの源氏の陣へ向った薩摩の惟宗忠信が率いる騎馬八百、徒歩二千八百に山鹿水軍の連弩隊五百は、夫々源氏方の陣の二町（２００ｍ）程手前に楯、逆茂木を並べた陣を築き、連弩と徒歩の弓で源氏勢の突出を押え込むことだ。無理な攻撃を行う必要はない。

平家の五百の連弩が矢次早に放つ矢に対抗して、淀川沿いの陣の足（あし）利義兼（かがよしかね）、小山信惟（こやまのぶこれ）の下野勢も矢を応酬したが、平家の陣まで届かない。一方的に平家の矢を浴びるだけだ。

「このまま一方的に攻められるだけでは、兵の士気も上がらぬぞ。兵を出しあ奴らを蹴散らせぬか」

この陣を任された足利義兼は苛立った声を上げた。

「真っ正直に突出すれば、連弩の餌食となるだけですぞ」

小山信惟は足利義兼を諌めたが、足利義兼の我慢は限界に達していた。

「兼高、三、四百騎ほどであの連弩の兵を襲撃出来ぬか」

足利義兼に呼ばれた郎党の仁木兼高（にきかねたか）は平家が連弩の陣を構えた辺りを見回した。

「あの雑木林の中を密かに抜けられればどうにか。但し、我らが進む間は矢を盛んに射て、平家勢に悟られぬようして下され」

仁木兼高は足利勢の中より徒歩三百を連れ、淀川土手際の枯れ野を掻き分け、橡（けやき）や楢（なら）、椎（しい）などの雑木林の中に潜り込んだ。

三百の徒歩は腹巻に兜、大太刀のみを持ち音を立てぬように雑木林の中をもくもくと歩いた。陣ではお互いの矢の応酬合戦が続き、楯に刺さる矢音、矢に射られた兵の悲鳴が盛んに聞こえた。

雑木林の中を進むこと四半刻（３０分）、雑木林の向こう側に平家の連弩兵の姿が見えた。

仁木は兵を率いて一町（１００ｍ）ほど近づいたが、平家の兵はまだ気付かない。

更に歩みを速め、半町（５０ｍ）までに近づいた時、平家の兵が気付いた。
「源氏だ。源氏の兵が横に廻ったぞ」
その声を合図に仁木は腰の大太刀を抜き、平家の連弩兵目掛け駆け出した。
平家の連弩兵も仁木らの方を向いて連弩を構え直し、矢を放った。
仁木らのお陰で淀川沿いの源氏の陣へ向う矢の数は減少した。
「今だ。この隙に騎馬を出せ」
足利義兼の命で足利勢だけでなく、小山勢の騎馬武者合わせて千五百が楯、逆茂木を避け、一斉に平家の陣へ馬を向けた。
「平家の騎馬が向ってくる。我らも騎馬を出せ」
薩摩の惟宗忠信（これとうただのぶ）も騎馬武者を出したが、その数は源氏の半数。勢いにも明らかな差が有り、惟宗（これとう）の騎馬武者は押されて下がり始めた。
「いかん、薩摩が押されておる。岩国を薩摩勢の応援に向わせろ」
本陣のある丘の上からこの様子を見た総大将の知盛が、脇に控えた侍大将の伊藤景清に命じた。
「長門勢だけでは数が不足、我が勢も応援に向いますぞ」
「そなたの勢は義経の伏勢に対するもの。ここは岩国殿の応援だけで耐えて貰わねば」
長門の岩国金秀は四百騎の騎馬武者を率いて薩摩勢の応援に向ったが、その途中に平家の連弩隊と戦う源氏の徒歩に遭遇した。
「まずは、あの源氏の勢を蹴散らす」
岩国金秀は小脇に抱えた長刀を構え、仁木兼高が率いる足利勢を後方より襲った。
岩国が左右に長刀を振るう都度、血を流し、悲鳴を上げて源氏の徒歩は倒れた。既に、薩摩勢も山鹿水軍の連弩隊を助けようと、人数を向けていた。仁木の勢は二人、三人と血を流して倒れた。
岩国勢は仁木の兵は薩摩の徒歩に任せ、足利、小山の騎馬武者を横撃した。山鹿水軍の連弩隊も再び矢を騎馬武者へ向けた。
天王山に陣を構えた安達清経、佐々木定綱、後藤新兵衛、石川義賢、

渡辺広綱の畿内勢の戦意は、足利や小山の坂東勢に比べ低かったが、同じように一方的に連弩の矢を射込まれる状況には耐え切れなかった。

「我が手勢で麓の雑木林を迂回してあの連弩兵の横を衝く。それに合わせ、兵を出せ」

佐々木定綱は隣の陣の河内の石川義賢と摂津の渡辺広綱に伝え、五百の手勢を率いて雑木林の中へ分け入った。

天王山の陣を攻める平家勢は肥後の菊池隆直の勢と山鹿水軍の連弩兵だ。菊池勢では戦意盛んな木原盛実（きはらもりみつ）、南郷惟安（なんごうこれやす）が夫々五百の徒歩を率いて源氏の陣を奪おうと、山鹿水軍の連弩兵が源氏の矢の反撃を押さえ込む中、逆茂木を取り除き雑木林の中をジワジワと天王山の源氏の陣へ接近していた。

天王山の麓の雑木林の中で近江の佐々木勢と肥後の菊池勢が遭遇した。

「源氏の兵だ。源氏が隠れておる」

木原盛実に率いられた兵は腰の太刀を抜き、手に持った長刀を構え直した。木々の幹や枝に邪魔されるが、太刀や長刀を力任せに振回し相手を倒そうとした。

組み合った相手は倒して馬乗りになり、鎧通しで留めを刺そうと枯葉や枯れ枝の上を転げ回った。だが、菊地勢、佐々木勢共に相手に発見された為、後方の兵より引上げて小競り合いに終始した。

朝の六つ半（午前7時）頃に始まった戦は、お互いに決め手に欠き、一刻（2時間）もすると膠着状態に陥った。

平家、源氏お互いに死傷する兵が増え、兵の引き時を見計らっていた。

「義経殿、そろそろ我らが出番ですな」

「平家の攻撃も当初の勢いがなくなりました。この四千の勢が加われば流れは一気に源氏のもの。平家の先陣にある大連弩をまず潰しましょう」

天王山麓近くの丘陰に隠れた土肥実平、熊谷直実、畠山重忠の四千の伏兵は義経とともに、清宗の陣を目掛けて馬を駆けた。

「源氏の新たな勢の出現だ。残る我が勢は少ないが、奴等の進出を押し留めなくては清宗の陣が危ない」

侍大将伊藤景清が率いる五百の騎馬武者は総大将の知盛とともに出陣した。知盛は侍大将の伊藤景清と馬を並べ、新たな源氏勢に向った。

しかし、源氏勢の方が一歩早く大連弩の隊列に迫った。

既に、この時には大連弩の隊列の付近では、源氏の梶原景時の勢と教経の勢がお互いに攻防を繰り広げ、大連弩の隊列は二百五十基までに減少していた。

接近戦が繰り広がられているにも関わらず、謝国栄は大連弩による源氏の騎馬武者の攻撃を止めず、「左」「右」と源氏の騎馬武者の動きを的確に指示し、大連弩より矢を放ち続けた。大連弩の隊列の防御は後方に控える侍大将伊藤景家が率いる半間（９０ｃｍ）の連弩を持つ五百の連弩兵と長さ一間半（２．７ｍ）の三叉槍を持つ五百の徒歩に任せていた。

「連弩兵、あの騎馬武者を狙え」

横手より新たに現われた土肥、熊谷、畠山ら四千の源氏勢を狙うよう伊藤景家は連弩隊に命じた。だが、大連弩の隊列護衛で分散した連弩兵の矢は、新たに現れた土肥らの騎馬武者へ集中出来ず、その威力は半減した。

「あの大連弩を倒せ、打倒すのだ」

突入して来た土肥実平がしわがれ声で配下の兵を叱咤し、畠山重忠、熊谷直実も配下の兵を叱咤し励まして、馬を駆けた。連弩の矢を受け落馬する武者、矢を受けて倒れる馬が続出した。

「駆けろ、駆けろ」

義経も郎党の佐藤継信、鎌田盛正、鎌田光政、伊勢義盛、片岡常春、武蔵坊弁慶、常陸坊海尊ら五十騎を引連れ馬を駆けた。

土肥や畠山、熊谷は兵の犠牲には目もくれず、大連弩まで一町（１

００ｍ）へ迫った。
「大連弩を捨てよ。逃げろ」
謝国栄はこの源氏の騎馬武者を見て射手や馬手、給手に命じた。
伊藤景家は三叉槍で武装した五百の徒歩を引連れ、大連弩の射手や馬手、給手を庇うように前に出た。
「隊列を組み、前に構えろ」
景家は大声で徒歩に命じ、十騎の郎党を引連れ、長刀を構えて源氏の武者の中に馬を駆け入った。その後に三叉槍を構えた徒歩が続いた。
「我は征東都督（せいとうとと く）中納言平知盛様が侍大将の伊藤景家なり。我と思わん者は掛かってまいれ」
景家が名乗りを上げると、黒糸縅の鎧兜、青鹿毛の馬に跨った武者が現われた。
「伊藤景家殿とはよい敵なり。我は武蔵の国は熊谷郷の熊谷直実（くまがいなおざね）なり。尋常に勝負」
熊谷直実は頭上に大太刀を構え、伊藤景家に向い馬を駆けさせた。
熊谷と伊藤はお互いに馬を掛け合わせ、大太刀と長刀で打合い、力で相手を叩き落とそうと「ガッツ、ガッツ」と音を発てた。
三合、四合と打ち合う内に直実の力が勝った。景家は長刀を取り落して落馬し、熊谷は鎧通しを手に景家の上に馬乗りとなり、景家の首を掻き切った。
「平家の将、伊藤景家を熊谷直実が討取った」
大声で叫ぶ直実の声が響くと源氏の騎馬武者の勢いは増し、三叉槍を大きく構えて振り回し、源氏の騎馬武者を寄付けぬように戦っていた平家の徒歩が一人、一人と源氏の騎馬武者に討取られた。

「火を放て、火だ」
謝国栄が響くと、馬手が放棄した大連弩の台車に火矢を放った。馬手は大連弩から逃出す時、壷に入れて持参した油を台車や周囲の枯れ草に撒いた。

大連弩を一台たりとも源氏に渡す積りはなかった。一台の大連弩がブスブスと白い煙を上げたと思う間もなく燃え上がると、その火が横に並ぶ大連弩の台車に次々と燃上った。
三百基の大連弩が一斉に炎を上げ、山崎の原野の中央に四町（４００m）もの長さの炎の帯が出現し、その炎の帯が源氏勢を二つに引き裂いた。
大連弩の燃え盛る炎の先に進み、平家の清宗の勢に迫っていたのは円命寺川に陣を構えた梶原景時（かじわらけげとき）、北条義時（ほうじょうよしとき）、比企能高（ひきよしたか）の勢に加え、土肥実平（どひさねひら）、熊谷直実（くまがいなおざね）の伏勢。
一方、炎の列を踏み越える手前には伏勢の畠山重忠（はたけやましげただ）、千葉常胤（ちばつねたね）、結城朝充（ゆうきあさみつ）の勢が取り残されていた。
梶山、北条らの後方を進むが突然出現した炎の帯に驚き、徒歩の者は脚を止め、騎馬武者は馬の脚を緩めた。
「どうした。目の前に平家の勢いるというに、何故後ろの兵が遅れる」
先頭に立って進んでいた梶原景時が不審に思い馬の脚を止めた。
「後方に出現した炎の帯で、退路が断たれました」
後方より馬を駆けてきた梶原の郎党が告げた。景時も慌てて後方の様子を窺った。
すると、五町（５００m）ほど後方に、長さが数町（数百m）及ぶ炎と白煙の帯を見て、前進するのを躊躇した。
「梶原殿、何故馬を止める」
馬を駆けさせて来た土肥実平が、梶原の動きに不審を覚え、質した。
「後方が断たれた。ここに取り残される恐れがある、陣へ引き返そう」
「あと一息で平家勢に大打撃を与えられる処。何故、前に進みませぬ。このような処で、迷っておれば平家の逆襲を受けますぞ」
土肥実平は前に進むことを迫ったが、梶原には中々決断が着かなかった。

「何時までも、この炎の帯は続かない。四半時（３０分）もあれば消える。その時が勝負だ。義盛と常春は天王山にある安達清経、佐々木定綱の陣へ行き、平家勢を押し包むように攻め立てろと伝えよ。継信と盛正は男山の勝間田平蔵と泉重光の陣へ行き、足利義兼、小山信惟に合流して平家勢を攻めよと伝えよ」

義経は畠山重忠の勢と共に大連弩の炎の後方に取り残されていたが、今がこの戦の山場と判断した義経は総攻めの決意を示した。

その判断は平家の総大将平知盛も同じだった。

「源氏の勢いが弱まった。今こそ源氏の勢を追い落す時だ。総勢で掛かれ」

平家の総大将平知盛は戦太鼓を高らかに打ち鳴らして、侍大将伊藤景清が率いる五百騎の騎馬武者とともに源氏勢に向った。

その戦太鼓で押されていた能登守平教経が率いる水軍や豊後勢の徒歩、清宗の侍大将伊藤景高、豊後の緒方惟栄らが率いる騎馬武者も再び、源氏の梶原、土肥、北条、比企、熊谷の勢へ大太刀、長刀を振りかざして向った。

謝国栄も三叉槍で武装した徒歩、連弩兵と大連弩の射手や馬手、給手らを引連れ、源氏勢の突き崩す様に動いた。

大連弩の射手や馬手、給手は楯を持ち、三叉槍で武装した徒歩とともに連弩兵への防御し、連弩兵が源氏の兵を射る。

伊藤景清の配下の永津兵衛、坂崎雅幸、尾上典孝、及び侍大将伊藤景高、豊後の緒方惟栄の配下の平田家継、伊賀家長、高橋長綱、館貞保、秋山光朝ら一騎当千の騎馬武者が長刀、大太刀を連ね源氏の陣へ斬り込んだ。

源氏方でも梶原景時、土肥実平、北条義時、比企能高、熊谷直実らの将が自ら先頭で、大太刀、長刀で迎え撃った。

馬と馬を掛け合わせ、「ガッツ、ガッツ」と大太刀、長刀を討ち合わせる。連弩兵は隙を狙って矢を射る。数多くの平家、源氏の将兵が山崎の地に血を流し倒れた。

日は中天に昇り、戦が始まり二刻（４時間）に達しようした四つ半（午前１１時）頃。
京の方角より砂塵を立て、馬を駆ける二騎の武者が山崎の戦塵の中へ飛び込んできた。
義経が平家山陰道軍を探らせていた郎党の鷲尾義久（わしおよしひさ）、亀井重清（かめいしげきよ）の二人だ。
「義経様、義経様は何処に」
二人は大声で叫びながら、山崎の地を駆けていたが、ようやくに畠山重忠と共にいる義経を見出すと馬から飛び降りて告げた。
「京の地が、京の地に異変が」
「京の地で何が起きた」
「平家山陰道軍の騎馬武者が京に乱入し、院御所の六条西洞院や里内裏の閑院第（かんいんだい）を包囲し、関白（かんぱく）藤原兼実（ふじわらかねみつ）、大納言（だいなごん）藤原朝方（ふじわらともかた）、中納言（ちゅうなごん）藤原親信（ふじわらちかのぶ）、平親宗（たいらのちかむね）、源通親（みなもとのみちちか）卿などの公家の方々が平家に囚われたようで」
「後白河院や後鳥羽天皇も囚われたか」
「後鳥羽天皇は閑院第（かんいんだい）にいたと聞きましたが、後白河院は不在だった様で、平家の兵が盛んに院の行方を捜しております」
亀井重清の話を聞いた義経は暫くの間、黙って何事かを考えていた。
「この地において平家を撃破っても、院の身柄を奪われては我らが負け戦だ。何としても、院の身柄だけは平家に渡す訳には行かぬ」
「では、義経殿はこの場から京へ戻られるというのか」
畠山重忠が厳しい顔で聞いた。
「畠山殿、今、京の何処かに身を潜めておられる院を保護できるのは我ら以外におりませぬ。京にある平家はいか程だ」
「今は騎馬武者二千騎のみですが、間もなく、徒歩の者も京へ入る頃。さすれば、京の平家の勢は五千を越えます」
義経は大連弩の炎で分断された畠山、千葉、結城の勢を見た。畠山、千葉、結城の勢を合わせれば騎馬武者二千、徒歩三千の五千となる。
「重忠、そなたの勢と千葉、結城の三勢で京へ向う。我に続け」

「梶原殿や北条殿にこの事を知らさなくともよいので」
「京の事を知らせれば、総崩れとなる恐れがある。梶原殿らにはこの地で平家勢を喰い止めてもらわねばならぬ」
畠山重忠は義経の言葉に肯き、千葉常胤、結城朝充にも京へ向う事を命じた。

「盛澄、後白河院はどうした。まだ、行方が分からぬか」
残りの平家山陰道軍の徒歩を率い、京へ入った総大将の平資盛は里内裏の閑院第に入ると、不機嫌そうな声で尋ねた。
「は、我らが六条西洞院を探した時には既に居らず、周辺の法住寺、六条若宮社、延寿寺などの寺社や藤原基通殿の五条東洞院や九条富小路にある藤原兼実殿の屋敷なども探しましたが、何処にも見当たりませんでした」
刻限は十一月十三日の昼を廻った頃、未明に福知山（京都府福知山市）を発した平家山陰道軍の徒歩は歩き続けてようやく京の丹波口へ到着したところだ。
「資盛様、騎馬武者は閑院第や六条西洞院の封鎖、探索などで其処此処に百騎、二百騎と分かれており、いざという時の役に立ちません。閑院第を封鎖する者、市中を探索する者、三条の粟田口、五条の伏見口、鳥羽口を封鎖する者らに分け、源氏に備えたいと思います」
「盛澄に任せる。既に知盛殿の軍勢は攝津に進み、再び源氏との戦が行われている可能性がある。我らは出来るだけ早く、院の身柄を確保し知盛殿の後詰に向わねばならぬ。東寺に我が本陣を置く。京より逃出す公卿を捕らえたら閑院第へ」
平盛澄は騎馬武者十騎に徒歩百名の組を十組作り、七条から九条に掛けての市中探索を行わせた。
又、三条の粟田口、五条の伏見口、鳥羽口の京市中への三ヵ所の出入り口には長門の紀勢の騎馬、徒歩合わせて三百の兵を向かわせ、橋、街道に竹矢来を立て、京の市中より外へ出ようとする者を禁じ、

怪しげな振る舞いをする者は容赦なく捕らえさせた。
東寺の資盛の本陣には平家本軍の騎馬二百と徒歩七百、筑後の山鹿勢の騎馬千と徒歩千、日向の宮崎勢の騎馬五百と徒歩八百、田口重直が率いる阿波、土佐、讃岐の連弩兵二百を含む七百の徒歩、計四千九百が詰めた。
平盛澄は東寺の南大門の前に逆茂木、楯を置き、楼閣の上に弓兵を並べた。
次いで、郎党の中で信頼の厚い伊勢藤吾（いせとうご）、城三郎介（じょうさぶろうすけ）の二名を呼んで命じた。
「夫々、騎馬武者十騎を率い摂津方面に向へ。源氏の軍勢の様子を探りながら、知盛様の下へ行き、我らが状況を伝えよ」
「既に、知盛様と源氏方で戦が行われている場合は・・・・」
「藤吾は知盛様の下へ我らが事を知らせよ。城は戦の様子を我らに知らせよ」

二人が出発して二刻（4時間）が過ぎ、十三日の日は傾き始めていた。
「西国街道上に砂塵。何騎かの騎馬武者が駆けて参ります」
楼閣の屋根に上がった見張りの兵が大声で知らせた。
「味方か、源氏の勢か」
東寺の境内にある堂や庭で、鎧の紐を緩め、兜を脱ぎ、思い思いに休息していた平家の兵に一斉に緊張が走った。
弓兵、連弩兵は楯の後ろ、塗塀の後ろへ走り、楼閣に昇り矢を番え、騎馬の者は馬の腹帯を締め直し、兜を被り、弓を持ち騎乗した。
「お味方です。味方の騎馬が戻ってきました」
見張りの兵の知らせが聞こえると、弓兵、連弩兵は緊張を緩め、矢を外して弓を置いた。戻ってきたのは昼過ぎに摂津方面へ向った城三郎介（じょうさぶろうすけ）以下十騎の騎馬武者だ。
早足で南大門を通過し、資盛の本陣が置かれた講堂の前で下馬した城三郎介が弾んだ息のまま告げた。

「後一刻もすれば、源氏勢が押寄せてきます」
「どの辺りで、源氏勢を確認したのだ」
「伏見の羽束師（はつかし）（京都市伏見区）の森辺りです。騎馬、徒歩合わせて五百ほどの源氏勢がこちらに早足で向ってくるのを発見しました。その背後には、凡そ五千以上の源氏勢が後続しているように見受けました」
「源氏の将は誰だか判るか」
「先行する源氏勢の旗印は月星紋（げっせいもん）、下総の千葉常胤（ちばつねたね）の勢かと。後続の勢は不明です」
城三郎介の知らせを聞いた資盛は盛澄に命じた。
「戦の用意だ」
境内の各所で休息していた平家の兵が一斉に立上がり、再び戦の仕度を始めた。
「資盛様、市中探索に向わせた兵及び粟田口や伏見口、鳥羽口の警備を命じた紀光則（きのみつのり）殿の勢はいかがしますか」
「急ぎ、呼び戻せ」
盛澄が使いの者を手配しているところへ、市中探索へ向かった渡利（わた）紀平太（りきへいた）の組が一台の網代輿を護送して、講堂の前にきた。
「紀平太、その輿はどうしたのだ。何者が乗って居る」
「盛澄様、後白河院が乗っております」
渡利紀平太は輿丁に講堂の前に輿を下ろさせた。
紀平太の声で、侍大将の平盛澄だけでなく、総大将の平資盛も講堂の階段をおり石畳上に下ろされた輿を見た。
輿の直ぐ脇には粗末な仮衣姿の蔵人（くらんど）の葉室光雅（はむろみつまさ）控えて、網代の戸を開けた。
「資盛か、我をどうする積もりだ」
輿の中から後白河院が姿を現わし、資盛と向かい合った。
「総大将の知盛殿が来るまで、ここに留まっていただきます。輿にお乗り下さい」
再び院を網代輿に乗せ、渡利紀平太に警護を命じた。

「院をどうなさるので」
「知盛殿も未だ決めては居らぬと思う。まずは、目の前に迫る源氏をどうするかだ」
「源氏が三郎介の知らせ通りであれば防げぬ事はありません。ですが、この場で夜戦となれば苦戦はまぬがれません・・・・・」

十一月十三日の日は落ち、薄青い月明かりが東寺の五重塔を照らし出していた。
南大門の前には篝火が焚かれ、境内にも何十箇所もの篝火の灯かりが輝いていた。
やがて、上鳥羽の方面より数百もの松明が東寺を目指し、近づいてくる。
山崎の地で平家山陰道軍の京への乱入を聞いた源義経が、平家の山陽道軍との戦の最中にも関わらず、畠山、千葉、結城の凡そ五千の勢を率いて戻ってきたのだ。
東寺の灯かりを見た源氏の勢は、松明を消し薄暗い月明かりを頼りに接近してきた。
南大門の楼閣の上より見ると、黒い塊がジワジワと寄せてくる気配が感じられる。
だが距離は三町（３００ｍ）以上もあり、連弩の矢頃にも遠い。二百の連弩兵を率いて、南大門の上に上がった田口重直（たぐちしげなお）の脇には、夜目で十町（１０００ｍ）先まで見分ける事が出来る阿波水軍の村上兵介が控えていた。
「間もなく矢頃に入ります。矢の仕度を命じてくだされ」
兵介の言葉を受けた田口が連弩兵に命じた。
「五射まで連続で射ろ。その後は直ぐに階段を降りて裏手に廻れ」
阿波水軍の戦船から岡に上がった二百の兵が一斉に連弩を引放った。
闇の中に楯を撃つ音、兵の悲鳴、倒れる音、南大門へ向けて走る音が連続して起きた。連弩に続いて「ザワ、ザワ」と羽音を立て、薄暗い月明かりを消すように夜空に千以上の矢が一斉に放たれた。

その矢も続けて三回射られると、平家方からの攻撃が止み、辺りは急に静かになった。
「火矢だ、火矢を射込み、平家の兵をいぶり出せ」
矢の攻撃に苛立った、下総の千葉常胤(ちばつねたね)が兵に命じた。
闇の中にゆらゆらと揺れる炎の列が現れると、南大門や塗塀、境内の様々な箇所から白煙が上がり始めた。
千葉勢の火矢攻撃に応じ、右手を進む結城勢も火矢の仕度を行い攻撃に加わった。
赤い炎が何百本も夜空を飛び、東寺の境内や建物からは白煙が立ち上った。
「止めい、止めい。矢を射るのを止めい」
畠山重忠の大声が闇の中に響いたが、興奮した兵らは火矢を射るのを中々に止めない。
「よく見ろ、相手からの反撃はまったくないぞ」
畠山のその声で源氏方の兵が矢を射るのをやめて周囲に様子を見ると、東寺の境内で燃え盛る炎の音は聞こえてくるが、矢の音や兵の喊声は聞こえない。

「寺の中に平家の勢がおるか確かめてくる。付いてまいれ」
千葉常胤(ちばつねたね)は百騎程の手勢を率いると、南大門に騎馬を進めた。
常胤は堂々と馬上で胸を張り、真一文字に口を結び、前を見ていた。
源氏勢はその千葉勢の動きをじっと見ていた。粛々と進む千葉勢が南大門を潜り境内に入ったが、何事も起きなかった。暫くして、千葉常胤が南大門の下で大声で叫んだ。
「中には誰もおらぬ。平家の勢は我らを恐れ裏手から逃出したぞ」
千葉常胤の声で残りの千葉勢が次々と南大門を潜り東寺の境内の中へ入った。だが、義経は逆に平家の兵が一人も居なかった事に疑問を持った。
「重忠、一人も平家の兵がおらぬとは・・・・・。東寺の周囲に矢を射込んでみろ」

「何故、そのような・・・。あの寺は我らを誘い込む罠だと」
「それを確かめるのだ」
畠山勢はすばやく散り、東寺を取巻く大宮通り、壬生通りに面する闇に矢を射込んだ。
「ウェ」「ギャ」
闇の中で悲鳴が響くと同時に「ザ、ザザー」矢音が鳴り、赤い炎が揺れて東寺の境内に火矢が降り注いだ。
「平家の待ち伏せだ。楯を構え、矢を応酬せよ」
畠山重忠、結城朝充の声で、源氏勢も矢を闇の中に引き放った。
「義経殿、このままでは東寺の千葉勢は出る事もままならず、焼き殺されます。兵を出しますぞ」
畠山は自ら徒歩となり、大宮通りに面して火矢が放たれる闇へ千の兵を率いて向った。
「源氏の奴らを迎え討て」
平家の侍大将平盛澄の声が響いた。平家の兵も全て徒歩となり、大太刀、長刀を構えた。
薄暗い月明かりの中、平家、源氏の兵はお互いの目の前に現われた敵に、大太刀、長刀を振るい相手を倒そうとした。
平家の総大将平資盛も郎党に囲まれながら、目の前に現われた源氏の兵に自ら大太刀を振るった。
義経も郎党の佐藤継信、鎌田盛正、鎌田光政、伊勢義盛、片岡常春、武蔵坊弁慶、常陸坊海尊ら五十騎余を率い、平家の兵が矢を射ている廃屋敷の中へ踏み込んだ。
「義経様、あそこに輿が」
片岡常春が指し示した先は、庭の枯れた泉水の中に数本の矢が刺さったままの輿が置かれ、その輿の周りに十人ほど平家の兵がいた。
義経の郎党五十騎余りが輿に迫ると、平家の兵は戦わず逃出した。
「中に隠れておるのは、何者だ。我は源氏の総大将源義経である」
義経の名乗りを聞くと、輿の中よりほっとしたような声が響いた。
「我は蔵人の葉室光雅。中には院がおわす。院は矢傷を負っておら

れる」
蔵人の葉室が輿の網代を少し開けると、中で葉室に支えられた後白河院が上体を起こし、苦しげな声で言った。
「平家の勢はどうした。追い払ったのか、京へ戻れるか」
「今はまだ平家との戦の最中。平家に襲われぬ場所まで輿を移します」
義経は輿を郎党に担がせ、大宮通りを後退して東寺より離れた。輿の周囲に義経の郎党の他、畠山重忠が三百ほどの兵で従った。
薄暗い月明かりの中での戦。平家と源氏のどちらが優勢なのか見当がつかぬまま、平家の兵も源氏の兵も、ただ目の前に現れた相手に大太刀、長刀を振るい、同士討ちを行っていても気付かなかった。
半刻（1時間）も過ぎた頃、山崎の方より新たな数百、数千の松明が近づいてきた。
義経はその松明を見た時、院の輿を護る事を決意した。
「源氏か平家か不明の新たな軍勢が近づいて参ります。夜が明けるまで、一時的に避難します」
輿より返事はないが、義経は郎党に輿を担がせ十条通りから山科に抜ける道に向った。
東寺の周囲で争っていた平家、源氏の両軍の兵も、この新たな軍勢の接近に気付きどちらの味方が来たのか息を飲んで見守っていた。
新たな軍勢は東寺の手前二町（２００ｍ）ほどの処で歩みを止め、一騎の騎馬武者が進み出て大声で名乗りを上げた。
「我は平家の征東都督（せいとうとと）中納言平知盛様が郎党で伊勢の国の住人伊藤景清なり。山崎の地において源氏の勢を討払い、京へ戻ってまいった。この地で戦う平家者と共に勝鬨を上げ、源氏の勢を討払おうぞ」
景清の声に合わせるように、その後に並んだ平家勢より怒涛のような勝鬨の声が上がると、東寺の戦場の彼方此方でも勝鬨の声が上がった。
その場で戦っていた源氏の兵は一斉に太刀を納め、長刀を捨て、慌

ててその場より逃出した。
やがて、寿永四年（１１８５年）十一月十四日の朝日が昇り、辺りが薄明るくなった頃。
平家の総大将平知盛が号令をかけた。
「二年ぶりの京。まずは六波羅（ろくはら）へ向うぞ」
寿永二年（１１８３年）七月に平家一門が都落ちして以来、二年以上が経過していた。
知盛の声には歓喜が含まれている。この十月、長門の赤間が関（あかまがせき）（下関市）において、山陰道、山陽道の二軍に分かれた平家の征東軍はここで再び一つとなって京の町中へ向った。
だが、赤間が関を出た時は三万の数を数えた平家の軍勢も、数回の戦を経て今は二万に減り、その残った者の多くが腕や脚に傷を負い、傷を縛った布は血で赤黒く染まっている。
鎧の糸が解れ、袖は半ば千切れ、矢が刺さったままの鎧を着ている兵も多い。
腰の大太刀が激しい打ち合いで曲がり、鞘に収まらず抜き身のまま肩に担ぐ兵、刃が欠けたままの長刀を持つ兵もいる。それでも、平家の兵は戦に勝利した喜びを体で現わしていた。唯一、知盛が残念だったのは、一旦確保した後白河院の身柄を戦の最中に源氏に奪われてしまったことだ。だが、平家が京を回復し、安徳天皇が京へ戻る事になれば後白河院が平家の手の内に無くても大きな問題にはならない。
第一陣を進むのは山陰道軍の兵。平資盛の侍大将の平盛澄が率いる五百の平家本軍、田口重直が率いる阿波、土佐、讃岐勢六百、長門の紀勢二百、筑後の山鹿勢千五百、日向の宮崎勢千二百の計四千。
第二陣は宗盛の息子清宗の勢千八百、豊後の緒方勢三千七百、長門の岩国勢千五百の計七千。
第三陣は肥後の菊地勢の三千五百、薩摩の惟宗勢二千八百の計六千三百。
第四陣は総大将の征東都督（せいとうとと）中納言平知盛、山陰道軍総大将近衛中将

平資盛、水軍総大将能登守平教経が並び、平家本軍の兵千と水軍の兵二千八百が従った。
謝国栄は淀川を川船で摂津の渡辺津（大阪市中央区）へ下り、平家水軍の宋船で戦勝の報を持ち博多へ戻る事になっていた。

「京洛《きょうらく》の攻防」　その２（後書き）

ここまでで、一旦終了としますが、続編も考えています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1737l/

新平家戦記

2010年10月18日07時27分発行